

ふた、四州は南閩浮提ばかりでない東弗婆提も西鬘陀尼も北狗盧も即ち東西南北の四州八縣と云ふは語路のはづみて言ふたまでのことであると云ふことじや、其の四州にも八縣にも此の雪竇のやうに笑ふものは無いぞと云ふ、即ち雪竇の此の呵々大笑が直に是れ對一説て其れが其儘に雪老の一代時教を、更に同道の者方に知る、雪門と雪竇は好い道連であるから此呵々大笑があるのである、又能く幾人ありてか知ると云ふた謂ゆる同道の者は幾人も無からうと云ふて、門下後生を警醒せられた吾人も諸共に笑ふ仲間に入らねばならぬのである、然らば其れは何が其れほど可笑のであるかと云ふに、昨夜驪龍が角を拗して折つた、驪龍と云つたは此の無孔の鐵鎚のやうな問題を提出した僧のことで、一代時教と云ふ二本の角を擗げて來たのを對一説と其の角を折られてしまつた其れが可笑いので呵々大笑すると云ふのじや、圓悟が誰ありて見來ると云ひ又還つて證明するありやと云ふ、其の驪龍の角を拗折した實地を誰れが能く見届けて誰が其の證據人になるぞと云ふのである、此の公案の徹底し易からざる様子を重々丁寧に吾々に訓戒せられたことと思ふ、圓悟は更に啞の一字を下した、啞の字は説文に笑也とある即ち圓悟が雪

竇の呵々に和して諸共に笑ふたのである、然るに雪竇は更に別々として一轉した、雪門對一説は實に比類なき一代時教の答案ではあるけれども、尙ほ其上に別々すなはち更に一段特別の宗旨があるぞ、讚歎するに分ありと圓悟が言ひ尙ほ須からく是れ雪竇にして始て得べしと言ふた、其の別々の所を讚歎することは雪竇で無くては外に其人が無いと擗論した、そうして置て什麼の別處があるかと抑へたやうに言ふて吾々に其の別處を參究させる手段を運らされた、詔陽老人一槪を得たり一代時教の驪龍の角を雪門が對一説て拗折したには相違ないが、其れは二本の中の一木だけであつた、あとの一本は誰が何うして折るぞ、圓悟は其一槪什麼の處にか在ると言ひ又更に一槪あり阿誰にか分付すと云ふた、吾々も互ひ實參實究すべき所ぞ、圓悟は更に徳山臨濟も也た須からく退倒三千すべしと言ふ、參して此に至りては佛祖も退倒三千里よと云ふのである、然らば其の那一槪又作麼生、其角を何うするぞ、圓悟は斯うして拗折し得るぞとビシヤリ便ち打つ、モハヤ那一槪に取り着くべき所は無いぞ

第十五則 雲門倒一說

**垂示**殺人刀活人劍乃上古之風規是今時之樞要且道如今那箇是殺人刀活人劍試舉看

此の垂示は前の第十二則の垂示の前半と全く同文であるに依て再び解釋する必要は無し

**本則**舉僧問雲門不是目前機亦非目前事時如何倒退三千里

門云倒一說平出○款出○人口○也不得放過○荒神裏轉身

此の問は呈解問とも藏鋒問とも云ふ種類の問ひかたで己れの悟りを人に呈示するとき又は言葉の裡に他を遣り込めやうと云ふ意趣を含んだ時の問ひやうであると云ふことじや、**目前の機**と云ひ**目前の事**と云へば現在目前そこに顯はれて居る事柄(即ち事)又心の作用(即ち機)であるから誰にも辨見することが出来べきわけであるが、其れさへ遲鈍な者には俄に應對が出来ないのが通例である、例へば上杉

謙信が川中島で武田信玄に斬り掛けたとき、正當恁麼の時如何と言ひつゝ刀を振りおろしたと云ふことであるが、これは全たく**目前の機****目前の事**である、然るに信玄がネカサズ紅爐上一點の雪と答へながら軍扇で其刀を受け流しヒラリと身をかはして通れたと云ふ、實際に其んな問答があつたか無かつたかといふ歴史的の研究は且らく置き、信玄の一機一境なく、端的別なりである、然るに今は其の正當恁麼といふやうな**目前の機境**を超脱して、是れ**目前の機**に**非ず**亦**目前の事**に**非ざる**時如何と云ふのである、機に非ず事に非ずと云へば宇宙萬象の未だ形をあらはさざる以前か若しくは天地萬物みな其形を隠した後か、そこが此の問題を提出した僧の悟りの立場で亦た此問ひが頗る難問である所ぞ、圓悟が之を奪ふて、**跣跳して什麼をか作す**、**目前の機**も**事**も**跣跳**と**排**ひ除けて而して何うすると云ふことじや、こゝ問者を叱つて置いて更に**倒退三千里**しかし此の難問に遭つては誰でも退却するより外に致し方があるまいと言て次の答話を引起した、**門云く倒一說**コレは雲門の一癖で前には對一說と答へ今度は倒一說と答へた、一說と云ふ言葉には別に用は無し、對の一字倒の一字が肝要である、倒は顛倒の倒の字で此の問題が即ち

顛倒である、目前の機や目前の事に何の過が有て其れを排斥し、物めづらしそうに是れ目前の機に非ず亦目前の事に非ずなどと悟りを鼻に懸けたやうなことを言ふのであるぞと、倒一説の一言に其の問ふた僧の鼻を打ち折つた、圓悟が平出と着語した問も難問であるが答も亦た難答である賣り言葉に買ひ言葉さし引き残りが無いと云ふたやうなアンバイ款は、囚人の口より出づ、款といふは罪人の罪状を書いた文書のこととて、雲門大師が此の難問に對して思はず知らず其力量をあらはされたのが罪人の白狀のやうである、と評したのである、也、た、放、過、す、る、を、得、ざ、れ、レは圓悟が門下への注意で此の公案を等閑に附してはならぬぞと云ふた、放、過、と云ふは東京あたりの俗語にウツチャルと云ふほどのことじや、荒、艸、裏、に、身、を、横、た、ふ、コ、レに二様の見かたがあると云ふことである、其一は雲門の答が謂ゆる落艸て兒を感んで醜を忘れた姿ぞと見るのと、其一は雲門が此問に對して倒一説と答へた様子は猛虎が荒草の裏から威力を示すやうであると見る説じや、撰びは各自の参究に一任する、

**頌倒一説** 南時○七花八裂○須彌 **分一節** 南在○河邊○我邊○半河 **同生同死爲君**

**訣** 泥真洗土塊○著垂 **八萬四千非鳳毛** 有毛相似○太熟○滅入 **三十三人入虎**

**穴** 唯我能知○一將難 **別別** 有什麼別處○少 **擾擾忽忽水裏月** 青天白日○迷頭

此の頌も前則の頌と同じ鉢裁て例の如く本則の倒一説を拈起し來つて分一節と承けた分節と云ふは符節のことと問と答とがカチリと間に髪を容れる隙もなく能く合つたと云ふのじや、圓悟が第一句に放、下、と着語した、放、下、とは手ばなし得ないと云ふ意味で、雲門の答語を雪竇の手に握つてゐる形容、七、花、八、裂は例の如く七通八達の義とすれば雪竇の文才の自由をほめたのである、次の着語二つを一つにして須彌、南、畔、卷、き、盡、す、五、千、四、十、八、と続け、之を前の第十四則の答語對一説の下へ置くべきである、其れを後に錯つて此處へ入れたのであらうと風外老人が言はれた、實に其うであるかと思はれる、第二句の下に圓悟が備が邊に在り、我が邊に在りと云ふた符節であるから双方に同じものがあるはけよ、然るに半は、河、南、半、は、河、北、若しもソチラはソチラ、コチラはコチラと云ふやうであつたら何うしたもの

ぞ、しかし雲門と雪竇は好い道連ぞと云ふので、手を把て共に行くと言ふた、第三句に同生同死君が爲めに訣す、この句を圓悟が評して敢て爾が爲めに泥に入り水に入り同生同死すと言ふてある、即ち雲門が彼の僧の問題に向つて倒一説と答へたのは、彼れが爲めに慈悲深重なる所だと云ふのである、着語に泥裏に土塊を洗ふ泥の中で土塊を洗ふといふも、親が子の相手になつて老を忘れて徳をつひたり獨樂を廻はしたりして居ると同じやうな形容、甚の來由をか着く君が爲めに訣するなどと言はれるが、其れは何ういふ謂れ因縁か、とからかい、爾を放ち得す、何もお前がたに訣してもらはねばならぬ様な疑問は無いに、其様なことを言ふなら赦さぬぞと云ふた様子、コレで頌は濟んだが、あとは例の雪竇の文才が溢れるのである、八萬四千風毛に非ずといふは釋尊在世のお弟子は常に八萬四千の大衆と稱するが、其れが皆釋迦の嫡子といふわけには往かぬ、只摩訶迦葉尊者一人正法眼藏を傳へたのである、風毛といふことは宋の謝超宗といふ人が文章を善く書くので、孝武帝が超宗に風毛ありと稱讃せられた故事が本になつて、子能く父の美を繼ぐ者を風毛と稱すと云ふことである、即ち八萬四千の佛子が皆悉く佛の美を繼ぐわけ

には往かぬと云ふ意味である、そこで圓悟は、羽毛相似たりと言ふた、これも似たり合つたり謂ゆるどん栗の長くらべよ、けれども風毛に非ずなどと言ふては、太煞人の威光を減ず、佛弟子のねうちが無くなるては無いか、しかし昔も今も同じこととて漆桶のやうな目も鼻も分らない坊さんは麻の如く、栗の如く、いくらでも多く居ると云ふ、然るに其中から三十三人、虎穴に入る、これは第一祖の摩訶迦葉尊者から達磨大師まで二十八代、それから更に曹溪の六祖慧能大師まで六代合せて三十三代の祖師だちは孰れも皆尋常一様の修行ては無、命がけて虎穴に入て虎兒を捕ふるやうな參禪辨道の辛苦艱難を嘗められたのである、圓悟は、唯我れ能く知ると着語した、其の辛苦艱難の味ひは實地を踏んだ者でなくては知れぬ、雪竇も圓悟も皆同道の伴侶である、吾人も互ひは果して如何と反省せねばならぬ所ぞ、一將は求め難し、謂ゆる麻の如く、栗の如き漆桶連中の兵卒は幾らもあるが、其れを指麾する一人の大將は容易に得られない、然るに今三十三人の列祖の如きは皆野狐精の一隊よ、此の精の字は斯ういふときは一字で化物といふ意味である、かやうに三十三祖を稱揚して置て更に尙ほ一段特別の處があるのよと云ふので、別々と

言ふた、圓悟が什麼の別處か有らんと云ふ、三年に一聞あり難は五更に向て鳴く何  
も殊更に別段なことは無いはずだと抑へて、更に少賣弄や、もすれば雪竇は色々  
なことを言ふて押し賣りをする小賣人よと言ひ、しかし何となりとも言ふが好い  
と言ふので、躑躅に、一任すおどるともはねるとも御勝手よと云ふ、いよ／＼結句に  
擾々忽々水裏の月その別々な味ひは是の如くじや、かやうな句に至りては智解分  
別を以て彼れの此れのと論ずべきでは無い、只聲ほがらかに靜かに何邊も謠ふて  
見ろ言ふに言はれぬ妙味を合點する時節があらう、此れが雪竇の宗旨であると言  
ふ評判じや、そこで圓悟は青天白日と着語した、擾々忽々一點の雲烟も無い、然るに  
若しも文字の上に彼れの此れのと煩悶して居たならば頭に迷ふて影を認むと云  
ふものぞ、これは昔し演若多といふ人が暗い處で鏡を見て己れの頭が無いと云ふ  
て騒いだ故事、青天白日天地萬物歷々分明であるに、著忙して什麼をか作す、何も其  
様にワイ／＼騒ぐには及ばぬぞと云ふ、

第十六則 鏡清艸裏漢

**【無示】**道無横徑、立者孤危、法非見聞、言思迥絕、若能透過荆棘、  
林、解開佛祖、縛得箇穩密田地、諸天捧花、無路、外道潛窺、無門、  
終日行而未嘗行、終日說而未嘗說、便可以自由自在、展啐啄  
之機、用殺活之劍、直饒恁麼、更須知有、建化門中、一手擡、一手  
擲、猶較些子、若是本分事上、且得沒交涉、作麼生、是本分事、試  
舉看、

道に横徑なし道といふは佛祖の大道じや、佛祖の大道といふは宇宙萬象の全體ぞ、  
此の道は帝京に到る國道のやうなもので、天子も通れば乞食も通る、汽車も通れば  
草鞋も通る、牛も通れば馬も通る、本より無限の空間全體の大道であるから、横徑や  
小徑のあるへきて無いから、盲目でも蹇足でも自由自在に通れるはずである、其事  
を三祖大師は至道無難と言はれた、至極の大道は少しも難澁なことは無いといふ  
ことじや、それ故に立者孤危である立者といふは此の大道を通る者といふこと、即

ち宇宙の間に立て居る者は皆孤危じや、孤危といふは獨立自尊といふも同じこと  
 て、實に日月星辰山川草木みな悉く孤危獨立決して他の支配は受けぬ、花も獨立月  
 も孤危、眉毛は眼上に横たはつて獨立、鬚髯は鼻下に端居して孤危じや、此の間に  
 行はるゝ一切諸法すべての事物は皆天眞爛熳て人天鬼畜の支配は要せぬ、其事を法  
 は見聞に非ず言思通かに絶すと云ふた、人間の目に見たり耳に聞たりして氣に入  
 つたとか氣に入らないとか迷つたとか悟つたとか、口に言ふたり心に思ふたりし  
 て居ることゝは、迥絶すなはち大層な隔たりのあることぞ、若し能く荆棘林を透過  
 し佛祖の縛を解開し荆棘林といふは前に謂ゆる見聞言思のことて凡夫の情識を  
 以て彼れの此れのと妄想分別するのが、彼の大道の往來を妨げるから荆棘である、  
 佛祖の縛といふは凡夫の妄想すなはち荆棘林をば透過し得ても、更に佛經や祖錄  
 の名目言句に束縛されて、悟りに腰を掛けて居るのを言ふ、其の縛をも解開とトキ  
 ヒライて箇の穩密の田地を得れば己に迷悟を超越し凡聖を通りぬけて大安心の  
 場處に至つた上には諸天花を捲ぐるに路なし、コレは故事がある釋尊直門の須菩  
 提尊者が真空般若の悟りを開いて坐禪して居る處へ、帝釋天が現はれて來て花を

散らして供養したと云ふことが有て、前の第六則の頌の空主巖畔花狼藉といふ句  
 の下で話して置た通りのことである、結局須菩提の悟りが未だ穩密の田地といふ  
 處へは到り得なんだから、帝釋などに窺はれたので、眞參實究の人としては慚つべ  
 きことである、然るに今は其の諸天も花を捧ぐるに路なし、況んや九十六種の外道  
 輩などが何のやうに潜かに窺かはふとしても窺ふべき隙間がない、己に此の立場  
 に到り得た上に於ては終日行ても而も未だ嘗つて行はず終日説ても而も未だ嘗  
 つて説かず朝な夕な寝ても起きても都べて皆其儘に佛祖の大道であるに依て、こ  
 れが道であるとか此れが法であるとか痕迹の見るべきものは無い、味噌の味噌く  
 ささ匂ひがスツカリぬけてしまふたのであるから、其味ひ言ふべからざる妙があ  
 る、こうなつてこそ初めて便ち自由自在を以て、碎啄の機を展べ、殺活の劍を用ふ可  
 し、碎啄といふことは此の公案の眼目であるがコレは鶏が卵を温ためて孵化させ  
 る時に、己に卵の中の子が殻を破つて出やうとするとき、内からコツ／＼とつ／＼と  
 のが碎て、其時に寸分の時間もたがへず母鳥が外からもコツ／＼とつ／＼と破るの  
 を啄といふ、即ち碎啄同時であるのを今禪宗の師家と參學の弟子との間に譬へた

ので例へば釋尊が花を拈じたのを迦葉が莞爾と微笑した此の間に分厘の隙間もない即ち啐啄同時である此の機会が得られてこそ門下の學人を殺そうとも活かそうとも否な悟らせやうとも迷はせやうとも自由自在に働らせることになるぞと云ふのじゃしかし尙ほ直饒憊なるも前に言ふた程の處に到り得たにしても更に須からく建化門中に一手は擧げ一手は擱ること有るを知りて猶ほ些子に較るべしコレは衆生濟度の方便で建化門といふは化導の方法を建設する側といふことじゃ兩手を垂れて衆を接するのであるけれども時としては其手を上げて人を進めたり又は其手を下げて抑へつけたりしなければならぬさりながら若し是れ本分事の妙上ならば且得没交涉方便を離れて衲僧本分の働きとしては前に言ふた一手は擧げ一手は擱るといふやうな手ぬるいことはして居らぬぞ且得没交涉といふは俗にヨツテモツケヌと云ふほどのことぞ作麼生か是れ本分の事試みに舉す看よ其の本分の事は本則で知るが好い

**本則** 舉僧問鏡清學人啐請師啄無風起浪作什麼用許多見解作什麼清云還得活

也無就前○其相○不可○捨○僧云若不活遭人怪笑相○帶○累○擗○天○清云也是

艸裏漢果○然○自○領○出○去○放○過○即○不○可○

鏡清道徳禪師は雪峰和尚の法嗣で前則の雲門とは兄弟弟子である常に啐啄の機を以て後學に開示するとあつて前に申した雞の子と母とが卵を内外から同時に打ち破るが如き機会がなくては眞實の禪味を味はへることは出来ぬと言はれてあつたそこで今此の問を起した僧も其の機会を以て學人啐す請ふ師啄せよ學人といふは自分をさしたので私くしが卵の中からコックとやりますが、どうぞ貴方が外からコックとあやり下されと云ふた即ちモトたしかに悟りが開けるばかりに成て居りますからどうぞ貴方の御方便で早く悟らせて下さりませと云ふたのである、こゝて若しも母鳥たる鏡清のツ、キ様が一つ間違へば卵の中の雛が死ぬか活するか分らない又いくら母鳥が能く機会をはづさすに外から啄しても中の雛が未だ啐し得ないやうなことでは是れまた其雛の育ちやうは無い君臣の間も父子兄弟の中も夫婦朋友の交はりも其實は皆この機会一つである、さりな

ら垂示に謂ゆる本分の事から言ふときには一切衆生本來成佛て今さらに悟るも悟らせるも有つた話では無いのに、此の僧が事めづらしそくに學人碎す請ふ師啄せよなどは誠につまらぬ事であると云ふので、圓悟が風なきに浪を起して、什麼か作さんと叱り又許多の見解を用ひて什麼をか作すと抑へた、果して母鳥の鏡清が返つて活を得るや也た無やと答へた、一鉢本統に碎啄同時の機であつたならば水さへあれば招かずとも月影がチラリと映るが如く、どちらが先きでどちらが後といふやうな次第のものでは無い、然るに學師碎す請ふ師啄せよなどと他力を求むる様ではたとへ此の母が啄してつかはした所で活きて働らき得るとやら死て生れることやら覺束ないぞと言はれたのである、他力を本旨とする念佛宗でさへもたのむ一念のとき往生一定おんたすけ治定と申して、吾々が助けたまへと頼む心の決定するのか先きで、彌陀が其れを助けてつかはそうぞと云ふのが後であるといふ様なわけのものでは無い、況んや自力の極點たる參禪の衲僧が請ふ師啄せよとは何たる遅鈍ぞ、圓悟の着語に割と一字を下した、割は竹の針で物を刺すとそらじや、此僧果して痛痒を感ずるやら感ぜぬやら更に帽を買ふに頭を相すと云ふ

た頭の寸法に相當した帽子でなくては役に立たぬから、鏡清が問者の頭相當の帽子をかぶせたぞ、しかし本分の上から申せば鏡清が返て活を得るやなど、言ふのも抑も間違ひぞ、何を死ぬの活きると言ふのであるかと、將錯就錯、間違と間違との衝突よと双方を抑へた、更に總べて、恁麼なる可からず、誰も彼も皆死人ばかりとも言はれまいぞと鏡清に對するやうにして、門下後學の吾々までをも圓悟が見廻はしたかと思はれる、吾人互ひ果して能く活を得るや也た無やと反省せねばならぬ、然るに此僧も亦たさるもので中々屈しない、若し活せずんば人に怪笑せられんと突込んだ、活きられるかと仰せられるけれども活きないで何と致しましやうぞ、若しも活きられなかつたならば世間の人の笑ひ草にされるでは御座らぬかと十分活きて働らいたつもりであるが、元來活も不活も無いはずの事を笑ふの笑はれるのとは何たる愚ぞと云ふので、圓悟が相帶累すと着語した其様な馬鹿を言ふて居ては其方ばかりでなくて他人の迷惑になるぞと叱つた、しかし活を得るやと威嚇されたにも驚かず人に笑はれますなぞと厚顔に出かけた勢ひは中々天を撐へ地を拄ふる力があるぞと冷かし、其口で更に擔板漢と叱りつけた、板を横に擔ふ



た男が狭い道を通るときには前方へ進むばかりで横を見ることは出来ない、日本の近頃の俗諺で言はゞ馬車馬と云ふべき所、即ち向ふ見ずと云ふことじや、消云くも也。た是れ草裡の漢、此の僧自分では十分に活きて働らいて孤峰頂上に向上し得るつもりであらうけれども氣の毒なことには草裡の漢で、啐啄同時の場合には中々遠い、圓悟が果然と言ふた疾から其う思ふて居たが果して其の通りであつた、自領、出去は例の如くお手前御自分で持ち歸りなされと云ふのであるから、圓悟が鏡清に對してお前も好い加減に此の様なつまらぬ僧を打ち棄てたが善からうに、いつまで相手になつて御座るぞ、草裡の漢は却つてお手前のことになるぞと抑へた、とは云ふものの此の公案を放過しては、不可かりそめに思ふてはならぬぞと門下後生を警醒せられた。

**頌古佛有家風**

首領在耳○古榜樣 對揚遭貶剝

**子母不相知**

証不相知○爲升 是誰同啐啄

**在、敲頭來、重遭撲**

案○三重四重了也 天下衲僧徒名遊

也是草裏漢○千古萬古無一  
漢漢○填滿空無一人會

古佛といふは近くは釋尊をさし廣くは三世諸佛を謂ふけれども概して歴代の列祖も皆古佛じや、即ち佛祖家傳の風習が古佛の家風である、其れは如何なる家風かと云ふに即ち啐啄の機で、對揚、貶剝に遭ふ、對揚といふは人に對して其道を擧揚するといふ意味、即ち問答商量といふ場合になれば閃電光擊石火といふ機合で、間に髪を容るゝとを許さぬ、圓悟は其の例に釋迦と雲門との對揚を擧げて居る、釋尊が初めて生れたとき直に天地を指さして天上天下唯我獨尊と言はれたと云ふのは、これが今の禪宗で謂ふ所の公案の濫觴であらう、然るに雲門は千數百年の後に生れて之と對揚し、釋迦は生れながらに其様な言はずも好いことを言ふて人を騒がす、若し吾雲門が其の時に居合はせてあつたならば、一棒に打ち殺して犬に喰はせて了ふのであつたに、其うすれば佛だの法だの悟りだの迷だのと云ふ面倒なことが無くて、天下泰平であつたらうにと云ふたことを引合に出して、これが乃ち對揚、貶剝に遭ふと云ふものぞと言はれてある、貶はオトシメル義、剝はハグと

云ふ字で俗に面の皮を引きひくなどと云ふやうな意味である、これが歴代佛祖の家風であるから、今鏡清が此の問題を提起した僧に對揚して、還て活を得るや也た無やと貶刺したのも家風の實行に外ならぬのである、故に圓悟が言猶ほ耳に在りと言ふた、釋尊以來歴代の祖師たちの貶刺のやりかた耳に聞き覚えのあることよと云ふのである、それが千古の榜樣で、後來參禪學道の標準手本とすべき所ぞ、釋迦老子を謗すること、莫くんば好し、其れが古佛の家風であるなど、言ふては何やら釋迦の胸中に一物あるやうに聞えるに依て佛を誹謗するに成りはせぬかと云ふ、ナゼかといふに天眞爛熳のところには家風だの軌則だのと云ふべきものの有るべきでは無いからである、第二句の下に圓悟が鼻孔什麼として、か却て山僧が手裡に在ると言ふた、コレは雪竇が貶刺を古佛の家風であると言ふが其の古佛どもの鼻孔も皆われ圓悟の手の裡に在り殺そうとも活かそうとも自由にするが何うじやとの大氣焰、即ち圓悟の貶刺のしかた碧巖窟の家風を示した、八棒十三に對す八棒といふも十三棒と云ふも皆支那の昔の治罪法で、罪科の輕重に従ひ棒で撃つ數に多少がある、其れを借りて今雪竇が一言で此の公案を頌した妙處を稱賛した

言葉である、鏡清が二度も三度も言語を弄して遂に草裡の漢と言ふたよりも、雪竇が對揚貶刺と言ふた意味が優れて居ると云ふことと見える、爾作廢生コレは門下および吾々までに圓悟が示されたのである、貴様だちが此のやうな貶刺に遭ふたら何うするぞと言ふのじや、實に工夫を要する所ぞ、更に一着を放過すしかし也た是れ草裡の漢と云ふ位の貶刺は未だノ、手緩い放過のしかたよ、もしわれ圓悟ならばと言ふので、便ち打つ子母相知らず是れ誰れか同く啐啄す、一鉢に子が啐し母が啄すと云ふけれども、其の母は卵殼の内に居る子の境界を知るはづがなく、其の子は卵殼の外に居る母の境界を知るはづがない、互ひに相知らずして而して同時に内から啐し外から啄すると云ふは、是れは一體誰れが啐啄させるのであるぞ、只々互ひに自己の本分を天然自然に實行するので本より他の事に關はるものではない、乃ち師が弟子を悟らせることも出来ねば弟子が師に悟らせてもらふとも出来るものではない、自悟自得の外は無いのである、圓悟が既に相知らず什麼としてか却て啐啄あると言ひ、更に果然と言ふた自問自答のやうである、果然と云ふ一語に不可思議不可說不可商量の意を十分に説明せられて居る、百雜碎と打ち撞いた

啐の啄のと面倒な只一打ちにと云ふアンバイ其れを雪竇が是れ誰か啐啄するな  
 どと指註するは老婆心切よしかるに其の老婆にひかされて且らく錯て認むるこ  
 と莫れと門下へ注意した啄すれば覺すコレは鏡清が還て活を得るやと啄すれば  
 此の僧が活せずんば人に怪笑せられんと覺した様子を言ふ圓悟が什麼と道ふぞ  
 と咎めた前に誰れか啐啄すと言ひながら又啄すれば覺すとは自語衝突ては無い  
 か第二頭に落在すモ一何も言はぬが好いのの色々と言ふから第一義を失ふてし  
 まふたぞ猶ほ殼に在り彼の僧が鏡清の活を得るやと言ふ啄に應じて活せずんば  
 人に怪笑せられんと覺したから卵の殼から飛び出したかと思ふたに、お氣の毒な  
 ことには猶ほ卵の殼の中にヒョ／＼して居る、一鉢に此の僧が活を得るやと言は  
 れた時に直に其の活といふ言葉に取り附いて謂ゆる句下に死在したのであるか  
 ら自由の轉處を得られないで活せずんばなどと言ひ出したのである、圓悟が何ぞ  
 出頭し來らざるナセ殼を飛び出さないぞと言ふ重ねて撲に遭ふ此の撲の字は打  
 撲の撲の字でウツと云ふ字であるがこゝては啄の字の代りにツ、クと見れば分  
 り易い、雞が殼を出えないから母の深切て又ツ、イた何と撲したぞ也た是れ草裡

の漢と貶刺せられた着語に錯それは見込違ひてあらうぞ我ならば斯うじやと便  
 ち打つ、兩重の公案、三重、四重し了れり、啄だの撲だのと蹈たりよしかるに此  
 の草裡の漢と貶刺せられた機会が中々容易に合點がゆかぬので、天下の稱俗徒ら  
 に名貌す多くの參禪の人だちが彼れの此れのと色々の名を附けたり貌を想像し  
 たりして眞實徹底し得ぬぞと結ばれた着語に放過了也まことに雪竇の言ふ通り  
 大かたは此の公案を放過してしまふて居る、舉起すべからずモ一幾ら言ふても役  
 に立たぬからしかし、還て名貌し得る底ありや、若し名貌し得るも也た是れ草裡の  
 漢ナゼかと云ふに元來名貌し得べきものでは無いからである、

第十七則 香林西來意

**垂示** 斬釘截鐵始可爲本分宗師。避箭隈刀焉能爲通方作者。  
 針割不入處則且置。白浪滔天時如何。試舉看。

釘を斬り鐵を截ると云ふは銳利なる刀劍の如何なる堅き物に遭ふても豆腐を斬  
 るが如くにスラリと斬れる様子、其れと同じ様に如何ほど難透の問題に遭ふても

自由自在に樂々と答へ得て再び人に口を開かせないのを斬釘截鐵の機と謂ふ、其れこそ始めて達磨門下の本分を全うした宗師と謂はれるのぞ、然るに若し箭を避け刀に限ると戦ひに臨んで巧に敵の箭を避けヒラリと刀の下を潜ると云ふ様なことをするの、才子とか伶俐とかは謂はれるかも知れんが、焉んぞ能く通方の作者と爲さん、前の句に隈刀とある隈の字は廻の字と同韻で通用する即ち廻避と續く熟字を分けたのであると云ふことであるが、大かたはカクレルと訓む慣習になつて居る、又この通方は百方に通達する意味で事に當りて自由自在の義、作者と云ふは前にもあつたと思ふが唐宋の頃は詩文が盛んに行はれたために、格別に秀逸なる人のことを作家だの作者だのと稱したものと見える、針割不入の處は、則ち且らく置く針を割すべき隙間もない深密の場合に別として、白浪滔天と大議論の湧きあがつて來た時には何うしたものぞ、試みに擧す看よ、

**本則** 擧僧問香林如何是祖師西來意 大有入疑者○稱 林云坐久成

勞 魚行水濁鳥飛落毛○合取向  
口好○作家眼自○鏟解釋

益州青城の香林院澄遠禪師は雲門大師の弟子で十八年の間雲門に隨侍して居られた、住山の後四十年を経て示寂せられたのが八十の年であつた、愈々臨終といふ時に病も何もなくて常に外護してくれてあつた知府事の宋公瑤と云ふ人に暇乞して老僧は是れから行脚に出かけますと云ふた、大通判の某と云ふ人が其れを聞いて居て彼の老僧は發狂したので有らう、八十の老人が何うして是から行脚すなはち遊歴などに用られるものかと云ふた、宋公は其れを打ちつけて大善知識去住自由なり何んなことをするのか分らんと云ふて居たが、遂に大衆に對して老僧四十年方打成一片と言つて其儘瞑目してしまふたと云ふ高僧である、此人に或る僧が如何なるか是れ祖師西來意と問ふた、祖師と云ふは達磨大師その大師が西域の天竺から東方の支那へ何をしに來たか、其意旨を聞きたいと云ふのが當時大流行の問題であつたから、昔から祖師西來意の問答は幾らもあるが、香林は之に答へて坐久成勞と言はれた坐久成勞と云ふは人と長時間對談などした時に、其の話も畢りてお別れと云ふ場合に至り、イヤ長い間サゾ御疲れてありませうといふ挨拶の言葉である、其れで此の問答を俗語で言ひ直して見れば、彼の達磨大師は何うい

ふ考へて支那へお出になつたので御座りましやうか、ハイ長い間お坐りてお疲れでありましやうと云ふことになる、そこで大概のものは大師が九年面壁で長い間少林山に尻の腐るまで坐禪して居られたと云ふことであらうと此の公案を解して居るのであるが、其の様な淺はかなことなら何も香林の香林らしい所もなければ、又雪竇が殊更に頌出する價值もない、然らば何うであらうかと云ふに圓悟は問案の下に大に人の疑着する有り、と着語した、實に是れは大疑着のある所で此の疑問の解決が本統に出来れば本分の事畢ると謂ふべきである、ナゼかと云ふに第一則の處にも寶志和尚が武帝に答へて觀音大士が佛心印を傳ふるために西來したのであると云ふたが、一躰に佛心印と云ふものは人に傳へられるものであらうか、又人から傳へられるものであらうか、志公の註解も甚だおぼつかない、又大師が自から言ふた偈に吾本來、此土傳法救迷情、と言はれたが、これ亦前と同じこととて法は傳授すべきものであるまい、況んや迷情を救ふなどは奇怪なこととて元來迷情だの悟道だの救ふの救はれるのと云ふ沙汰は、苟くも本分の齟齬の齒牙に掛くべきことではない、乃ち然らば祖師の西來意はたして如何と參究せねばならぬのじや、

圓悟は猶ほ遺箇の消息あること、在り此の疑問は疾うに決了してあるかと思ふたに、まだ此の様な議論があるのかと云ふ、答話の下に魚行けば水濁り、鳥飛べば毛を落す、元來祖師西來意は言句を以て答へらるべきでもなければ、其他に如何なる方法を用ゐても、之に適當すべき手段は無いはずであるに、香林が坐久成勞と答へたのは實に言ふに言はれぬ所を能く言ひ得た、其のわけはと此れから先きを講釋すると専門の禪師たちに叱られるから言はない方が好いが、少しばかり内々に言ふて見れば前にも申した通り坐久成勞といふ言葉は師家だちが衆のために説法をして、モ一説き畢つた時の結語に聽衆への挨拶としてイヤ長談義で御迷惑であつたらうと言ふのであるから、今も祖師西來意は其の西來以前より千佛萬祖イナ宇宙萬象が日々夜々に説明し畢つて居ると言はれたので乃ち坐久成勞である、けれども已に坐久成勞と言ふただけ早や其言葉の痕迹がのこる、その様子を魚が行けば水が濁る、鳥が飛べば毛を落すやうなものぞ、水に跡は附かんやうなもの、やはり水が幾らか濁ると云ふたのである、故に更に狗口を合取せよ、犬の口を塞げと云ふので、除計なことを吠えるなど叱るのじや、作家の眼目しかし香林の答話

はサスガに作家ぞと稱揚し、更に鋸解稱鑑これは解不得と云ふ意味の俗語である  
そうなる如何なる鋸でも鐵鎚を挽き切るとは出来ないやうに此の公案も鐵鑿頭  
て誰も容易に齒は立たぬぞと云ふのである。

頌 一箇兩箇千萬箇

何不依而行之○如麻似 脱却籠頭卸角駄 從今日去應

左轉右轉隨後來

影響響響○便打 紫胡要打劉鐵磨 山僧物折拄杖子

得也未 過後張弓○ 便打○

一箇兩箇千萬箇籠頭を脱却し角駄を卸すこれは權兵衛でも太郎作でも誰でも彼  
れても此の如何なるか是れ祖師西來意坐久成勞を悟り得さへすれば皆ことく  
く籠頭を脱却し角駄を卸して自由自在の身になるぞと云ふのじや、一箇兩箇と云  
ふは一人二人と云ふことであるが、近頃我國の俗人だちが人を數へるのに一名二  
名と言ふが、古へは使はない言葉である漢文などで書くには是非とも一人二人と  
書かねばならず俗語でも一箇二箇と書くべきである籠頭と云ふは馬の鼻先を束  
縛して置くもの角駄と云ふは馬に負はせる荷物のことじや、如何なるか是れ祖師

西來意坐久成勞の自得が出来れば、はだか馬が茫々たる原野を勝手氣儘に飛び廻  
ると同様に、都べての煩悶惱苦を解脱して灑々落落と云ふのである。然らば其の  
坐久成勞とは何のやうな面倒なことか、長く坐つて居れば尻が痛くなると云ふこ  
とよ、口が暮れば暗くなり夜が明ければ明るくなると云ふことよ、圓悟が第一句  
に何ぞ依て之を行せざる、誰でも彼でも法の如くに修行さへすれば釋迦も達磨も  
權兵衛も太郎作も差別は無いぞ、麻の如く粟の如く百千萬箇いくらもあるぞ、い  
らも有りはするが群を成し隊を作してどん栗の長くらべは何を、か作さん第二  
句の着語に今日より應に須からく灑々落落たるべしと自由自在の境界を評し、更  
に還て鉢得すや也、未だしやと門下を警醒せられた左轉右轉後に隨ひ來らば紫  
胡劉鐵磨を打たんことを要す、これは更に吾々互て參禪の者を誡められたので、  
此の公案に限つたことでは無い、左轉右轉と種々様々なことに氣迷ひして誰れが  
斯う言ふたとか何の經論に何う言ふてあるとか他人の跡尻を追ひあるくやうな  
こととて有らうならば、たとへ如何ほどの學問をしても何のやうな修行をしても何  
の詮も無いのであるから、紫胡和尚が劉鐵磨を打ちなぐつたやうに一棒を喰はせ

るぞと雪齋禪師慈悲深重の言葉である。紫胡と云ふは傳燈錄には子胡と書いてある。即ち衢州子胡巖の利蹤禪師と曰ふ人て彼の名高い南泉和尚の弟子である。其頃劉鐵磨といふ比丘尼て豪傑があつた。此の老婆の機鋒峻峻なものには諸方の男坊主等が時々痛い目に遭はせられるので、除ほど名高い比丘尼であつた。然るに或る時一人の比丘尼が此の子胡巖の利蹤禪師を尋ねて來た。子胡はチラリと見るやいなや汝は是れ劉鐵磨なることなしやと聲をかけると、果して此れが劉鐵磨であつたが知らぬ顔して不敢と答へた。日本の俗語で言ふたなら何う致しましてと言ふたやうなアンバイ。子胡は更に左轉右轉とアビセ掛けた。何を迂路くして歩くぞと言ふたやうなぐあひ。劉鐵磨もスカサズ和尚顛倒すること莫れと言ふ聲の絶えぬ間に子胡は鐵磨をビシヤリと擲つた。これは元來鐵磨の方から和尚顛倒すること莫れと言ひながらドシンと子胡を打つべきであつたに、惜いとは逆振に子胡に打たれた。此の故事を雪齋がこゝへ引出して來たのである。圓悟の着語に猶ほ自ら放不。左轉右轉して居る様を前の馬の荷物のことに引き掛けてマダく荷物を卸し得ないと言ふたのじや、影々響々他人の後尻を追ふてあるく様で影に影が

重なり足音に足音が響く、便ち打つと目を醒まさせる。結句の着語に、山僧は拄杖子を拗折して更に是の令を行はす。山僧とは圓悟自分のこと。左轉右轉の鈍漢を打つたからても死馬を鞭つやうなものよ。故に吾ならば棒を棄てしまふて打つことはせぬ。然るに雪齋が此の鈍漢を打つと云ふは、賊後の張弓て盗人すみての棒ちぎりて何の効もないぞ、と言ひつゝ、便ち打つ。これが圓悟の令を行する所か、峻ア、危ういところであつた。

### 第十八則 肅宗請塔様

此の一則は垂示がなくて直に本則じや。

**本則** 舉肅宗皇帝宗此是代問忠國師。百年後所須何物。起換待摩○者老

國師云。與老僧不可指東作西作箇無縫塔把不。帝曰。請師塔様好與

國師良久云。會麼停因長智。帝云。不會直得指東對西。帝曰。請師塔様好與

國師云。吾有付法弟子耽源。卻請此事。請詔問之。不與他本分功料○何

放動人好 ○國師遷化後可憐○果然帝詔耽源問此意如何在子承父業去○也落

源云。湘之南潭之北也是把不住○兩兩合雪竇着語云。獨掌不浪鳴

山形挂杖子拗折了也○也無影樹下合同船祖師變了也○雪竇着語云。

海晏河清洪波浩渺白浪滔天○瑠璃殿上無知識唯消息○是誰分上事雪竇着語云。

唐の肅宗皇帝は玄宗の子で深く禪宗に皈依し別して忠國師を尊崇せられてあつた。忠國師と云ふは六祖慧能大師の法嗣て名を慧忠と曰はれた人であるが肅宗よ

よび其子の代宗皇帝と二代の天子の師であつたから單に忠國師とばかり稱されて居る。初め南陽の白崖山香巖寺に住して居られたのを代宗の時になつてから西京の光宅寺と云ふへ招請せられた。古へから天子の禮遇を受けた人も多くあるが此人ほどのは少なからうと思ふ。或時參内して宮中で說法せられたとき既に事畢りて寺へ歸られるのを肅宗皇帝が國師を風轂に載せて天子みつから車を御して送られた。臣下の人だちが餘りの事に呆れて御不都合では御座らぬかと諫めたが天子は益々敬重を加へられたと云ふことである。此の國師が遷化せられたのは代宗の大曆十年であるから此の本則の問答は肅宗では無くて代宗である。國師いよ御臨終といふのであるから代宗皇帝御臨幸になつて訣別の御問答である。百年の後頌むる所何物ぞ百年といふことは世間普通のことて天子には萬歳といふが一般の人には百年の壽命を最上とするのであるから貴僧の死なれた後に何ぞお望みがあるなら遺言なされといふ勅語であつた。これは人の臨終に訪問した時には誰でも言ひそな一通りの挨拶に過ぎないやうであるけれども、サスに代宗も長い間參禪して國師の提携を受けて居るのであるから、あのつから言葉の中に本分の響きが聞える。しかし國悟は之を抑へて預め搔て痒を待つ痒くもない處を豫かじめ搔て置て今に痒くなるかも知れんからと云ふやうな馬鹿なことがあるか。百年の後よりも即今所須何物ぞとナセ參究せぬぞと叱るのじや。果然として模を起し様を齎く幾ら參禪したなどと云ふてもドゥセ本統の者ではあるまい



と思ふて居たが果して模を起し様を畫ぐ有りふれた形式だけのことよ、老々大々として這の去就を作す四百餘州の君主として一天萬乗の君と仰がる、身分でも此場に臨ては此のやうな始末かと罵しつた、更に東を指して西と作す可からず此の着語は次の國師の答に對して豫じめ頼ばぬ前の杖をつかせたのであると云ふことじや、國師云く、老僧が與めに箇の無縫塔を作れ、サスガに國師じや直に自分の事を以て答へられた死んだ後に墓へ塔を建てるとか碑を立てるとか云ふは普通の事であるか、國師の望む塔は無縫塔と云ふのである、丸いとも四角とも長いとも短いとも高いとも低いとも都べて其の様な形の見えるのでは無縫でない、無縫といふは縫目がないと云ふことであるから當今の言葉で言へば無形といふも同じとてある、ドウぞ拙僧が死んだら無形無象の塔婆を建て、下されと云ふ註文じや、無形無象の塔は法界塔婆と申して宇宙万象其儘に嚴然たる大塔である、吾々お互ひの本體本性すなはち花となつては紅に咲き柳となつては綠に芽出す其れが其儘無縫塔である、國悟は把不住と着語した、取り留めの附かない言ひやうぞと言ふのじや、代宗はスカサズ請ふ師塔様、その望みの無縫塔と云ふのは如何なる象て

何うして作りませすのか御指圖を願ひたいと突込んだ着語に、好し、一割を與ふるに割は前にもあつた通り針を刺すこととて代宗が一本チクリとやつたのを賛成したのである、國師良久して云く會すや此の良久といふことはヤ、ヒサシと云ふ字であるが暫時黙して萬機を停止して居る姿である、而して置いて會すや御合點がゆきましたか、國悟の着語があかしい、囚に停まつて、智を長す罪人が懲役に遣られて益々悪い智慧が増したやうなぐあひで、國師は良久して居るうちに利口になつたと罵る、更に又直に得たり、東を指し、西を劃し、南を將て北を作すことと抑へ其れ見ろ良久して會すやなどと子供だましをやらかす、結局無縫の塔様が言葉にも形容にも何うして顯はすことが出来るものか、直ちに得たり、口の圍檐に似たるを圍檐と云ふは支那の勞動者などが荷物を背負ふときに背中へあてる木のことで日本の形容で云へば、への字形といふやうなこと、即ち何とか言ひたいと思ふても言ひ得られない時の口つきを圍檐に似たりと罵るのである、帝云く、不會イヤ頓と合點かゆかぬぞ、此の不會といふことにも二様ある、前の第一則に達磨大師が武帝に對して不識といふたのと又武帝が志公に對して不識といふたのと言

葉は同じ不識であるけれども、其意味は天地の違ひであるやうなもの、又譬へば惡逆な子が孝といふことを知らないのも、最善なる孝子が孝行を盡しながら其れを孝とも知らず只其本分を全たうして居るのも、孝を知らぬと云ふ言葉は同じである、今此の不會も代宗果して本分の上から迷悟を超越しての不會であらうか又は俗に謂ゆる本統に國師の眞意が分らぬのであらうか、國悟は頼ひに不會に遭ふ好くも不會と答へられたぞと揚げたけれども更に當時更に一拶を與へて伊をして満口に霜を含ましめば却て些子に較れり代宗にモ一一段の力をもたせたかつたと言ふた、國師云く吾に付法の弟子耽源といふものあり却て此の事を諳んず諒ふ詔して之に問ひたまへ耽源といふは國師の法嗣て吉州の耽源寺に住して居られた應真禪師のことである、着語に頼ひに禪床を掀倒せざるに値ふもし代宗に峻峻の機があつたならば國師の禪床を引くりかへして臨終の國師に痛い目を見せるであつたらうに、代宗が鈍いから好いアンバイに弟子の耽源に代らせることが出来た、何ぞ他に、本分の草料を與へざる國師も亦た手ぬるいては無いか帝が不會といふた時に本氣になつて國師らしい手際を見せれば好かつたにと此れは國師の

方へ向つての着語、人を擦胡すること、莫くんば好し然るに弟子の耽源に問ひなされなどと人を馬鹿にしたやりかたでは無いか、擦胡は穢がす義て人に無禮なことをするなといふ意味である、一着を放過す何う考へて見ても弟子に譲られたのは手ぬるいやりかたであると重ねくの抑へやうである、國師遷化の後に帝耽源に詔して此意如何と問ふ着語に惜む可し國師の在世に不會それを今ごろ此意如何と他人に問ふとは何事ぞ、果然として定盤星を認む國師が耽源に問へと言へば耽源でなければならぬやうに思ふて居る、其れが抗を守ると云ふものぞ定盤星のことは前にもあつたと思ふが權衡の目のこと、品の輕重次第に目方のかはることを知らずに同じ目ばかり見て居る愚さを定盤星を認むといふのである、子は父の業を承け去る耽源が師匠の豫言にそむけぬは已むを得ぬ次第なれども也、た第二頭第三頭に落在すと帝の意氣地なさを抑へる源云く湘の南潭の北これは四句一首の偈を以て無縫の塔様を頌したので一句毎に雪竇が着語を以て相鍵を打つて居る、湘の南潭の北は太平洋の南シベリアの北でも開花の前落葉の後でも何處でも好い何時でも好い雪竇の着語に云く獨章は浪りに鳴らす隻手の聲は容易に

聞えぬから已むを得ず南だの北だのと言ふて方角を示すのよ、其實は隻手の聲といふさへに早や第二第三である。圓悟が也、た、是、れ、把、不、住、耽、源、も、亦、た、取、り、留、め、の、附、か、ぬ、こ、と、を、言、ふ、か、と、抑、へ、更、に、兩、々、三、々、什、麼、を、か、作、す、帝、と、云、ひ、國、師、と、云、ひ、耽、源、と、云、ひ、幾、人、も、幾、人、も、よ、と、云、ふ、た、ア、ン、バ、イ、半、開、半、合、分、つ、た、や、う、な、分、ら、な、い、こ、と、を、と、抑、へ、る、雪、竇、の、着、語、の、下、に、圓、悟、が、一、盲、衆、盲、を、引、く、と、言、ふ、た、雪、竇、が、盲、人、の、先、達、を、勤、め、る、そ、う、な、隻、手、の、聲、が、聞、え、ぬ、と、い、ふ、側、か、ら、言、へ、ば、聲、啞、の、先、達、か、も、知、れ、ぬ、果、然、と、し、て、語、に、隨、て、解、を、生、ず、雪、竇、が、耽、源、の、口、先、に、轉、せ、ら、れ、る、や、う、に、見、え、る、ぞ、邪、に、隨、ひ、惡、を、逐、ふ、て、什、麼、を、か、作、さ、ん、そ、も、一、國、師、が、無、縫、塔、を、作、れ、な、ど、い、ふ、た、の、が、邪、惡、の、第、一、ナ、ゼ、か、と、い、ふ、に、法、界、塔、婆、す、な、は、ち、吾、人、の、本、體、本、性、は、人、に、作、つ、て、も、ら、ふ、べ、き、も、の、て、は、無、い、そ、れ、を、耽、源、が、南、だ、の、北、だ、の、と、餘、計、な、こ、と、を、云、ふ、の、が、第、二、の、邪、惡、そ、れ、を、又、雪、竇、が、相、鎚、を、打、つ、と、は、何、事、ぞ、と、抑、へ、た、の、て、あ、る、中、に、黃、金、あ、り、一、國、に、充、つ、前、の、句、は、無、縫、塔、を、建、て、る、場、處、を、定、め、た、の、て、此、句、は、無、縫、塔、の、材、料、を、示、し、た、石、塔、な、ら、ば、石、で、作、る、木、塔、な、ら、ば、木、で、作、る、今、は、無、縫、塔、を、黃、金、で、作、る、の、と、見、え、る、先、づ、第、一、に、中、と、い、ふ、は、何、處、の、こ、と、ぞ、湘、南、と、潭、北、の、中、間、と、い、ふ、こ、と、と、あ、ら、う、か、丸、出、し、に

言へば無限の空間といふことよ、其無限の空間に真如法性が充塞して居る有様を黄金が一國に充つると言ふた、圓悟が上は是れ天にして下は是れ地、豈た一國のみならんやと言ふて置て更に這箇の消息なし一國に黄金が充て居るといふやうな話は遂に是れまで聞えたことが無いぞと拂ひのけた、法性真如が法界に充滿して居るなどといふことも本分の衲僧の齒牙に掛くべきことではないからである、しかし是れは誰が分上の事ぞと門下後學へ注意した、雪竇の着語に云く、山形の拄杖子、拄杖子と云へば今更申すまでも無い、禪宗の師家だちが手に携へて居て、場合に依てはビシヤリと打つ所の七尺の棒であるが、其の作りかたは色々あつて中には美麗なる人工を加へたのもあらうけれども、今は山形といふので山中の立木を其儘に枝を鋸したばかり少しも人工を加へないのである、耽源が中に黄金あり一國に充つと言ふたのが無縫塔を丸出しに見せたのよと言ふのである、そこで圓悟が何を見せるのじや其の拄杖子を斯うしてやるぞと言ふので拗折し了れりボキリ也、た、是、れ、模、を、起、し、様、を、劃、す、や、ッ、ば、り、形、式、の、み、じ、や、と、抑、へ、る、無、影、樹、下、の、合、同、船、こ、の、無、影、樹、と、い、ふ、こ、と、は、日、輪、正、午、に、當、る、時、に、は、都、べ、て、の、樹、木、等、に、も、影、が、無、く

なるので、此れは無限の時間を太陽正中の意味を以て言ひ顯はしたのである、合同船といふは乗り合ひ船で貴賤老若誰も彼も一つに乗れる謂ゆる一乘とも大乘とも言ふ所の場合である、即ち無限の空間を通過して無始劫來未來永劫いつからいつまでといふ限りなく六趣四生は一切衆生皆もろとも平等一味の境界を謠ふたのである、圓悟が祖師喪し了れり、祖師すなはち忠國師は疾に遷化せられたと思ふたに合同船に乗り合て御座るか々と擲論する、聞黎、什麼と道ふぞ、何うも其の合同船などと言ふのがつまらぬと耽源を抑へる、雪竇の着語に云く、海晏河清、まことに好い、天氣で航海が安全であると言ふのじゃ、圓悟は逆に洪波浩渺、白浪滔天、とそろしい悪い天氣で船が今にも沈没しそうであるぞと云ふ、凡そ言句に言ひ得べからざることを強て言句に出せば何時でも白浪滔天である、猶ほ些子に較れり、然かし此の海晏河清といふ安穩無事のところが十分とは許されぬけれども少しばかりは本分に近いぞ、瑠璃殿上に知識なし彼の合同船の到着したる彼岸に内外玲瓏たる玉の臺がある常には涅槃とも妙心とも極樂とも淨土とも名けられることも有るが、今は瑠璃殿と名けられた、此の御殿の中には佛とか如來とかゴットとか云

ふやうな有り難そうな物が居るかと思ふたに、豈はからんや知識なし知識と云ふは師匠や友人のことであるけれども、今は廣く見て誰も居ないと云ふことである、誰も居ないと云ふは聖者だの凡夫だの佛だの衆生だの貴賤貧富だの老若男女だの智愚賢不肖だのといふことの認むべきが無いといふことである、圓悟が咄と叱りつけた耽源も前は何を其様に樂屋の戸棚の中まで押し廣げるやうなことをするぞと言ふのである、雪竇の着語に云く、拈了也、これにて無縫塔の建立落成したぞと云ふのじゃ、圓悟が賊過後の張弓、今ごろになりて何の役に立つぞ、セメて耽源が潮とも潭とも口を開かない前に拈了也とやれば好かつたにと云ふのじゃ、言猶ほ耳に在り、然し此の拈了也の一言は何となく耳に留まつて居るぞと稱揚の意であらう。

**頌** 無縫塔

道一縫大小見還難、澄潭不許蒼龍蟠。

**人** 看

層落落、影團團、千古萬古與。

此頌の句作りは亦た一體じや三言四句七言二句の歌である第一句に無縫塔と言ひ出して宇宙萬象の本體を一句に呈露したけれども已に言句に出しては早や縫目が附く故に圓悟が此の一縫大小大と抑へた斯様なところに大小と云ふときは始めが大で後が小といふことで即ち龍頭蛇尾といふやうなことになる。下の大の字は衍字であると云ふた古人の説もある更に什麼と道ふぞとかく言葉に出だすか悪い見んとすれば遠て難し此の無縫塔を眼で見やうとしては到底見えぬ言葉にさへ言へぬ物が何て眼で見ることが出来やうぞ圓悟が賛成して眼の見る可きに非すと言ふた耳の聞くべきでも無い強て見んとすれば瞎眼がつぶれるぞとも又は此の瞎を見やうとて見えぬ盲目よとも讀める澄潭許さす蒼龍の蟠まるを澄潭といふは國師が良久した所をさす多くの人は此の無縫塔の塔様を國師良久の處で見やうとするが蒼龍すなはち國師の本意は澄潭の死水の中には居らぬ若し又澄みわたつてある水の中に居るやうなものならば活龍では無い圓悟の師匠五祖山の法演禪師は雪竇の頌古一冊の中で只此の澄潭不許蒼龍蟠と云ふ一句のみを愛すと言はれたと云ふことじや實に此の一句は此の公案の頌ばかり

では無い大乘佛法の眞意義は都べて此の一句に含まれてある然るに多くは佛法を澄潭止水の寂寞の所にばかり求めて居る其れ故に厭世に陥り消極に墮するのであるいづくんぞ知らん佛法の本旨は洪波浩渺白浪滔天の處に活動するのである後の第九十五則の頌に臥龍不鑑止水無處有月波澄有處無風浪起と云ふてある無處有處といふは活龍の居る處と居ぬ處といふことである圓悟の着語に見るや澄潭の中に蒼龍が居るか居らぬか能く見えたと云ふのである然らば洪波浩渺白浪滔天の處に居ると思ふか其れも亦た見んとすれば遠て難しよ其れでは結局蒼龍は何處の處に向つて蟠まるぞ此に至りては這裡直に得たり摸索不着て到底蒼龍を捕へることは出来まいこれ本則の頌は濟んだが雪竇が例の如く更に一基の塔を建立した層落々サテも立派な高塔よ十方法界に充滿して無上の莊嚴を極めてあるぞ着語に眼花すること莫れこれは雪竇に向つてお前は其の様な層落々などを仰ぎ見て眼を廻はさぬが好いぞ眼花して什麼をか作す其の様なものに見とれて何うするのじやと云ふ影團々さて其の高塔の影が團々と輝きわたつて美しくしいことよ着語に通身是れ眼全身すべて眼の者なら見えるかは知

らんが、しかし七に落ち八に落ちんヤハリ眼が散らついで十分に本統のものでは無い、雨々三々、舊路に行く、帝も國師も耽源も雪竇も皆同じ所を迂路ついで居るぞと抑へ、更に左轉右轉して後に隨ひ來ると罵しつた千古、古人に與へて看せしむサテ此の落々團々たる層塔は無始劫來未來永劫巖然として樹立せられてあるから、誰でも皆歴々分明に見られるはずぞと云ふ、そこで圓悟が見るや人に與へて看せしむと言ふが諸人どう見たぞと警醒し、瞎漢作麼生が看ん盲人どもに何が見えるものか、先づ第一に雪竇も前は見たかナと云ふので、聞黎觀得見すやと着語した、此の一則の着語はすべて皆抑へたのであるか、實に此の則の如き本分の事に至りては一言も一句も口舌に掛くべきもので無いことを示すが爲めに圓悟の慈悲廣大なる所である、吾人も互ひに圓悟の大恩に幸かぬやうにと心がけねばならぬ、

第十九則 俱胝指頭禪

垂示 一塵舉、大地收。一花開、世界起。只如塵未舉、花未開時、如

何著眼、所以道、如斬一絛絲、一斬一切斬、如染一絛絲、一染一切染。只如今、便將葛藤截斷、運出自己家珍、高低普應、前後無差各々現成、儻或不然、看取下文。

一塵とか一花とか言へば甚だ微細なることのやうに思ひ世界とか大地とか聞けば大層に廣大なやうに思ふのが凡夫の妄想である、正眼に見來れば大地を離れたる一塵もなければ一塵を除いて大地を見ることが出来ぬ、試みに其れは一塵のみ此れも一塵のみと言ふて微細の物を取り除いて見よ、大地は遂に皆無であるぞ、又試みに其れは一花のみ此れは一葉のみと都へての物を取り除いて見よ、外に世界と云ふ物があるかい、其れと反對に今は一塵を舉れば其の一塵の中に盡大地が皆收まる、一花が開けば其の一花の上に十方世界の春色が起て見える、しかし其れは一塵一花を見た上のことであるが塵未だ舉らず花未だ開かざる時の如き如何か眼を著けん、都べて何事でも機前に向つて見込みが立たなくては臍を噛むの悔を招く、一塵已に舉り一花已に開いて後では遅い、天地開闢以前に向つて宇宙を

達觀し、父母來生以前に向つて自己を識得せんければならぬ、所以に道ふ一綆絲を斬るが如し、一斬すれば一切斬す、これは絲の喻を以て前の意味を裏面から顯はした、一塵に大地が收まつて在るのだから、其の一塵の處分が分れば大地の處分が附くわけである、例へば一つの小手卷の絲を一箇所ブツリと斬れば悉くバラ／＼になるやうなもの、又その絲を染める方から云ふても同じこととて、一小手卷の絲を藍瓶の中へツブリと浸せば悉く同じ色になる、只如今葛藤を將て截斷し、自己の家珍を運出せば吾々互の上に於ても動もすれば種々様々なる妄想執着のみならず學解だの識見だのと色々なる葛藤のために自由を得られないのであるから、都べての思慮分別を棄て、即ち葛藤を截斷して而して自己の本心本性を天眞爛熳に實踐躬行するやうにさへなれば、高低普く應じ前後差ふことなく各々現成せん、如何なる境遇にあふても、如何なる事情に立至りても、自由自在に活潑の運動が出来てあらう、儼し其れが未だ然らずとならば下文を看取せよ、誠に好いも手本であらうぞと云ふ、

**本則**

舉俱抵和尚。凡有所問。

○有什麼消息

只豎一指。

○豎老漢也

○要坐斷天下人

○熱則替天普地熱

○熱則替天普地熱

○熱則替天普地熱

俱抵和尚は南嶽下の第五世で達磨十一代の法孫である、婺州の金華山といふ處に住して居られて、師匠の天龍和尚から一指頭の禪といふことを相承し、生涯誰が何を問ふても只指を一本たて、見せるより外には一言一句も説かない人であつた、一塵未だ舉らず一花未だ開かざる以前の活機たゞ一指頭の上に現成せしめて赤裸々露堂々である、凡そ所問あればの下に圓悟が什麼の消息がある、又鈍根の阿師と云ふた、俱抵和尚は指一本たてることより外に何も知らない鈍根の阿師であるに、其れに何を問ふたからと云ふて何の消息があらうぞと云ふのであるが、其の鈍根が天下人の舌頭を坐斷するのであるから、如何にも尊貴な如何にも峻峭なる鈍根である、此の際に於て何も問ふことのあるべきはづては無いに依て亦た什麼の消息も通すべきでは無い、只一指を豎つの下に、這の老漢天下の人の舌頭を坐斷せんことを要すと着語して此の鈍根の價値を揚げた、其次の熱するときは、普天普地熱し寒するときは、普天普地寒すといふ着語と、又其次の天下人の舌頭を換却すとある二語は評唱中の語句が混入したので着語として見るべきでない、と風外老人

は言はれてある、いかにも其うてあらうと思はれる、此他にも後人の妄添もあれば、又は一句に言ふべきを二句に分けたり、二句を一語に誤つたりしたのも多くあるかと思はれる、さて此の一指を豎つと云ふが如き公案に至りては、如何にしても講話し得べきものでは無いに依つて、お互ひに實參實究して唯獨りてニコリと笑ふ時に至るより外は無い

**頌**對揚深愛老俱胝癡兒拳伴○同道方知不是一機一境宇宙空來更有誰兩箇三箇更有二箇

曾向滄溟下浮木全是過箇○是則是本孤峻有甚麼用處夜濤相共接盲龜辨天機地○有

得堪作何用○總令而行起向無佛世界○接得兩黎一箇眼深

對揚とは前にもあつた通り人に應對して宗旨を擧揚すること、其の對揚のしかたは千佛萬祖みな其れ其れに一家風あるけれども、雪竇は別して深く此の老俱胝の只一指を豎てるばかりで、其他に佛とも法とも迷とも悟とも言はない所を愛するぞと言ふそこで圓悟が癡兒癡兒伴伴を牽牽くと言ひ又同道同道まさに知ると言ふた、俱胝と雪竇は癡病人の行列のやうて蛇蛇の道は反鼻反鼻が知ると云ふわけてあるから深く愛す

ば尤もじや、しかし其の指を豎てると云ふことも結局、一機、一境、たるを免がれず此れて本分の十成とは言はれまいぞと抑へた、要する所は吾々が此の公案に參するに當りて一指頭と云ふことに心を奪はれるやうであつたならば千里萬里である、仍て圓悟の慈悲この一語を下して吾人の邪路に迷ふのを救はれたのである、第二句に宇宙空宇宙空來來りて更に誰かある世界中にあらゆる佛祖を悉く検査して見た所で、此の俱胝のやうな者が又と二人あるかいと言ふのじや、圓悟が兩箇兩箇、三箇三箇、更に一箇一箇あらんも也也、た須須からく打殺すべしと云ふ、此の着語は二つ續けて見るが好い、一指頭の禪は古今上下俱胝の一人舞臺舞臺て踊らせるが好い、若し一人でも眞似などをする者があつたなら打殺してしまふが好いと圓悟も立派に癡兒の道つれになつてしまふた次に三四の句意に就ては古人に色々な異説があつて、天桂和尚は圓悟が見誤つたのであるとも言ひ、風外老人は圓悟の評唱に衍文がある昧者の妄添であるといふてゐる、なるほど圓悟平生の調子では無い處がある、仍て天桂風外二老の意を參酌して此二句を見れば、雪竇が俱胝を深く愛して俱胝の外に一人も無いと云ふ意味をます、強く進めて千佛萬祖を罵倒するに至つたのである、乃ち



曾て滄溟に向て浮木を下すと云ふたは法華經にも華嚴經にも出て居る盲龜浮木の譬を借りて來たのである其の故事は誰も知て居る通り大海の中に一つの龜が居て其龜は腹の下に目が一つあるだけであるから一生涯たつても天上を仰いで日を見ることが出来ないそこで偶々孔の一つあいた木が流れて來たのに取り附いて其の孔のところへ腹の下の目をあて始めて天日を見るやうなものであると云ふ譬であるこれは吾々一切衆生が煩惱生死の大海に浮き沈みの苦みを受けて居るのを諸佛の大慈悲を以て法を説き教を立て下さるのであるけれども業報の悪い者は其の法を聞いて道を得ることの容易ならぬのに喩へられたのであるそこで今この曾て滄溟に向つて浮木を下すと云ふたのは三世の諸佛歴代の祖師が法を説き道を弘められたことを申したので之を第二義建化門から見るときは已むを得ぬ次第ではあるけれども若し本分の上から言ふときには一切衆生本來成佛て迷ひの凡夫もなければ之を救ふべき世話もないはず然るに浮木を下すなどには餘計なことぞと云ふので圓悟が全く是れ這箇是は則ち是なるも太孤峻生まことに已むを得ざることながら取り附きやうも無いことよと言ひ更に破草鞋

什麼の用處が有らんと云ふいよく結句に夜濤相共に盲龜を接すしかも其の浮木を青天白日の波靜かなる所へ下したのでは無い暗夜の風濤あらし眞只中へ投じて千佛だの萬祖だのと多くの世話焼き連中が相共に盲龜と接し盲目どもを相手にして何うするといふことぞ然るに俱胝和尚は盲龜とも浮木とも迷とも悟とも佛とも法とも其の様な抹香くさいことは少しも言はずに只一指を豎てる其の妙味といふものは實に宇宙空し來りて更に誰か有るといふべきであると言ふたのである其れ故に圓悟も天を撈し地を摸して什麼の了期かあらん餘計な心配をして何の役に立つぞと言ひ又接得して何の用を作すに堪えんと言ひ更に令に據て行ひ無佛世界に趣向せんと云ふ皆佛とか法とか迷とか悟とか云ふ第二義の閑妄想を排除し盡すのである最後に閻黎一箇の瞎漢を接し得たりと一轉して愈々本分の事を明かにせられたこれは雪竇前は夜濤相共に盲龜を接して何の効があるかと言ひわれ圓悟も其れに同意して何の用處があるの何の了期があるのと言ふたけれども到頭前まへのやうな大盲目を一人接し得たと言ふたのであるこれ其の本分の事を談ずる場合には滄溟とか夜濤とか盲龜とか云ふことを都べて

其儘に本色の大莊嚴と見る目が無ければならぬのである。然るに凡夫の情見を以て見ると迷ひとか暗いとか苦むとか云ふやうな言葉を聞けば直に其れを憎み賤む心を起す。其んなことでは本分の事は話せない。地獄の釜の下の火の光も極樂の彌陀の白毫の光も差別なきに至つて始めて雪竇や圓悟の話聞く資格があるのである。

### 第二十則 龍牙西來意

**垂示** 堆山積嶽。撞墻磕壁。佇思停機。一場苦屈。或有箇漢出來。掀翻大海。陽倒須彌。喝散白雲。打破虛空。直下向一機一境。坐斷天下人舌頭。無爾近傍處。且道從上來是什麼人。曾恁麼試舉看。

山に堆く嶽に積み墻を撞ち壁を磕くと云ふは無限の空間に充滿して到る處に普ねく有るぞと云ふ意味で、本體本性の常住普遍であることを明かされた。然るに若

し佇思停機と彼れか此れかと考へたり工夫したりするやうなことは、一場の苦屈まことに氣の毒な次第である。それとは反對に箇の漢とも言はれるほどの衲僧が出かけて来て大海を掀翻し須彌を喝倒すと宇宙萬象を悉く蹴飛ばして眼中に一物をも留めず、其の又其上に其一物をも留めないと云ふ痕跡をも忘れる有様を白雲を喝散し虚空を打破すと云ふた。要する所は有とか無とか云ふ都べての思慮分別を超過した境界であつたならば直下に一機一境に向つて天下人の舌頭を坐斷する働らきがあつて、如何なる場合にも自由自在を得て誰も何とも言ふことが出来ないから爾が近傍する處なからん如何なる人も傍へ寄り附くことが出来ないことなる。従上來是れ什麼人か恁麼にし來れる。昔から誰れぞ其の様なことを實行した人があつたか。試みに舉す看よと本則を呼び出した。

**本則** 舉龍牙問翠微如何。是祖師西來意。諸方話微云。與我過禪

板來。用板作什麼。牙過禪板與翠微。也是把不住。罵與青龍不解。微接得便。

打○也落○在○第二○頭○了○也。牙云。打即任打。要且無祖師西來意。這漢話在第二頭。○眼過。

後張牙又問臨濟如何是祖師西來意諸方處公案再問將濟云與我過

蒲團來

曹溪波派如相似無限平人被一坑埋却

牙取蒲團過與臨濟

依然把不住○依然

不恰相○依佛越國

揚州濟接得便打

死漢○可借打這般

牙云打即任打要且無祖師西來意

約然○在鬼窟裏作活計○將前得便宜○賊過後張弓

龍牙といふは湖南の龍牙山妙濟院に住して居られた居遁禪師といふ人て後に證空大師と謚號を賜はつた大徳である。法を青原下の五世洞山悟本禪師に嗣ぎ達磨大師第十二代の孫である。翠微といふは京兆終南山の無學禪師と申して青原下の三世丹霞天然禪師の法嗣であるから龍牙の祖父の雲岩と法の從兄弟に當る人であるから龍牙よりは餘程の先輩であるといふことが分る。然るに龍牙は已に此の祖師西來意といふ問題に於て自から大に悟る所があると思ふて心に誇つて居る所から他の先輩に向つて試験しやうと思ふ料簡を起し、遂に此の問答に及んだものと見える。とかく誰でも少壯の頃には何事に就けても此の程度の時期があるものと見える。如何なるか。是れ祖師西來意この問題は前にもあつた通り達磨大師が

遙々と何ういふ心持で支那へ來たかといふ問題で、その頃に處々方々で頻りに研究せられつゝあつたのである。其れ故に圓悟が諸方の舊話也た勘過を要すと着語した。勘過といふは又は勘驗とも勘破とも言ふので、他人の悟りを試験して見ることである。故に此の着語は祖師西來意といふ問題は已に陳腐な話であるに其れを持ち出して他の翠微を勘驗しやうとするのか、これは面白いことになるであらう。ぞと豫想したアンパイ微云く我がために禪板を過し來れ。サヌガに翠微老漢じや落つき拂つて其れ其處にある禪板を取てよこしてくれと言はれた。禪板といふは長く坐禪をして疲れた時にチヨイと倚り懸かるために作つてある板である。そこで圓悟が禪板を用いて、什麼かせん祖師西來意の問に對して禪板を何うするのか、龍牙を打ちなぐらうとするのなら、拳骨でも何でもスバリと早く打つが好いては無い。然るに禪板を取てくれなど、手ぬるいことを言ふて居るのは、泊んと放過すべし、打つべきものを打たずに許してやるやうなものぞ、しかし龍牙が之れに對して何うすることやら、峻まことに危険なことぞと危ぶんだ。牙禪板を過して翠微に與ふ。此の時に龍牙に十分の力があつたならば直に其の禪板を取てビシヤリ

と翠微を打つべきであるにオメ／＼と對手の言ふ通りに禪板を過してやるといふは也た是れ把不住とりとめの附かないことよと圓悟が着語した、又青龍に駕與すれども騎ることを解せず青龍ともいふべき程の良い馬を授けられながら其れに乗ることを知らない龍牙の意氣地なしよと抑へ更に可惜許あしことよと言ひ又當面に承當せず彼れが禪板を過し來れと言ふた其の一言下に承當すなはち豁然大悟せねばならぬところであるのにと重ね／＼龍牙に小言を言ふた、微接得して便ち打つ翠微は果して禪板を受取るやイナやビシヤリと龍牙を打つた圓悟が着うまく打ち得たぞと賛成した、然し箇の死漢を打着して甚事をか濟さん翠微は頻りに龍牙を悟らせやうとて本分の提携に及んでも其の効がないに依て也た是れ第二頭に落在し了れり氣の毒な次第よと言ふた、牙云く打つことは即ち打つに任す要且つ祖師西來意なしコレが其の龍牙が自から大悟徹底したつもりで誇つて居る所なので、祖師の西來は無意であると云ふ一見識を擔いて居るのである、そこで此の祖師西來意なしといふことを言ひたいばかりで、打たれると知りつゝもオメ／＼と禪板を翠微に過したのであるから、翠微が禪板を取て直にビシヤリ

と打つた時に龍牙の方では思ふ坪へスバリとはまつたやうな心持で、直に打つことは打つに任す祖師西來意なしと言ひ放つたのである、すべて何か一つ己れに取り着いて居る所があつては、宇宙の全體に渉る大真理が見えるものには無い、其れ故に佛法は孰れの宗派に於ても無我無念を第一とし他力教などに於ては別して爪かすほどでも自己を頼む心をもつてはならぬと教へるのである、然るに龍牙が未だ年が若くて修行が中途であつたから、切角の翠微の深切も其効がない、そこを圓悟が這の漢第二頭に話在不す己れの身分も知らずに口のへらないことを言ふて居る況んや賊過て後の張弓何の役に立つぞと抑へた、然るに翠微は其れぎりて何とも言はないから、龍牙は立派に翠微を勘破したつもりであるに依て、此上は世間に尤も名高い臨濟和尚を一つ勘破してやらうと云ふ勢ひで、牙又臨濟に問ふ如何なるか是れ祖師西來意と同じ問題を提出した、臨濟といふは謂ゆる臨濟宗の高祖て其法脈を言へば南嶽下の第四世黃檗希運禪師の上足の弟子であるから、達磨大師第十一世の孫である、圓悟の着語に諸方の舊公案再び將ち來ると言ひ、又半文錢に直らずと言ふた、賣りのこりの品には價打がないぞと言ふのである、濟云く我が

與<sup>〇〇</sup>○に蒲團<sup>〇〇</sup>を過し來<sup>〇〇</sup>○れ翠微は禪板を取てくれと云ふたが、今度は蒲團を持って來いと言ふ、禪板と蒲團と品が違ふばかりで全く同じ形式の答である。そこで或ひは禪宗の問答といふものは同じ一つの型があつて、誰でも同じ軌轍を踐んで往くのであらうと思ふ者もあるかは知らんが決して其ういふわけのものには無い。翠微には翠微の眉毛があり、臨濟には臨濟の眼目がある。そのところを圓悟が曹溪の波浪如し相似たらば限りなき平人も陸沈せられん。此の七言二句は後の第九十三則の頌に雪竇が言ふた句である。今は翠微も臨濟も同じ曹溪の法孫であるから似て居るなどと思ふたらば宗旨は見えぬぞ。若し佛法が其様な人真似て濟むものならば一切衆生皆悉く墮落してしまはうぞと云ふ。陸沈といふことは莊子や論衡などにも見える語で讀て字の如く陸地で沈溺するといふことであるから、本は隱遁する意味であつたのを、後には失敗するといふやうなことにも使ふことになつたものと見える。龍牙は例の如くに蒲團を取て臨濟に過與す。圓悟が依然として把不住。ヤツぱり取り留め得ない。又依然として不伶俐。いつまでも愚な奴じやと言ひ、更に越國に依倚として揚州に彷彿たり。アチラへ往てはマゴ／＼コチラへ來ては

ブテ、實につまらん男ぞと抑へる。濟接得して便ち打つ。圓悟は相變らず着と言ふて此の打つたを稱揚した。しかし惜む可し、這般の死漢を打ちたることよ打たれた龍牙の皮の下に血があつたなら今度は此處で豁然大悟と往くべき所にといふ心ぞ。一摸に脱出す。然し翠微も臨濟も同じ型で別に新機軸もない。牙云く打つことは打つに任す要。且つ祖師西來意なし。圓悟が灼然と龍牙が相變らず其う言ふて西來無意の悟りを振り廻はすであらうと思ふて居たに果して其うであつたと言ひ、更に其れが即ち鬼窟裡に活計を作すと言ふもの亡者の生活が何て人間の用に立つものか。然るに龍牙は却て將に謂へり便宜を得たりと自分では首尾よく臨濟を勘破したつもりであらうが、いつくんぞ知らん賊過後の張弓まことにつまらぬこと、徹頭徹尾抑下しぬいたが此公案は始めから終りまで打つ打たれるといふ上に就ての話でほとんど劍術の話の聞くやうである。要する所は禪機は一毫ばかりも隙間のあるを許さぬと云ふことが、こゝらの機合で多少合點がゆくのであらう。

頌 龍牙山裏龍無眼  
洗主地 死水何曾振  
洗主地 古風  
禪板蒲團不能用  
教阿維 只應分付與盧公  
作什麼 禪板蒲團

不谷○漆桶  
作○遊般見解

此の一則には雪竇の頤が前後二首あつて此れが即ち前頤である、此の頤に就ては古來色々嘖ましい議論もあるが、今は風外老人の斷案に據ることにする、風外老人の説に據れば一體に此の公案を以て龍牙和尚の生涯を見やうとするのが誤りである、これは龍牙が未だ本統の悟りが開けない時の事であるから、其のつもりでさへ見て置けば何も見難い所は無い、其れ故に今此の龍牙山裡龍に眼なし死水何ぞ曾て古風を振はんと云ふたのも、龍牙が大憤發て翠微臨濟の二大家を勘檢に出かけた機鋒は立派な龍の姿であるけれども惜いことには眼が無い盲龍である、其れ故に西來無意といふやうな自分免許の悟りを振りまはして居るから二大老の活手段を領得することが出来ぬ、そこで翠微が禪板をと言ふても臨濟が蒲團をと教へても少しも其れを活用させることが出来ぬ、結構な道具を使ふことが出来ぬなら吾れ雪竇に分付せよと云ふので蒲團禪板用ること能はずんば只應に分付して盧公に與ふべしと言ふた盧公といふは雪竇の別號で自分のことを謂ふたので

ある圓悟の着語は第一句に瞎まことに仰せの如く盲目で御座ると言ひ、別人を慢することは即ち得たり龍牙を侮慢するは御勝手であるが吾れ圓悟などは其う慢じてくれまいぞ、雪竇も前は人のことを其様に言ふけれども泥裏に土塊を洗ふので似たり合たりなものでは無いか、天下人總て知る龍牙に眼の無いことを知らない者は無いに珍らしそうに其様なことを言ふ者では無い、第二句の下に忽然として活する時、奈何ともすること無らん、死水裡の盲龍と思ふて居ても若し遽に活きて働らくことになつたら何うするぞ、累天下人に及び出頭不得ならん、若しも此れが活龍になつて翔るといふことになつたなら其の累ひが天下に及んで一人も頭を擧げることが出来まいぞ、第三句の下に阿誰をして説かしめん、其の蒲團禪板を用ること能はざる意旨を誰に辯護してもらふたなら好からうかと揶揄し、你蒲團禪板を要して什麼をか作さん、其様な不用の品を龍牙から受取て何にするぞ、是れ閑黎に分付すること、莫しや大かた龍牙はも前にお渡しするつもりであらうぞ、第四句の下に也た則ち分付不着ならん、横合から手を出されては龍牙が渡し得ないであらうと言ひ、結局漆桶這般の見解を作すこと、莫れ漆桶といふは眞暗で目も

鼻も分らぬと云ふやうな所に使ふ俗語と見える禪板蒲團を分付せよなどとは何のこといも分らぬぞと雪竈を抑へるやうに言ふて門下後學に參究の注意をせられたことと見える、次に後頌じや、

頌這老漢也未得勦絶復成一頌知然一牛〇能有幾人知〇自盧公付了亦

何憑盡大地付憑人〇教誰領話坐倚休將繼祖燈草裏〇打〇入〇黑〇山〇下〇堪對暮雲歸

未合錯〇箇〇半〇箇〇〇畢〇者〇即遠山無限碧層層深〇坑〇〇更〇參〇三〇十〇年

這の老漢未だ勦絶することを得ず勦絶といふは古い所では書經などにも見える言葉で事のサツバリとした意味であるそうながら今此の龍牙の問答に就ての批評が何うも未だサツバリとせぬに依てモ一ツ頌して見やうと云ふた、これは第二の頌の小引である、圓悟が其れに着語して灼然テツキリ其うであらうと思ふた、能く幾人の知ることありや雪竈ならては他に知る人は無からう、自ら知る、半に較れり前の頌だけでは蒲團禪板の始末が附かぬ所を能く自から知られたのが、價打じやと云ふ頼みに、最後の句あり、此の最後の句があつてこそサスガに雪竈で

あると頻りに托上した、サテ其頌は第一句に盧公に付了ると亦た何を憑らん前に蒲團禪板の使ひやうを知らぬなら盧公に渡せといふたが、其れを盧公が受取たからと云ふても別に之を以て佛とか法とか有り難そうな御用に立てやうと云ふのでは無い坐倚將て祖燈を繼ぐを休めよ、其の蒲團を敷て坐禪をしたり其の禪板に倚り懸つて知識らしい顔をしたりして、其れで佛祖正傳の傳燈を繼いだ大和尚であるぞといふやうなことを致さぬが好いぞ、われ雪竈は其の様な抹香くさいことは嫌ひぞと言ふのじや、そこで圓悟が盡大地、憑人、の人を討ぬるに得がたし、世界中どのやうに探しても雪竈のやうな見識の人は稀れてあると大賛成じや、更に誰をして頌話せしめん、然し此の雪竈の大見識を能く領解して其の話し相手になる者は誰であらうぞと門下一同を見廻はしたかと思はれる、第二句の下に、草裡の漢、祖燈を繼ぐを休めよと云ふて自己の本分を忘れる者を警醒せられたは草裡に混じての慈悲心ぞと云ひ、佛法だの祖燈だのと云ふ抹香くさい所を打破して、黒山下に打入して坐し、鬼窟裡に落在するのかと注意した、極樂へ往生するには及ばないぞと云へば其れなら地獄へ往かうかと云ふやうては溺を避けて火に投ずるの

じや、地獄も極樂も生死も涅槃もすべて氣にかしらぬやうになりたのである。其れは如何なる姿であらうか其れを三四の句に對するに堪たり暮雲の歸り未だ合せざるに遠山限りなき碧厨々何と好い景色では無いか暮雲には限らない遠山には拘はらない花とささ紅葉とちり月と照り風とふく宇宙萬象何の處か好風景ならざる其れを何ぞや彼れが此れがと擇び立てをして本來の風光をことごとく疵ものにしてしまふ誠に淺ましいことではある。圓悟が第三句に着語して一箇半箇と言ふた此の絶景に對するに堪えたる者は多くはあるまい天下に一人か半人よ、しかし此の景色を好いのと悪いのと言葉に出してはモ一つまらぬぞと云ふので舉着すれば即ち錯らん、然るに今雪竇が對するに堪たりなどと言ひ立てた果然として出不得ハヤ脚が抜かれぬぞと抑へた、第四句の下に備が眼を塞却し備が耳を塞却す雪竇が此のやうな景色などを並べ立て、備等諸人を盲目にするを雙隱にするぞ、此の遠山限りなき碧厨々すなはち法性真如の不可思議なる境界に耳目を留めるやうであつたならば深坑に没溺して浮ぶ瀬はあるまいぞ、更に參せよ、三十年これは容易に看過することは出来ない所よと吾人に重々慈愍の垂誡である。

第二十一則 智門蓮華荷葉

**垂示** 建法幢立宗旨錦上鋪華脫籠頭卸角駄太平時節或若辨得格外句舉一明三其或未然依舊伏聽處分

法幢と云ふは人の師となつて法を説くものが其の徽章として幢幡を門頭に建てるのが印度の風習であつたと見える、今て言へば學校の校旗のやうなものであらう、宗旨といふ言葉は今さら申すまでも無いが佛祖正傳の主義のことじや、佛祖正傳の法といふものは法幢を建て宗旨を立て、説き立てるには及ばないもので、イナ説き立てればハヤ第二第三に落ちて本統のことには成らぬ、天然自然に宇宙萬象其儘が活潑自在な正法のあらはれた姿である、けれども愚迷の凡夫を誘引する方便として事已むを得ず法幢を建たり宗旨を立たりするのであるから乃ち錦上に花を鋪くのである、美しくしいは美しいが餘計なことよ、籠頭を脱し角駄を卸すといふことは前にもあつた通り馬を束縛して荷物を負せてあるをすべて取り除



いて自由自在にさせることで、即ち八萬四千の煩惱も八萬四千の法門も共に掃ひ盡して縦横無礙なる境界それは太平の時節である。サテ以上は目的やら方法やらであるが其の方法を以て其の目的を達する手段に至つては其の人の機根次第であつて或は若し格外の句を辨得するほどの上根上機の者であつたならば擧一明三。わづかに鞭影を見て走る良馬の如くに一を聞て三を知ることとも出来やうけれども其れ或ひは未だ然らずんば舊に依て伏て處分を聽け例の如くに一則の公案を拈提して見せやうぞと云ふ、格外の句といふことは釋迦一代の説法五千四十八卷の經文と云ふが如きは皆其れ一規格のある言教であるが今この教外別傳の祖師門下に於ては都べての規格に拘はらず自由自在に咄とても喝とても乃至打つとも擲ぐるとも只その目的さへ達し得れば好いのであるから即ち格外といふのである。

**本則** 擧僧問智門蓮華未出水時如何鈞在不疑之地泥裏洗泥裏洗智門云。

蓮華一三三四五六七八九僧云。出水後如何計向鬼窟裏作活計門云。荷葉幽州猶自

江南 兩頭三面  
笑殺天下人

智門といふは諱を光祚と曰ひ此の碧巖集の頌を作つた雪竇重顯禪師の師匠で、青原下の第八世香林澄遠和尚の法を嗣ぎ達磨大師第十四世の孫である。宗派を言へば五家の中で雲門宗に屬し雲門香林智門と相承したのであるから雲門の嫡孫にあたる。隋州の智門といふ寺に住して居られたに依て智門の祚と曰ふのが通稱になつて居る。蓮華未だ水を出でざる時如何。これは水を出さる前と水を出て、後との二段の間で、敢て蓮華に限つたことでは無い、太陽未だ昇らざる時如何、已に昇りて後如何でも、花未だ開かざる時如何、開いて後如何でも、好い、要する所は世界未だ成立せざる以前の本體は如何なもの、御座るかとの問である。故に圓悟は不疑の地に鈞在す、彼れの此れのと議論するに及ばぬ場所へ餘計な鈞針を下したもので、いやと言ひ、又泥裏に土塊を洗ふ、幾ら商量して見たからといふても、サツパリ綺麗に洗ひ立ての出来るものには無いぞと言ひ、又那裏より這の消息を得來ると、どこから其の様な問題を持てきたぞと言ふ、畢竟不可思議不可説の境界は言詮を以て論量すべきでは無いと言へば何やら別段に異はつた事でもあつてか、と云ふに、智門云く、蓮華如何なるか、是れ未だ事實に顯はれざる時の理想といふ問に對して答へて

云く理想といふたわけ何の不思議もないことぞ、故に圓悟は一、二、三、四、五、六、七と評した何も珍らしいことでは無い、六々三十六といふも山は是れ山と云ふも同じことよ、然かしながら此間の消息が天下人を疑殺する大問題ぞ容易に看過しては濟まぬ、併云く水を出て、後如何然らば其の蓮華が水を出た後は何うであらうぞと云ふは、前の例で言へば天地萬物の現象あらはれた後は如何とも理想が事實と成つた時は如何とも見える、着語に鬼窟裡に向つて活計を作すこと勿れ餓鬼が料理の献立をするやうなことをするな、萬物の森々羅々たるに目を廻はすなといふたやうなアンパイ、又恁麼にし去るや、前の問答で埒が明かないで出の不出のと兩端に迷ひ未だ其の様なことを問ふて居るかと抑へた、門云く荷葉前に水を出さる時には蓮華であつたのが水を出た後は荷葉であると言ふ、蓮華と荷葉と是れ同か、是れ別か、法性法身の如來様と花や紅葉は是れ同か、是れ別かの問題である、然るに圓悟が幽州は猶ほ自から可なり、最も苦なるは是れ江南この言葉は宋朝の末に宋の天子は金國の爲めに捕虜にされたりして大困難を極めたのは幽州すなはち今の北京の方に都して居た時のことであつたが、其の後江を渡りて江南へ都を遷し、

金の難を避けたつもりであつたけれども、其れが早や宋の亡ぶる本となつたので、時の俚諺に幽州は猶ほ可なり、江南は更に苦しと言ふたのである、そやうな、其れを今こゝへ借てきて前の蓮華と答へられた時はまだ合點し易いやうであつたが、今度の荷葉に至りては容易に會し難いことになつたぞと言ふて、參學の徒に疑團を起させるのである、更に智門の答が兩頭、三面で色々なことを言ふから合點がゆかぬぞと言ひ、又智門が色々なことを云ふて、天下人を笑殺す、世間の笑ひものにされるであらうぞと勝つたやうな言葉を以て智門の作畧の非凡なることを稱揚したのである、すべて着語には裡面から毀譽抑揚したのが多いのであるから、其のつもりで見ねばならぬのである。

**頌**蓮華荷葉報君知老案公案、出水何如未出時泥裏土塊、一狐疑了一狐疑分崩也

江北江南問王老主人公在什處、一狐疑了一狐疑是箇疑却

疑情未息  
打云會麼

智門が蓮華と言ふたり、荷葉と言ふたりして、宇宙の本體妙用を君等諸人に報知せ

られることであるが、其の水を出さる以前と又水を出たる後と云ふやうな言葉に取り着き廻つて色々と思想する者もあらうが、一鉢出水は未出の時に何如れ此の何如といふ字をナンセンスカンと訓んでは何となく出水よりも未出の時の方が勝れて居るかのやうに聞えるけれども、此の字は孰如といふ字と同じこととイッレと訓むが好いと云ふことである、そこで圓悟の着語には第一句に老婆心切、蓮華だの荷葉だのと手品使ひのやうに色々な物を持ち出して子守お婆さんの御深切めいて居ると云ひ、現成公案といふは山は山のまゝに水は水のまゝに現在目前そのまゝが眞如法性の當體であることを言ひ顯はした言葉で、即ち今の蓮華と云ひ荷葉と云ふた其れが直に現成公案ぞ、さりながら己に蓮とても荷とても口に言ひ出せば、ハヤ文、彩、已に彰、はるて幾分か飾りが見えるぞと言ふ、第二句に泥裏に土塊を洗ふ、出水の未出のと論量すべきには無いぞと言ふたからと云ふても、其れがハヤ泥水で土を洗ふやうなもので綺麗サツパリとなるものには無い、とかく言句や伎倆にかけてはモ、第二第三たることを免かれぬぞ、しかし出水未出と分開して工夫するも也、た好からうと許し、更に備、備、なるべからず、ハヤは容易に看過して

は濟まぬ所ぞと諸人に注意せられた備、備といふは器の未だ成らざる貌とか申し、て事物の不満足なることを言ふのである、そう、第三句に江北江南、王老に問は、しかるに此れて合點することが出来ないで處々方々を尋ねあるき彼れか此れかと妄想し廻はつたならは、一狐疑、一狐疑、一つの疑ひが解けたかと思へば更に一つの疑ひが起り、枝葉に枝葉が茂つて到頭幹も根も分らぬことにならうぞと雪竇の警誡じや、王老といふたり王老師といふたりするのは支那人の姓には王とか李とか張とかいふのが大層多いので、日本ならば權兵衛でも太郎作でも權でも八てもと云ふやうな所へ張三李四といふやうなことを言ふが、此の王老も其の仲間て今は田舎の和尚どもと云ふたやうなアンパイと見える、第一句の着語に江北の江南のと迂路つきあるく奴は自家の主人公、什麼の處にかある喪家の犬同様だと云ひ且つ王老師に問て、什麼か作さんと叱り、幾ら尋ねあつても備、自ら草鞋を踏破す、くたびれ損の旅費ついやしてあらうぞと言ふて自己の事は自己に參究せねばならぬことを示される、結句の着語に、一坑に埋却せん、其やうに餘處を尋ねあるく連中は皆打殺して一つ穴へ埋めてしまへと言ひ、自ら是れ備、疑ふ、誰も外から疑

はせるのでは無いぞ、然るに疑情未だ息まぬといふは氣の毒なことぞと言ひつゝ、  
ビシヤリと一棒を與へて會すや、どうじや合點がゆかぬかと圓悟重々の慈悲を垂  
れる、

### 第二十二則 雪峰龍鼻蛇

**示**大方無外、細若隣虛。擗縱非他。卷舒在我。必欲解粘去縛。  
直須削迹吞聲。人々坐斷要津。箇々壁立千仞。且道是什麼人  
境界。試舉看。

大方無外と云ふは宇宙萬物の本體が無限の空間に充塞して居ることを云ふので、  
無外と云ふも無邊と云ふも皆無限の義である、無限であるからコ、からが内てコ  
、からが外といふ隔ては無い、即ち無外といふ一語で内も外もない何處も彼處も  
といふことになる、實に眞如とか法性とか法身佛とか言はれる宇宙の本體は之を  
廣げて見れば此の通りであるけれども、之を縮めて見れば細なること隣虛の若し、

隣虛といふは都べての物質を破つて摧いて微塵にして更に碎いて碎いてモ、此れ  
より細かに碎くことが出来ないといふことになつた時には虚空と同様になる、已  
に虚空と同様であるけれども其れを直に虚空とは言はれないに依て虚空の近鄰  
すなはち無の鄰りであるといふ所から鄰空塵といふのである、法の本體は是の如  
きもので儒教の説にも之を放てば六合に彌り之を卷けば退て密に藏ると言ふて  
ある、それ故に吾人互ひが其法が手に入りさへすれば擒と取り抑へることも縱  
と放ち棄てることも他に非ず己れの自由であり、卷と縮めて使ふことも舒と廣げ  
て用ふることも我に在り、他人の指圖を受くべきでは無い、然かるに吾々凡夫は  
種々様々の妄想執着に己れと己れを束縛して自由を得られないのであるから、佛  
祖慈悲のあまりに色々と方便を廻らして濟度の法を建てられてある、要する所は  
粘を解き縛を去るのであるが、其の粘と喰つ附きまわり縛と手足の自由のきかん  
といふものは迹に滯り聲に隨ふからである、迹といふは都へて形式にあらはれ  
てあること聲といふは文字や言葉にあらはれて居ること、誰が何うしたとか彼  
れが斯う言ふとか經論の説であると、か研究の結果であると、か都べて其のやう

な他人の跡尻を逐ふやうなことを悉く除き去らねばならんのであるから直に須からく迹を削り聲を吞むべしと云ふのであるサテ此に至りさへすれば人々要津を坐断し箇々壁立千仞ならんと云ふ要津とは言ふまでもなく都べて海や河を渡るに就て肝要なる渡し場または湊のことであるのを佛法修行の上にも其れく肝要なる渡し場の如き處のあるに譬へ今は大悟徹底即ち彼岸へ到りおふせた人であるから其の渡し場にも用が無くなつた姿を坐断すと言ふた箇々は人々と同じこととて誰も彼れも大悟徹底の人てさへあれば壁立千仞いかなる人でも寄り附けない二零三高地の砲臺は乃木大將の一號令で占領することは出来ても此の場處は千佛も萬祖も如何ともし難いぞ且らく道へ其れは其うとして置いて是れ何廢人の境界ぞ試みに擧す看よと本則を呼び出す

**本則**擧雪峯示衆云。南山有一條鼈鼻蛇見怪不怪其怪自壞○大小汝等

諸人切須好看四○一場長慶云今日堂中。大有人喪身失命晉州人送賊○

以己僧擧似玄沙同坑無異土○奴見玄沙云。須是稜兄始得。雖然如是。

我即不恁麼不免作野狐精見解○是僧云。和尚作麼生也好抄者玄沙云。用

南山作什麼釣魚船上謝三耶○只道野狐精雲門以拄杖攬向雪峰面前。

作怕勢怕他作什麼○一子親得○一

雪峰のことは第五則にもあつたが徳山の弟子で雲門の師匠諱を義存と言ひ證を眞覺禪師と賜はり雪峰山に住して青原下第六世の宗風を擧揚せられた人である。其頃此雪峰山の南の方の山に鼈鼻蛇と云ふて鼻頭が鼈に似て居るやうな毒蛇が居て其れに噛まれた者は命が無いと云ふ評判があつた。雪峰禪師が其れを直に宗乘第一義の問題にして門下の衆に示された云く南山に一條の鼈鼻蛇あり汝等諸人切に須からく好く看るべしと云ふに鼈鼻の毒蛇と言はれたのは畢竟何物であらうか。圓悟が已に垂示に於て豫め示されてある所の大方無外にして細なること鄰虚の如きもの常には或ひは法性とも法身とも眞如とも佛性とも涅槃妙心とも本來面目とも名けられてあるもの時としては乾屎橛だの栢樹子だの拄杖子だの黒漆崑崙だのと色々な名稱もつき平等一味の體性を以て千差萬別の姿をあらは

し花と咲たり紅葉と散たり月と照たり雨と降たりする所の怪物である其れを雪峰門下の人々が謂ゆる擒縦卷舒自由自在に取り扱ひ得るや否やを試験するため今雪峰は一條の鼈鼻蛇として提出せられたのであるそこで圓悟が着語して怪を見て怪とせざれば其怪自から壊ると言ふた拙僧などは其のやうな毒蛇などを何とも思はぬぞしかし此れは餘程の妖怪であるぞと云ふので大小の怪事といふた下の大の字は衍字で單に大小といふのは支那の當時の俗間に人を嘲ける時に大小の和尚とか大小の官人とか言ふたのであるぞうな又妨げた人をして疑着せしむこれは中々の難問であるぞと言又切須好看の下に圓と着語したこの圓の字は日本の俗語に何か物でも探して不圖見出した時にヤア此處に在つたなどと云ふやうな時の驚きの聲を寫したのであるぞうな即ち雪峰が好く看ると言はれる言下にヤア鼈鼻蛇がコゝに居たぞと圓悟が見つけた様子然し此れが見えない者もなからうに好く看るなどとは老婆心切すぎるぞと云ふので一場の漏逗と云ふ漏はモル逗はト、コホルて器物の不完全な貌であるサ、此れからが雪峰門下の人だちが如何に此の毒蛇を取扱かふかを見ねばならぬ先づ第一に長慶云く今日堂

中大に一人ありて喪身失命すと答へた長慶の慧稜禪師は雪峰門下四十餘人の隨一て亦た一方の大善知識であるイヤ南山など云ふ餘處事では御座らぬ今日現在此の堂中で其の蛇の毒氣に觸れて死てしまふたものが一人ありますぞといふ其の一人とは誰れぞ長慶自分のことか將た師匠雪峰のことか乃至吾々互ひも其一人の仲間にならねばならぬのである喪身失命とは申すまでも無いがコゝては大悟徹底のことぞ圓悟の着語に普州の人賊を送ると言ふた支那の普州と云ふ處に若し盜賊が多くあつたためか俗に普州の人と言へば盜賊のことになる其れ故に今こゝでは長慶も雪竇も盜人仲間ぞと言ふたのである更に己を以て人に方らぶ己れが其うであるから人も其うであると思ふて居るか雪峰長慶父子同道の様子を稱賛した僧あり玄沙に舉似す此の玄沙の師備禪師も亦た雪峰の法嗣で長慶と法の兄弟である仍て或る坊さんが此の雪峰と長慶との問答の様子を玄沙に話したすると玄沙云く須からく是れ稜兄にして始めて得べしサスガに長慶の慧稜兄でなくては直に斯う其の毒蛇を活かして働かせることは出来ぬと言ふた故に圓悟が同坑に異土なし一つ穴の狐ぞ奴は婢を見て慇懃權助は三どんに深

切にする、又同病相憐、ひと何れも同じ雪峰の門下であるから能く氣脈が通じて居ると言ふたのである、然るに玄沙は更に然も此の如しと雖も我は即ち恁麼ならずと言ふた、長慶はサスガに長慶であるけれども我れ玄沙ならば其うは言はぬ、圓悟が之を抑へて免れず野狐精の見解を作すことをと言ひ、又是れ、什麼の消息、ぞ何か別段出格のことでも有りそうなことを言ふて毒氣人を傷く、多くの人に疑團を起させるぞと言ふた、言葉は抑へたのであるけれども實は非常に玄沙をほめたのであることは例の如くである、僧云く和尚作麼生、然らば玄沙和尚あなた御考へは如何て御座る、着語に也、た好し、這の老漢を撻着するにとけしかけた玄沙云く南山を用ひて什麼か作さん、雪峰老師が南山に云々などと言ふが其れがつまらん、盡十方法界髓、鼻蛇の毒氣充滿しない處があるかい、そこで圓悟が釣魚船上の謝三郎、これは古人の句に釣魚船上、謝三郎、不愛南山、愛髓鼻といふのがあるのを持てきて、玄沙は海邊で釣をすることばかり知て居ても山の中の樂みは知らぬのぞと例の抑へた言葉を以て玄沙には自づから玄沙の別機軸あることを稱揚し、更に只這の野狐精、猶ほ些子に較れりと重ね、に褒め、又喪身失命するも也、た知らず、到頭毒蛇

に一番に吞まれてしまふかも知れぬと抑揚する、然るに愈々結局が同じ弟子兄弟の中でも大立者の雲門で、雲門は柱杖を以て雪峰の面前に擲向し、怖る、勢ひを作すと手に持て居た柱杖を鼻の前へ擲げ出してソレヤ髓鼻蛇が出て來たぞ、怖ろしやと言ふたアンバイ、宇宙萬象の本性本體露堂々、赤裸々丸出しに呈露して見せられた、これが雲門老漢の擒縱他に非ず、卷舒我に有る有様ぞ、圓悟が他を怕れて、什麼か作さんと着語した、毒蛇が毒蛇を怕れるわけは有るまい、人を馬鹿にしなざるなと云ふた調子、しかしサスガは雪竇の一子親しく得たり、他人の及ばぬ所があるとほめ、一等に精魂を弄す、三人の老大家いづれも大蛇退治に御骨折御心配であつたが、諸人試みに辨じて、看よ、雪峰長慶玄沙雲門の親子兄弟四人の玄機はたして如何なる異同がある、能く實參實究して看よと垂誡せられたが、雪竇老人は如何に之を辨得せられたか、次の頌に參じて見やう。

**頌** 象骨巖高人不到、

千箇萬箇採來不到者、須是弄蛇手。

到者須是弄蛇手、

是精義、精○是賊、賊○成、詳作、賊

作什麼○也、須、稜師、備師、不奈何、 喪身失命有多少、即不重、科○韶

陽知猶疑也○老漢不免作伎倆重撥草落草○在什麼處便打南北東西無處討

有麼有麼○忽然突出拄杖頭○便打拋對雪峯大張口○俯萬箇濟什麼事○

天下人換○大張口○今同閃電○然頓有未後句○剔起眉毛還不見○湖四海覺麼○

今在什麼處○如今藏在乳峯前○向什麼處去也○大小聲實也○來者○一一看○

方便○上座脚頭下○看取○師高聲喝云看脚下○賊過後張弓○第二頭○

象骨巖高○して人到らず○象骨巖といふは雪峯山の別名て山の形に依て名けられ

たのであるさうな今は義存禪師の機鋒峻峻にして容易に寄り附けぬ様子を諂ふ

たのである故に圓悟が千箇萬箇摸索不着如何なる人でも雪峯の禪機を探り得る

ことは難いと言ひ更に公の境界に非ず其う言はれる雪竇貴公の境界でもあるま

いぞと言ふて門下の人々に雪峯と益々仰がせる到る者は須らく是れ蛇を弄する

手なるべしナゼかと云ふに雪峯には怖ろしい毒蛇が居るのであるから餘程の蛇

使ひに妙を得た者で無くては到り得られぬぞ着語に是れ精は精を諷り是れ賊は

賊を諷ると雪峯と雪竇とが同道唱和する様子を言ひ又群を成し隊を作して什麼

をか作さん眞の知音は多くを要しない須からく是れ同火にして始めて得てん同

じ鍋の飯を喰つた者でなくては本統の味は分らぬ幸ひに雪竇は此の人すなはち

雪峯の曾孫であるから他人ではないしかし同じ鍋の飯を喰ふた者の中にも太郎

もあれば次郎もあるのて稜師備師は奈何ともせず稜は長慶の慧稜師備は玄沙の

師備和尚或は今日堂中云々と言ひ或は南山を用ひて什麼かせんと言ふ皆一機軸

は出して居るが之を我が曾祖父の雲門にくらべて見ると蛇の使ひ様に聊かの遠

ひがあると言ふ圓悟は何も其様な差別はない皆同罪である其んな事を言ふて居

る雪竇も亦た同罪ぞと云ふので一狀に領過す一つ宣告を與へるが好いと言ふ又

一着を放過すコレは稜師や備師は奈何ともせずなど何うやら此二人の上には

誰でも伺がひが附くかのやうに聞えるが諸人どうじや伺ひが附くかと門下を見

廻はしたやうなアンバイ喪身失命多少が有る長慶が堂中大に一人あり喪身失命

など言ふが果して能く喪身失命した者が幾人あるぞ着語に罪は重ねて科せず

少し幾たびも咎めるものでは無いと長慶等を辯護した平人を帶累す一切衆生悉



皆成佛て一人も喪身失命して居らぬものは無い、然るに幾人かあるなど、は多  
 の人に迷惑になるぞ、韶陽知り重ねて草を撥ふ韶陽といふは雲門のことで即ち雲  
 門は更に一機軸を出だし、其の鼈鼻蛇は何處に居るぞ、南山か堂中か、極樂にか、地獄  
 にかと拄杖を以て草木の生茂りて居る所を頻りに捜し求めた、圓悟が猶ほ些子に  
 較れりと賛成し、這の老漢、只一隻眼を具すと誹りの語を以て之を褒め、更に老漢、伎  
 倆を作す、諸人に鼈鼻蛇を見つけさせやうとて色々心配して居るぞと言ひ、又重撥  
 艸の下に落艸の漢と其の兒を感みて己れの醜態を忘れたる慈悲の深さをあらは  
 し、何の用處かある、何て蛇が草裡に居るものか、其様な心配をして何の効があるぞ  
 と仰へ、果然、其んなことであらうと思ふて居たと、遂に什麼の處にか有る、幾ら草を  
 分けて捜しても蛇は居るまいがナと便ち打つ、南北東西討ぬるに處なし、圓悟が有  
 りや有りや、蛇が居たか何うじや、閑黎眼、瞎すソレ、其處に居るのが見えなにか、貴公  
 は盲目になつたナ、といふて居る途端に雲門老漢は忽然突出す、拄杖頭、今が今まで  
 草を分けて居た七尺の杖をドサリと擲げ出して、其れ之れが鼈鼻蛇であるぞと言ふ  
 たアン、圓悟が看よと言ひ高く眼を着けよと言ふ、其れ能く看る鼈鼻蛇は堂中に

も居れば草裡にも居るであらうが、其う遠方を捜がさなくても此の通り手の中に  
 居るぞ、しかし拄杖と云へば拄杖に取り附くてあらうが、其れでは見えぬに依て、高  
 く眼を着けて見ねばならぬ、若しも見そこなうたら許さぬぞと便ち打つ、サテ此の  
 雲門拄杖の毒蛇が雪峰に抛對して、大に口を張る、雪峰老漢を一口に吞まうとする  
 勢ひ、豈只雪峰のみならんや三世の諸佛も歴代の祖師も皆吞み盡すの勢ひである、  
 圓悟が自作、自受と言ふ、コレは自分が作つた罪業で自分が其業報に苦しむのであ  
 る、即ち雪峰が南山に毒蛇が居るなど、言ひ出した爲めに雲門が其の毒蛇を使つ  
 て雪峰を吞ませるのでと言ふのである、然し千箇萬箇を吞却するも、什麼の事をか  
 濟さん、宇宙が萬象を吞却して居るは今更のことでは無い、何も不思議な異つたこ  
 とで無いぞとも見るが好い、然るに其れが天下人の模索、不着なる所であるから却  
 て妙じや、大に口を張る閃電に同じサテ、其の大蛇の口を張る様子が如何にも早く  
 て電光のやうであるから人が分明に見とめ得ないのであると、雲門の機鋒の如何  
 にも峻峭なる様子を言ふ、着語に兩重の公案と其のやうに幾ひも口を張る口を張  
 ると言ふには及ばぬと抑へ、果然、いくら口を張るといふたからても中々見とめに

くからうと思ふて居たがテツキリ其うであつたし、かし願ひに、最後の句あり、此の閃電光で毒蛇が活きた左もないと口を張たまゝ見世物にでも出されるかも知れなかつたにと言ふたやうな調子、眉毛を別起すれば、遠て見え、眉毛を別起すると云ふは物を見やうとして目を見はる貌を形容したので、即ち此の毒蛇を殊更に見やうとすれば、遠つて見えなくなる世の哲學者だの科學者だの宗教學者だのと云ふ人たちが色々心配して宇宙萬象の真相を搜らうとすれば、するほど疑ひに疑ひが重なつて見えなくなる、然るに不圖とした機會に直覺すれば、宇宙の本體萬物の妙用歷々分明に手の平の筋を見るやうに見える、其れを大悟とも徹底とも言ふのである、着語に、蹉過了也と見やうとしてから見えなくなつたと言ひ、五湖四海、恁麼の人を覓むるに、也た得がたし、頻りに見たがる者ばかりであつて見んと要せざる底の者は世界中に得がたいと言ふ、如今、什麼の處に、か、在る彼の鼈鼻蛇は即今何處に藏れて居るか、と次の句を呼び出した、如今、藏れて、乳峰の前に、在り、乳峰といふは雪竇山のこと、と即ち彼の鼈鼻蛇は現在吾が手の中に在るぞと言ふ、着語に、什麼の處に、向て、去る、遠て見え、ずとあるが何處へ往つたらうと言ふのであるから、此の着

語は前の別起眉毛の下に在るべきのが錯て此處へ入たのであらうと云ふことである、次に、大小の雪竇也、た、這の、去、就、を、作す、雪竇も好い加減のことをする男ぞ、鼈鼻蛇が己れの手に在るなどと手品使ひのやうなことをすると、言ひ、更に、山僧、今日也、た、一口に、遣ふ、雪竇もあの様なことを言ふて居て、一口に、吞まれば、好いがと、向上宗乗中の妙味を互ひに語り合ふ氣味、來る者は一々方便を看よ、我が乳峰に來る者は此藏れて居る毒蛇の見かたがあるぞ、何うすれば能く見えるか、其方法手段に注意しると謂ふ、着語に、看よと言ふたからとても吾は瞎めくらであるから見えない、一體に見やうとすれば見えないと云ふ品物では無いか、脚跟下に向つて看る、莫れイマに又雪竇が脚下を看よなど、云ふかも知れんが、ウツカリと口車に載せられないやうにしると豫めの着語を、更に上座が、脚跟下を看取せよ、上座といふは禪宗の僧侶の一番最初に得る階級で、日本の盲人が一番最初に受ける官職を座頭といふのと同じことである、然るに其れが通稱となつて都へての盲人のことを座頭と謂ふが如く、すべて初心の禪僧のことを上座と謂ふ慣習になつて居る、今は雪竇を輕蔑した口ぶりで他人の世話ばかり焼かずに、貴公の自分の脚下に氣を附けな

れ、鼈鼻蛇が逃げてしまつたかも知れぬぞと言ふたアンバイ、一箭を着け了れり、然かし雪竇はコゝてたしかに的を外さぬ一矢を射たやうであるぞと注意した師高聲に喝して云く、コレは筆記者の言葉で、此時雪竇は威を振ふて大喝一聲カアーツと號んで直に脚下を看よと言ふた、コレが雪竇の吾人に鼈鼻蛇を見せる方便である、其れ鼈鼻蛇は諸人の脚下に居るぞイヤ、脚下には限らぬ頭上にも面前にも背後にも天井の上にも床の下にも盡す方法、界鼈鼻蛇の毒氣が花とも咲けば月とも照て居るぞ、そこで圓悟が賊過て後に弓を張ると着語した、最初から脚下を看よとナセ早く言はないのであると抑へ、又第二頭、第三頭に方便を看よと言ふさへ第二頭であるに更に脚下を看よとは第三頭で御丁寧すぎるぞ、更に重言は吃に當らず吃は俗に下モリと云ふので餘り御丁寧すぎるのは過ぎたるは及ばざるが如してあるから言ひ過ぎるのは言ひ得ないにも劣るぞと言ふのである、然し圓悟が此のやうに同じ意味のことを幾つも着語したのであらうか有るまいか、恐らくは後人の附加も多からうと思ふ。

第二十三則 保福妙峰頂

**垂示** 玉將火試。金將石試。劔將毛試。水將杖試。至於衲僧門下。一言一句一機一境。一出。一入。一挨。一拶。要見深淺。要見向背。且道將什麼試。請舉看。

玉は火を將て試み、コレは淮南子といふ書に出て居ること、凡そ眞實最上の玉は三日三夜猛火の中に投じて置て色が變らぬと云ふ、金は石を將て試み、コレは試金石といふ黒い圓い石があつて純金の眞偽を試験すると云ふ、日本の俗に黒の碁石へ金を磨りつけて其色を試むることがあるも同様のこと、見える劔は毛を將て試み、コレは常に吹毛の劔などと言ふことであるが劔の刃へ毛を吹かけると直に其毛が斬れると云ふほどの鋭利を言ふたもの、水は杖を將て試み、コレは水の淺さは杖を立て、見れば分ると云ふ、さて以上は皆譬喩であるが、今わが衲僧門下に至つては何を將て其の悟りを試験したものであらうぞ、或ひは一言一句の問答

の間に、或ひは一機一境の應對の内、或ひは一出一入と進んだり退いたりする途端に、或ひは一挨拶一拶コレは軽く觸るゝを挨拶と曰ひ強く觸るゝを拶と曰ふと云ふが互ひに意見知識を交換するすべての姿と見て宜しい、さて是等の色々の手段方法を以て參禪辨道の人の知見が如何ほど深いか浅いか、又その行業が如何に道に向ふて居るか背いて居るかを検査しやうとするのである、然るに今わが圓悟門下に於ては何を以て諸人を試験したもので有らうぞ請ふ擧す看よと本則を拈出する、

**本則** 擧保福長慶遊山次落草福以手指云、只這裏便是妙峰

頂平地上起平地地深埋切慶云、是則是、可惜許同病相憐○兩箇一坑埋知、雪竇着

語云、今日共這漢遊山圖箇什麼不助復云、百千年後

不道無只是少是少後學似鏡清有清云、若不是孫公便見

髑髏遍野同道者方知○設便臨濟德山出來也須喫棒

保福の從展禪師は第八則にも出てあつた人で、やはり前則の雪峰の弟子であるから

長慶とは法の兄弟である、或時兄弟二人で山へ遊びに往つた、次で保福が手て其山中の地を指さして云ふには、只這裡便是、是れ妙峰頂、この妙峰頂といふことは、華嚴經の故事で善財童子と曰ふ人が妙峰山の頂上に昇つて徳雲比丘といふ大徳の知識を尋ねられたと云ふことがある、此れは譬喩であつて謂ゆる宇宙萬象の本體本性が一味平等で悉く眞實完全であるといふことを山に譬へ、さて又其の眞理の頂上に於て吾人の本來面目を徹見せねばならぬことを徳雲比丘を尋ねたといふたものである、然るに大概の者は其の眞理の頂上いはゆる妙峯頂を大層遠方ばかり求めて居るから、保福が兄弟である長慶が之を何う見て居るか、乃ち水を試むるの杖を下して、山の中を遊びあるきながら獨り言を云ふやうに、コ、が妙峰頂じやナと道ふたのである、果して長慶が之を耳に挟んで、是なることは、則ち是なれども可惜許と挨拶した、コ、が妙峰頂じやと云ふのが一往は尤もであるけれども、其のやうなことを言ふだけハヤ詰まらぬ惜いことに、妙峰頂が崩れかゝつたぞと云ふたやうなアンパイ、圓悟の着語が最初に這の兩箇落草、漢保福も長慶も二人ともに正路を行かずに横道へ入つたぞと云ふ、便是妙峰頂の下に平地上に骨堆を起す餘

計なことを言ふて平坦なる處に凹凸を起させる切に思ひ道着すること。を何となりとも口に出して道着すればハヤ第二第三じや、妙峰頂と聞けば何となく高い處といふ妄想を起すてあらうから地を掘て埋めてしまふが好いと云ふ、可惜許の下へ若し鐵眼銅睛にあらざれば幾んど惑了せられん、長慶は實に非凡な眼睛を具へた人であるから、可惜許の一言で蹴飛ばしたけれども、尋常の人であつたならば彼れ保福のために惑はされるて有らうにと云ひ、然し是なることは則ち是と言ふた様子では同病相憐れむものと見える、イツを保福も長慶も兩箇一坑に埋却せんと云ふ、倍又た雪竇の着語は云く、今日這の漢と共に遊山して箇の什麼をか圖る一鉢に保福と長慶とは遊山であると云ふなら只遊山で好からうに物々しくコ、が妙峰頂であるなどと言ふたり、其れを是なることは則ち是なりなどと相鏡うつたり、何の徒づら事をして居るのかと咎めた實に其の通りのこととてコ、はコ、て何の不足がある、然るにコ、が妙峰頂であるなどは毛を吹て疵を求むると云ふものを、圓悟は妨げず人の斤兩を減ずるを斤兩を減ずると云ふは目方が減る價值が下ると云ふこととて、即ち今雪竇の着語は保福長慶兩大家の威光を損するけれども已む

を得ぬと雪竇に賛成し、猶ほ些子に較れり、實は此着語も未だ十分では無いが言はぬには勝ると言ひ、傍人は劍を按ず、保福や長慶は誰も他人は居らぬと思ふて落艸な問答をして居るであらうが、傍らに此の雪竇が恐ろしい勢ひで今にも斬りかゝるばかりぞと云ふ、雪竇は更に再び復た云く、百千年後無しとは道はず、只是れ少しコレは雪竇が飽くまで保福長慶を稱揚したのである、圓悟は抑へて少寶弄、その様に押賣りしても買手があるまいぞと言ひ、更に也た是れ雲居の羅漢おそろしい高慢じやナと擲擲ふた後に鏡清に舉似す、鏡清道徳禪師のことも前に己にあつたが、同く雪峰の弟子である、此人が此保福と長慶との問答の話を聞て、若し孫公にあらざれば便ち彌伽の野に逼きを見んと言はれた孫公といふは長慶のこととて、長慶の俗姓は杭州の孫氏であるさうな、即ちサスガは長慶である若し此時に長慶が可惜許と抑へて置かなかつたならば、世界中の參學の人々が保福の言葉に付き廻はつてコ、が即ち妙峰頂ぢやといふ所に滞つてしまふから、其上に活きた働らきが出来ないで皆死んでしまふに依て其の彌伽が限りもなく多くなることであつたらう、にと言ふのである、圓悟が好あり、惡ありと云ふたは鏡清に判斷させたら保福長慶

の好悪が分るであらうと言ふたのであらうが此の着語は取るに足らぬと云ふた古徳もある更に同道の者方に知る此の三人は同じ雪峰の子で兄弟ぢやから能く知て居るワと言ひ又大地茫茫として人を愁殺す鬻體の野に遍き有様これを見て愁殺せぬものは無からうと却つて其の鬻體を拈弄して本地の風光を稱揚するのである奴は婢を見て慇懃兄弟三人互ひに親しいぞ設使臨濟德山出ても須からく棒を喫すべしコレは鏡清の着眼の高き其の言句の氣高い所をほめたので此の調子では臨濟でも徳山でも立派に勘破せられるであらうと言ふのである

頌

妙峯孤頂草離離

和身没却脚

拈得分明付與誰

用作什麼大地

作何用拈得鼻孔失却口

不是孫公辨端的

錯了也不知

鬻體着地幾人知

更不再活

粟○固案拈得鼻孔失却口

すべて禪語に孤峰とか峰頂とか言ふのは平等一味の本體本性のことで智慧に屬し又艸裏とか落艸とか言ふのは差別萬象の現相妙用のことで慈悲に屬す或は真諦と俗諦とに配して見るも同様である然るに今保福は其の平等一味の體性を示

さうとて這裏便ち是れ妙峯頂と言ふたゞけハヤ落草の談ではないか大智慧真諦門は到底言葉にあらはし得べきものではないに其れを何となりとも言葉にあらはせば直に大悲悲俗諦門のこととなるその様子を雪竇が妙峰孤頂草離々すなはち山の頂上そのまゝが谷のどん底ぞと言ふたのである故に鬻體が身に和して没却す其言はれる雪竇御自身も首ッたけ艸の中へ落ち込まれたぞ更に脚下己に淡きこと數丈いかにも雪竇は慈悲の深い人ぞとほめる拈得分明なれるとも誰にか附與せん尤も保福が這裡妙峰頂と言ふた意味は固より能く分つて居るナゼかと云ふに長慶の立脚地を勘檢しやうとしたのであるから其れは宜しいがコレが長慶であつたから宜しいけれども若し他の眼の明かない奴があつて保福の這裏妙峰頂といふのを無價の珍寶でも拾ふたつもり喜んで聞くやうであつたなら誰にか附與せん其の拈提した妙峰頂の始末を何うつけるつもりであるかと咎めた鬻體が用て什麼をか作さんイヤ此の鬻體などは其の様な物を附與してもらうても使ひ道が御座らぬと云ふ大地人の知るなし世界中に其の様なものゝ用ひやうを知つた者はあるまいぞ乾屎橛コレは支那人が人糞を日光に乾かして肥料にす

る其時に人糞をかきまはす棒のことさうな、ソコで妙峰頂などといふものを拈弄されては臭くて穢なくて何の用を作すに堪えんと言ふた又鼻孔を拈却して口を失却すコレは一方を捉まいたと思ふうちに一方を失ふた有様すなはち言葉で言へないことを言へば分つたやうに分らないことになる是れ孫公端的を辨ずるに不ずんば獨體地に着き幾人か知らん若しも長慶が可惜許と抑へて置かなかつたならば鏡清の言はれる通り世界中此の妙峰頂で死てしまふ人ばかり多くなつて能く其の真意義を知り得る者は幾らもなかつたらうと言ふのぞ着語に錯その端的を辨ずるといふのがハヤ間違ひではないか箭を看よ孫公の可惜許と射た矢は何處に中るぞ賊を著け了るも也た知らずたとへ孫公が能く端的を辨じ得ても鏡清だの雪竇だのと云ふ盜賊どもに窺はれて居るぞと言ふ更に再活せず然し現在目前己に觸腹どもが多いのは何としても再活のしやうはあるまいと吾々に起死回生の薬を含ませるイヤ其の死人が麻の如く粟の如し救ひやうも助けやうも無いぞと警誡するしかし雪竇が是の如くに宗乘向上の事を頌し得て分明なるも其れがハヤ鼻孔を拈却して口を失却するアチラ立てればコチラが立たぬ九尺二間に戸が二枚といふ有様ぞと言ふ

第二十四則 劉鐵磨臺山

**垂示** 高々峰頂立。魔外莫能知。深々海底行。佛眼覩不見。直鏡眼似流星機。如掣電。未免靈龜曳尾。到這裡合作麼生。試舉看。

高々たる峰頂に立つと言ひ深々たる海底に行くと言へば何か反對なることを言ふたやうにも開ゆるが要する所は宇宙の本體本性は不可思議不可説の境界であるに依て天魔外道の徒が能く知ることが出来ないばかりでなく佛陀の五眼でも見ることとは出来ぬこゝに至りては直鏡その眼は流星の如くに鋭どく其の機合は掣電の如くに疾くても未だ免かれず靈龜尾を曳くこの靈龜曳尾といふことは前にも出てあつたが莊子に出て居る話で龜が卵を砂の中へ生み落して其れを他の動物に取られないやうにするため跡を味まして遠く離れて遊んで居るけれども其の遠く離れて往くときに尻尾を引ずりて往くために何ほど遠くへ往ても其の

卵を生んだ處が能く分るといふことである。今此の高々たる峰頂または深々たる海底に墜へられる所の事も已に一念でも心に分別を起し一言でも口に説話し一指でも身に動作したならばハヤ其の痕迹を藏せば藏すほど見えることになる。サ「斯る場合に臨んで合に作麼生結局どうしたものぞ、次に擧る所の公案を參究して見よと云ふ、

**本則** 擧劉鐵磨到瀉山不妨難湊泊山云老特牛汝來也草

磨云來日臺山大會齋和尚還去麼不礙發瀉山大磨打鼓新羅

放身臥中也誰知過檀溪別有符思量磨便出去機而作

劉鐵磨といふは俗姓劉氏の婦人て出家して比丘尼になり潭州瀉山の近傍支那里敷て十里といふに小庵を結んで居り常に瀉山の靈祐禪師に參し大悟徹底したのみならず餘程峻峻なる氣鋒を具へたお婆アさんであつた法名も何とか附けられてあつただらうけれども誰も其名を呼ぶ者はなく鐵磨と綽名を附けられて居た鐵磨といふは鐵の白といふことと如何なる物でも粉微塵に碎いてしまふとい

ふ意味である其婆々が或る日のことであつたが瀉山に到る瀉山の靈祐禪師は達磨九世の法孫て百丈大智禪師の嫡子である然るに劉鐵磨は一女子の身を以て此の孤危峻峭なる瀉山禪師の處へ御機嫌伺ひに出掛けて來たそこで圓悟が妨げず湊泊し難しコ、は容易に寄り附けぬ場處であるに這の老婆本分を守らず婆々は婆々らしくして居れば好いに分限を知らぬぞと抑へたとも見える又は己れの立脚の地を棄て、他の瀉山へ往くなどは脚下が落ち着かぬぞと言ふたとも見える山云く老特牛汝來也特牛といふは子を育て、居る牛のとが即ち女牛であるコレは瀉山禪師は平生自分のとを水牯牛と言はれて遷化の後には極樂へも往かず人間天上にも還へらず門前の水車屋の牛になると言ふて居られたそこで鐵磨婆々の顔を見るやイナやヤ一老ぼれ女牛とのお前來たかノと言ふた此の言葉の中に異類中行の響きがあるといふ異類といふは人類と異なつたる種類といふことであるけれども今に專はら畜生をさして言ふ中行といふは其の中へ行くといふこととて前に申した瀉山禪師が佛土にも往かず天國にも生れて水牯牛になると云ふたやうなのが即ち異類中行である更に之を老婆心切に話して見れば佛法の仕



事は衆生濟度の外は無、衆生の尤も憐むべきは畜生や餓鬼や地獄の類である、其れを濟度するには天上に生れたり極樂へ往生したりして居ては目的を達せられない、たとへ浄土門の如き其の極樂往生を専らに勤める宗旨であつてさへも、一旦極樂に往生して無上菩提を成就した上には必ず還相回向と本の娑婆へ逆戻りして、五濁惡世を救はねばならぬのである、況んや今自力聖道の極點たる直指單傳の祖道を成辨した者であつたならば、異類中行は當然の仕事であつて其、實何の不思議もないことである、そこで瀧山禪師は自身も牛が理想であるから鐵磨を見て女牛どの來たかと聲を掛けられたのは、釋迦如來と多寶如來との會見のやうなもので、此上もない尊敬の御挨拶と云ふても宜しいのである、しかし鐵磨婆々はたして能く此の御挨拶を受け得べきや否やと云ふので、圓悟が先づ點といふた即ち老牝牛と點定められたが、其れが直に探竿影草で鐵磨の脚下を點檢せられたのである、其次に什麼の處に向てか、聲訛を見ん中々これは容易に辨別しにくい處である、ぞと吾々に注意せられた、然るにサスガ平常瀧山水牯牛の食つて居る草を食つて居るだけありて磨云く來日臺山に大會齋あり和尚還て去るや、明日天台の五臺山

に大會齋があります、和尚は出でになりますか、と云ふ瀧山は鐵磨に向つて來也と言ふたに答へて鐵磨は去廢と言ふも面白い應對じや、五臺山は潭州の瀧山から數千里の遠方である汽車や電車の開けた今日でも明日の間には合はぬ、しかし其の大會齋といふは無遮會とも申して上は佛菩薩より下は地獄餓鬼畜生までも皆な平等に供養する法會であるから、佛さまも牛どのも皆一同に出掛けて往くべき所である、どうじや和尚往くか、と老牝牛の老牝牛たる氣焔を吹きかけた、着語に箭は虚く發せず、ハッシと瀧山の胸板を射とふしたと云ふ、又大唐に鼓を打ては新羅に舞ふ、水牯牛と老牝牛の應對ぶりが誠に面白い曲調ぞ、大唐と云ひ新羅と云へば非常に遠方かと思ふに、コチラて來たかと囁せば、アチラて去るやと踊る、しかし放去は、太た速かに、收來は、太だ遅し、鐵磨が遠慮も會釋もなしに、ノソノソと瀧山の險峻を犯したく、あひ、又瀧山が老ぼれ女牛どの來たかと一移した様子、いづれも出際は中々銳利であつたが、引込ぎはが少々ゆるくなり、そつてあるぞと、此次の立合を豫め擲槍した、瀧山身を放つて、臥す、水牯牛はコロリと寝てしまふた、コ、に到つては言語道斷、心行處滅で到底講釋も説明も出來べきでは無い人々各自に實參

實究して冷暖自知するに任せる外は無い、しかし此のコロリと寝た所は佛の姿であらうか牛の形であらうか、瀧山に居るのであらうか、臺山へ往つたのであらうか、國悟は中れり瀧山の放つた矢が鐵磨の胸板へグサリと中つたぞ、備什麼の處に向てか、瀧山を見ん瀧山がコロリと寝た所の活機は如何なるものぞ、高く眼を着けて看よとの警誡誰か知らん、遠き煙浪に別に好思量あることを、何の意味もなしにコロリと寝たといふわけでは有るまい、遠方の烟浪を眺めるうちに佳作の詩でも出来るのであらうと云ふとは云ふものゝ分別思量に涉つてコロリと寝たのなら其れは凡夫じや、之に對して鐵磨は如何にするぞ、磨便ち出て去る老牝牛は左様ならとも何とも言はずにスーッと出て往てしまふた、コレも亦た思量分別には涉らない、況んや言句伎倆の境界では無い、水牯牛はコロリと寝る老牝牛はスーッと出て往く、コレで兩牛の相見相濟んだ、着語に過也、モリ往てしまふたかと云ふたアンバ、イ機を見て作す瀧山も瀧山であるが、鐵磨も鐵磨である互ひに少しも隙間がないと稱揚した。

頌 曾騎鐵馬入重城世戰作家○七○外 勅下傳聞六國清子○街○教○書○實○中○天○

猶握金鞭問歸客人扶○相招同往又同來 夜渡誰共御街行向○案○且道

什作

鐵馬と云ふは武装した軍馬のこと、今劉鐵磨が無遠慮にも瀧山の室内へ踏込て來た有様は三軍をひきひる老將軍が鐵馬に騎て重城に乗り入つたやうである。と云ふ、重城は塹溝やら牆壁やら幾重にも要塞堅固なる城廓のすがた、それ故に國悟が戰に慣れたる作家と着語し又塞外は將軍と言ふた、コレは第二句の下に寰中、は天子と言ふたに對して、要塞以外に敵を攻むることは是の如き老將軍の責任ぞ、殊に七事身に隨ふ七事と云ふは弓矢刀劍甲冑戈の七ツ道具であると云ふ、説もあり又は左傳の宣公十二年の下に夫れ武は禁暴戢兵保大定功安民和衆豐財者也、ある是の七事が尤も肝要であるとも云ふ、とにかく連戰連捷しそなな大將ぶりよと云ふ、然るに第二句に勅下りて傳へ聞く六國の清きをせつかく鐵馬に騎て重城に入り金鷄勳章功一級の手柄をと思ふたに君王の詔勅を拜して見ればモハヤ六國は泰平に成つたとある、六國といふは秦の頃の話であるが今は廣く天下泰平國土安穩て武人が力を盡して功を立つべき事は無い、これは申すまでも無く劉鐵

磨が犬に瀧山老人を勸破してやらうと思ふたかひもなく老牴牛汝來也と安らかに一擲せられた景況、閻悟が狗赦書を啣むと言ふた、コレは後漢書にある故事で昔し大金國から狗を獻じ來つた其狗は身のたけ五尺、ものは言はぬけれども心は人にも勝つて居ると云ふので時の天子から赦書を其狗に賜つた、然るに其狗は其赦書を口に銜んで支那の國中を遊んであるいたが、立派な諸侯たちも其赦書に觸れることを恐れて狗のために道を避けたと云ふ話である、今や瀧山が老牴牛汝來也といふた此の勸語に出あふては如何に頑強なる鐵磨でも避けるより外に道はあるまい、寰中は天子國が亂れて塞外の戰爭といふ時には將軍の力を要するけれども、秦平の寰中は天子の御威徳のみぞと云ふ、争奈せん海晏河清で四海浪靜にて枝もならさぬ時の風と云ふ時節、ササガの鐵磨婆々も手持無沙汰の風情ぞとからかつた、第三句に猶ほ金鞭を握つて歸客に問ふ、いかに秦平の勸語が下つたからと云ふても、せつかくの軍支度をと云ふので臺山に大會齋あり云々と一戦いどみて見たが、夜深くして誰と共にか御街に行かん、時しも夜半のこととて城中はヒッソリと誰一人さわぎあるく者はなし、そこで劉鐵磨は無功の功を奏して便ち出て去ると

凱旋してしまふた、第三句の着語に是れ、什麼の消息ぞ、己に秦平に成たと云ふに更に戰地からの歸客に問ふとは何事ぞ何を問はんとするのであるかと咎めた、一條の拄杖、兩人扶る、コレは鐵磨ばかりでは無い瀧山も同様ぞと云ふので、和尙、遠て去るやと戦ひを挑めは身を放つて臥すと治に居て亂を忘れぬ姿が双方に見える相招き相往き、又同く來るとこまでも同行二人はなれない有様、双方優劣なき姿、第四句の下に君は瀧淵に向ひ我は秦に向ふ同行二人とは云ふものの、兩人各自轉身の作畧は各別ぞ、且らく道へ行て什麼をか作さん、雪賣は誰と共にか行かんと言はれるが、秦平の御街にうろくして何をすつものりかといよく、秦平無事を謠ふたのである。

第二十五則 蓮華庵主不住

**垂示** 機不離位、墮在毒海、語不驚群、陷於流俗、忽若擊石火裡、別、縑素、閃電、光中辨殺活、可以坐斷、十方壁立千仞、還知有恁

### 麼時節麼試學看

機と云ふは、大明録と云ふ書に言を離れて獨り至る之を機と謂ふと釋してあるのが一番に解し易い、心の中にチラリと感じたことが未だ言葉には出さない所で機と名けられる、其れが己に悲いとか嬉しいとか言葉に出れば之を語と謂ふのである、又位といふは其の立ち場を謂ふのであるから、機位を離れざればと云ふは心の中にチラリト感覺した其心の作用が其感覺を發した場處を離れず、例へば涅槃とか菩提とか又は祖師西來意とか佛法の大意とか云ふ問題に就ても豁然として省悟する所があつて獨りてニコリと笑ふ場合があつたとしても、之れが即ち祖師西來意である、此外に佛法の大意は無いといふやうに、其の悟りに執着して離れることが出来ないやうでは決して自由のさくものには無いに依て、毒海に墮在すにあつて、到底助かることは出来ぬぞと云ふ、又其機が己に文字言句に顯れたからには、必ず超凡拔群の氣象が具はるはずであるから、たとへ其言葉は尋常一様であつても、ソコに一種特別の威風があつて、多くの人を驚かすことになるものである、然るに其れとは反對で如何ほどに大言壯語しても奇文妙句を並べても頓と人を

驚かすに足らぬやうでは、其れは世間普通の凡庸の人といふものである、其ことを今は語群を驚かさざれば流俗に陥いると言ふた、コレは元來洞山大師の語を借て來たのである、忽ち若し、擊石火裡に、緇素を、別ち、閃電光中に、殺活を、辨せば、實に機鋒の峻峭なることは石と石とをカチリと打ち着ければ、ピカリと火が飛ぶ、其火の光に暗闇の中に在る物の白いか黒いかを確かに見留める、又は稻妻のピカ／＼とひらめく間に死ぬか活きるかの問題を決着することが出来るほどの俊發伶俐であつてこそ、以て十方を坐斷して、壁立千仞なる可し、十方を坐斷するとは宇宙萬象を超越する姿、壁立千仞は非常に高い斷岩絶壁の手の掛け所も足の踏み場も無い有様で、如何なる人も寄り附けないと云ふこと、還つて、麼の時節あることを知るや、今此の座に在る所の諸人は、誰も彼も是の如き時節に到らねばならぬのであるぞと吾々が互ひまでに警誡せられて、サテ例の如く本則を擧著せられた。

**本則** 擧蓮華峰庵主拈拄杖示衆云、看○取門上具一集 古人到這裏、

爲什麼不肯住、不可○向虛空裏釘 衆無語、千箇萬箇如麻似粟○却較 自代云、爲

他途路不得力

若向途中辨悟爭年月程○假使復云畢竟如何

人中一箇

又自代云柳標橫擔不顧人直入千峰萬峰去

○願後見思

莫與往來

○只爲三十字板

迷華峰といふは天台山であるとも云ひ又は廬山であるとも云ふが鳳潭の鐵壁雲

片に據れば天台の桐柏山上に九峰あり其中に迷華峰といふ一峰があると云ふて

ある其峰に祥庵主と云ふ人が住して居た此れは雲門大師の法嗣の金陵の奉先道

深禪師と云ふ人の弟子である常に參禪の客を見れば直に拄杖を拈して古人這裡

に到て什麼としてか肯て住せざると言ふて擲着する外には他に一語も言はぬ其

れが二度や三度のことでは無い二十年一日の如く誰に向つても此の問題の外は

無い丁度前に在つた俱胝和尚が一生涯一指を立てるばかりであつたのと同様の

接しかたである然るに其の長い間に多くの人の事であるから相當に此の問題に

對して何とか答へた者もあつたであらうけれども遂に庵主の機に契ふた者は無

かつたと云ふ拄杖といふは禪宗の師家たる人が常に手に携へて居る所の杖であ

るが今は其の杖が直に宇宙萬象の本體一切衆生の本性本心を代表して居るので

ある若し之を佛法くさい言葉で言へば即ち此の一條の拄杖子が佛である如來て

ある悟である菩提涅槃である本來の面目である一切諸佛の淨土である其れを拈

ずるといふは目の前に高く突き出して古人這裡に到て什麼としてか肯て住せざ

る這裡と云ふは即ち拄杖のこと謂ゆる菩提涅槃とも如來淨土とも大悟とも見性

とも云ふ場處をさす三世の諸佛も歷代の祖師も此の見性大悟の立ち場菩提涅槃

の地位には決して止住して居らぬ必らず大悟却迷とも云へば退歩却來とも云へ

ば回光返照とも云へば還相回向とも云ふて必ず本の地位へ逆戻りするは何故て

あるぞとの問題であるそこで圓悟が先づ第一に看よと着語した彼の庵主が拈起

して拄杖を見そこなはぬやうにせよと言ふのである見そこなはぬと云ふは拄杖

に取りつけと云ふことでは無いぞ更に頂門上に一隻眼を具す此の庵主は實に眼

力の高い人ぞとほめ然るに當世能く之を合點する者は無い也た是れ時人の窠窟

で多くの人は誤り解して邪路に迷ふて居るぞと悲しんだ爲什麼不肯住の下に虛

空裏に向て釘鏝すべからずコレは今さら庵主が其様な問題を出されても虚空に

釘を打つやうなもので何の答へもあるはずが無いぞと云ふ又權りに化城を立つ畢竟庵主が拄杖だの這裡だのと云ふのも未だ本場處では無い假りの小休み場處よと抑へた化城といふは法華經にある故事で未だ本統の成佛に到らぬうちに暫時成佛の候補者になつた位地を化城と云ふたのである。化は幻化の化の字で眞實でないと言ふ意味である。偈云、または祥庵主が廿年來いつても誰にても移着した問題であるがコレから後の處は全たく庵主が愈々遷化の臨終といふ時になつて相變らす此の問題を提出して門下の人々の答を要したのであつたが衆無語で誰一人これに答へる者が無い着語に千箇萬箇麻の如く粟の如し幾人居ても皆艸木同様じやけれども此虚空に釘懸するやうな問題に向て一言を發しない所は却て些許一棚の俊闊いつれも俊發な準鷹であると思ふたに残念なわけサと言ふ、そこで庵主自から代て云く他の途路に力を得ざるが爲めなりコレは禪語に途中家舎といふことがある家舎といふは即ち人々必らず落ち着くべき所の家郷謂ゆる本來の面目の顯はれた場處を云ひ途中といふは其の家舎に到るまでの修行を云ふの

である、そこで今此の途路に力を得ざるが爲めなりと云ふは、凡そ杖といふものは途中でこそ必要なものであれ己に家舎に歸着してから後には用の無いものよ、之を佛法くさい言葉で言へば己に自利の修行が成就して悟りの開けた上には利他の仕事に取り掛かるのであるから己れの悟りの拄杖に取り着いて淨土に滯留すべきでは無い親戀上人の言はれる通り安樂淨土に到る人五濁惡世に還りては釋迦牟尼佛の如くにて利益衆生さほも無しと娑婆往來八千返すべきである、圓悟が若し途中に向て辨ぜば猶ほ半月程を争はんと着語した今此の問題に對して庵主が途中云々と云ふ其の言葉に附き廻つて居たならばなほ家舎までも十五日もかゝるほど道が隔つて居るであらうと言ふ設ひ力を得るも什麼を作すにか堪えん幾ら拄杖の力を得ても途中に居ては何の効もないぞと學人を警策し、豈全く一箇なかる可けんや他人はとにかく圓悟もコレに居るぞといふたアンパイ復た云く畢竟如何庵主の慈悲深重なる更に斯く拶着せられた結局どうしたものぞと云ふのである、圓悟が千人萬人只這裡に向て坐却す誰も彼も只この畢竟如何と押し詰められる所に腰を折らぬものは無いと言ふ、しかし千人萬人中一箇兩箇は合せん

一人や二人は合點する者もあらうと放したが、吾々も互ひも其の一二人の中に入らんことを希ふべきである。然るに今庵主の座下には更に一人もなかつたと見えて又自から代つて云く、柳標横に擔て人を顧みず直に千峰萬峰に入り去る柳標といふは天台山中にある木の名で拄杖を作るに適當であるといふ邊から直に其れが拄杖のよになる。尤も面山和尚は拄杖の梵語を柳標と曰ふと言はれてあるが何を確乎たる典據のあるとか知らんとかかく今は拈じた所の拄杖を横に引擔いて餘處目を振らずにスーッと山奥ふかく行衛が知れなくなつてしまふたと言ふのを拄杖を拈起して其の道理を研究しつゝあるかと思ふうちにハヤ横に擔て千峰萬峰に入り去つた。即ち庵主が這裏に住せざる様子分明である。垂示に謂ゆる機は位を離れて語は群を驚かす的消息ぞ、圓悟は也た好し、三十棒を與ふるに庵主の軍功に對して三十棒の賞典を與ふる價值があると云ふ、只他の擔板なるが爲めなりイヤサ庵主が擔板漢であるから人も顧みず千峰萬峰に入り去つたのだと更に抑へた。其上に、腦後に腮を見るは、與に往來すること、莫れとコレは學人への警誠と見える。腦後に腮を見と云ふは人の背後から其人の腮の骨の見えるやうに

突き出て居るのは惡人の相で、其の様な人と道つれになつて歩くと如何なる災難に遭ふかも知れぬといふのである。今詳庵主の機鋒は實に一種特別であるけれども、それに附き廻つて跡尻を追ふてはつまらぬぞと云ふ注意である。先づ本則は斯うして置て次に、

**頌** 眼裏塵沙耳裏土

塵沙三百擔 耳裏三百擔 更有幾塵沙 更有幾塵沙

千峯萬峯不肯住

不肯住 處去 且

道是什 落花流水太茫茫

好箇消息 左顧 右顧 萬劫

剔起眉毛何處去

下更

眼裏塵沙耳裏土 塵沙三百擔 耳裏三百擔 更有幾塵沙 更有幾塵沙

眼裏は塵沙耳裏は土といふは庵主の境界が見聞覺知を超越して幽玄とも微妙とも言ひやうのない有様を讚歎したのである。ソコで圓悟が憧憬三百擔と相鏡を打つ。憧憬といふは不慧のかたちとも無分曉の義とも言ふて善惡邪正も是非曲直も全く分らぬ姿それを三百擔も背負ひ込んで居ると云ふ、即ち凡聖迷悟を蕩過した本分の境界を大智は愚の如しと稱讚したのである。鶴々突々什麼の限りが有らん鶴突といふは濁亂の義または汚穢のかたちで庵主の眼裏は塵沙耳裏は土泥なる

有様を更に強く形容してムサイともキタナイとも言ひやうのない庵主ぞと云、  
 の着語は頌の句と共に皆裡面から庵主の境界の清淨高潔さを稱讃するのである、  
 更に恁麼の漢ありコレは雪竇に向つて祥庵主の外に又雪竇のやうな男もあると  
 同じく托上したのである、千峰萬峰背て住せず拄杖を横にひつかついで直に千峰  
 萬峰に入り去るといふからどこぞの山奥にても幽居して居るかと思へば其處に  
 も亦た肯て住せず到底行衛が知れぬ即ち没蹤跡である、圓悟は之を捉へて行衛が  
 知れぬといふなら備什麼の處に向てか去る一體どこへ往つたのであるぞと、コレ  
 は吾々互ひに庵主の行先を參究させやうと云ふのである、又且らく道へ是れ什  
 麼の消息ぞ何故に住處が定まらぬのであるぞ、イヤ定めぬのであるぞ、審細に參究  
 せねばなるまい、然らば愈々没蹤跡て行衛を見留めることが出来ぬかと云ふに落花  
 流水太た茫々、觀音大士の三十三身落花となり流水となるばかりでは無い殘月と  
 もなり斷雲ともなり春雨とも降れば松風とも吹くコレは即ち不住の姿である、其  
 の涯際なき様を太た茫々といふた、着語に好箇の消息よく言はれたぞ、然かしコ、  
 が即ち閃電の機ぞ、徒らに作思を勞し、左顧すれば、千生、右顧すれば、萬劫、あれのこれ

のと思慮分別に涉つて居たならば千生萬劫にも埒が明かぬぞと云ふ、眉毛を剔起  
 すれば何の處にか去る、眉毛を剔起するといふは目を見張る姿て此の庵主の擊石  
 火閃電光の機を見やうとすれば却て千里萬里の隔たりとなつて何處へ往てしま  
 ふか分らぬぞと學人への注意と見える、着語に脚跟下更に一對の眼を贈らん何の  
 處にか去ると云ふたからとても遠方へ飛び去つたといふわけては無い、眉毛を剔  
 起するから見えないのであるが脚下の眼で見るが好い、其眼が無いといふなら一  
 對さしあげやうぞと云ふ、元來只這裡に在りどこへも往かぬぞ、還て庵主の脚跟を  
 截り得たりや、一鉢に庵主の行衛が分らなくなるのが心配であるならば其脚を截  
 つてしまふて何處へも往けぬやうにして置けば好かつたに庵主を取り逃かさぬ  
 やうにと云ふ、然も是の如くなりと雖も須らく是れ這の田地に到つて始て得べし  
 然しコレは是非とも脚跟實地を踐んで其の境界に到らぬ限りは何を言ふても空  
 論ぞと警誡して更に打て云く、什麼としてか只這裡に在りや、前に元來只這裡に在  
 りと言ふて置たが何故に這裡に在るのかと重ね／＼學人を警誡されたのである、



第二十六則 百丈奇特事

**本則** 舉僧問百丈如何是奇特事言中有響○句裏呈機○丈云獨坐大

雄峯嶺南威風四百州○僧禮拜俗人見○也○有○丈便打作家宗師何故來○

此の公案にも垂示は欠けて居る。本則の百丈は山の名で本名は大雄峰といふのであるが其の高さが百丈あると云ふので百丈山ともいふのである。其山に六祖大師の曾孫で達磨九世の法燈を繼いだ慧海禪師が居られたのを常に百丈禪師といふのである。此人は始めて禪宗の都べての規則を定められたので五家七宗とも別して尊崇する人で後に大智禪師といふ勅號をも賜はつてある。或る僧が此の禪師に向つて如何なるか是れ奇特の事と問ふた。元來佛法中に奇特とか不奇特とかいふことが有るものであらうか將た無いもので有らうか。斯の僧は有ると認めて問ふたであらうか無いと認めて問ふたであらうか。自力聖道の事とも言はず他力淨土の事とも言はず大乘小乗とも言はず顯教密教とも言はず向上向下とも言はず、

往相還相とも言はず。只是れ奇特の事と問ふた。着語に言中に響ありと言ひ又句裏に機を呈すとある。イカさま全くの門外漢では無さそうナ而かも其の問ひぶりの勇ましさ人が驚殺す。しかし其の奇特の事が眼ありても曾つて見ざるか見えろうなものであるのにと云ふて百丈の答語を呼び出す。丈云く獨坐大雄峰。コレは百丈禪師が大雄峰の主人公であるから斯う言はれたのである。若しも此れが彌陀如来であつたならば獨坐極樂界と言はれ若し釋迦如来であるならば獨坐靈鷲山とも言はれるであらう。これが即ち奇特の事であらうか又は何の奇特もないと云ふことであらうか。且つ吾々互ひは如何なる處に獨坐して居るのであらうか。並坐して居るのであらうか。又大雄峰は慧海禪師のみ獨坐し得るのであらうか。乃至極樂は彌陀のみ獨坐する處であらうか。中々參詳の範圍が廣いぞ。着語に凍々たる威風、四州その實は四百州や五大洲ぐらゐのことは無い。盡十方方法界に君臨する御威光ぞ。しかし此の境界を立て問ふ者も坐して答ふる者も已に問答に涉りては坐者立者二俱に敗缺じやと言ふ。僧禮拜す。斯る所て直に禮拜するにも色々の意味がある。譬へば俗に有り難いと云ふ言葉のやうなもので、本統に恩に感じて有り難

いと言ふこともあれば、其れとは殆んど反對に面白くもない詰らないと思ふやうな場合に於ても本統に有り難いななど、言ふこともあるやうなもので、今此の僧が百丈の答話の下に直に禮拜したのは如何なる底意であらうか、獨坐大雄峰と云ふ言葉の下にアトラ有り難や百丈如來と冷かし半分に拜禮したのであらうか、又は眞實に會し得る所ありて禮拜したので有らうか、又は二の句が繼げないで逃げ出したのであらうか、圓悟は、恰憫の、衲僧うまく斬り込だぞとほめた也、た、恁麼の人ありて、恁麼の人を見んと、要すコレは問者答者いづれも關取と關取の相撲のやうて此の僧ほどの者があればこそ百丈の百丈らしい機鋒をも見ることが出来るぞと言ふたのである、果して丈便ち打つコレで團扇が百丈の方へあがつた、サスがに百丈は此の僧の禮拜を何の點からでも甘んじて受けては置かぬ、着語に作家の宗師何故に來言豊かならずコレは百丈が閃電光の機てビシヤリと打たはサスがに作家の宗師では有るが、コレは何故に來言豊かならずモ、少し穩かな答へやうもあらうに、ナゼ斯やうな手荒いことをしたもので有らうぞ能く參究して見よと學人への注意、令は、虚りに行ぜず、是の如き嚴重なる律令は無意味に行はれるもので

は無い其意旨は如何と重ねく門下への注意と見える。

**頌** 祖域交馳 天馬駒 五百年一圓生 千人萬人 化門舒卷 不同途 已在前

自由○遊他 作家手段 電光石火 存機變 遊見百丈為人處也無 堪笑人來 拏虎鬚 好典

棒○重食之下必有勇夫 ○不  
免三喪身失命 ○放過罔繫一着

此頌は徹頭徹尾百丈を稱讚しぬいた祖域交馳す天馬の駒祖域といふは言ふまでもなく達磨門下に古今随分多くの作家もあるが百丈ほどの人は稀れてある、天馬といふは前漢の武帝の時に始めて大宛國から其種馬が來て其子が出來たのを駒と曰ふ駒といふは二歳の馬のことそう、今百丈禪師は馬祖山の道一禪師に鍛へられたのであるから馬祖の嫡子といふ所から天馬の駒としやれたのである、天馬は一日に千里走るといふが今百丈が祖域その實は十方世界を縦横に駆け廻る勢ひは凄(こ)いものであると言ふのぞ、着語に五百年に一たび圓生と相鏡打つた、聖人といはれるほどの人は五百年に一人しか出ないものぞと孟子が言ふたことがあるが、今この百丈も實に其の聖人の資格ある人ぞといふのである、次に千人萬人中に

一箇半箇ありといふ着語は前の着語の注解のやうで無くがなと思ふ恐らく後人の書き入れてもあらう子は父の業を承くコレは馬祖の子だけの眞價があるといふのである第二句に化門の符卷途を同じうせぜ前句を承けて實に百丈の教化の仕かたは符とノべて放つても卷とマイて收めても其の自由自在なることは他の宗師たると全く同じ途轍は踐んで居らない悉く別途を取り異轍を走るかと思はれるといふのである着語に已に言前に在りコレは雪竇に向つて其れは前が其の様なことを言はない前に疾に知れてることよと大賛成の意味更に渠假自由を得この語は次の他の作家の手段に還すといふ語へ續けて彼の百丈の接化に自由を得て居ることは到底他人の及ぶ所ては無いに依て人に獨占させるより外は無いと云ふのである斯ういふ所て還へすといふのは任せるといふほどの意味と見える其の自由自在なる様子を第三句に電光石火機變を存すコレは彼の百丈の言下にスカサス禮拜した問者の機会も然ることながら更に百丈が間に髪を容れずビシヤリと打つた其の機變の見事さ、開悟が劈而來也と當今ならば拍手喝采といふアンバイ左轉右轉まことに自在無礙に珠の盤中に走るが如くであるぞし

かし還て百丈爲人の處を見るや也た無やこの間に髪を容れずビシヤリと打つた其の百丈の慈悲深重なる點は何處に在るぞと學人に參究させる笑ふに堪たり人來りて虎鬚を持つるをコ、の笑ふに堪えたりは輕侮して笑ふのでは無い日本の俗語に面白いては無いかといふたやうなアンバイ此の機鋒峻峻なる百丈の處へ遠慮もなく出懸けて來て如何なるか是れ奇特の事と問端を起しサテ又獨坐大雄峰といふ一言下に禮拜してのけた有様譬へば虎の鬚を持つるやうなものて其の危険を侵す所が如何にも面白いと雪竇が謔ひ嘲したのであるそこで開悟が好し三十棒を與ふるいや我ならば笑ふに堪たりなどと言ふては居らぬ三十棒の御褒美を與へてやらうにと云ふ重賞の下には勇夫あり斯う三十棒を與へて遣はせば自然に勇ましき學人が出て來るやうになるぞ免がれず喪身失命コレは虎鬚を持つるといふ句に向て恐らくは一口に咬み殺されるであらうぞと百丈惡辣の手段を稱し闇黎に一着を放過す此の着語も古人が色々に見て居るが今は前の着語に繼いで此僧が一棒を喫したまで、濟んだのは貴僧に對して一着を放過せられたのであるぞと見ても好いか

第二十七則 雲門體露金風

**垂示問**一答十舉一明三見兔放鷹因風吹火不惜眉毛且置  
只如入虎穴時如何試舉看

此の垂示は人の師たる者が能く其の學人の機を鑿みて接化自在にする有様を述べたのである。一を問へば十を答へ一を擧げて三を明すと云ふは學人が來て一問を發すれば直に十疑も百疑も立ち處に氷解するやうに答へ、一事を擧げて答ふれば其れて三點も五點も辨別せらるゝやうにする。兔を見て鷹を放つといふは獵をする者が鹿を見れば其れ相當の犬を飛ばせてやり、兔と見れば鷹を放つてやるといふやうに學人の機根相應に接得する又風に困て火を吹くといふは火を起すときに風に逆らつて吹いたのは骨ばかり折れて其功がないが、風の方角を見て其の力を利用すれば力を費やさずして樂に火が起るといふ譬喩、眉毛を惜まざるは且らく置く。コレは第八則の翠巖の眉毛のところて辯じた通り、あまりに法を説き

過ぐれば其の對て眉鬚墮落するといふ、今も其のやうな師家のことは且らくお預りとして置て、只虎穴に入る時の如きは如何。コレは例の虎穴に入らざれば虎兇を得ずといふ言葉から來たので都べて危險を侵すことである、そこで今は學人の尤も俊發伶俐なる者に對して之を自由に接化し得る有様をいふたのである、其れは即ち此の本則の如きものであるぞといふので、試に擧す看よ。

**本則** 擧僧問雲門樹凋葉落時如何 是什麼時節○家破人亡○家破 雲門云體露

**金風** 採天柱地○新釘鐵籠○淨

此の間には餘程非凡なる力があるナゼかといふに佛法の祖意の向上の向下のといふやうな程度の話では無い、見性悟道の時如何でもなければ往生成佛の時如何でも無い衆生濟度の時如何でもなければ還相回向の時如何でも無い、只々樹凋み葉落る時如何といふ秋晩の山野の景色ぞ、汾陽禪師が禪話の十八問といふことを立てた中では斯ういふのを辨主問とも借事問とも名づけるといふ、秋色を借りて本地の風光を弄するのである、着語に是れ什麼の時節ぞといふ、審細に參究せよと

警誠せられたのである。家破れて、人亡び、人亡びて、家破る、理盡き辭窮まりて亦た思慮も分別も及ばざる所ぞ、と云へば俗に謂ふ空々寂々て枯木死灰の如きかといふに、雲門云く體露金風、秋景を提起して宇宙の全体を眼前に看せしめた、斯やうな公案は實に空中の天樂を聞くやうなもので、あれの此れのと評論すべきものでは無い、只幾たびも聲ほがらかに樹凋み葉落る時體露金風と誦し去り吟し來れば滋味津々たるを覺ゆるの時節があらう、闍悟が天を撐へ地を拄ふ、天地萬物只是れ體露金風の一枚ぞといふ、四五年前の十二月の中旬に下野の那須野原を朝早く車て通つたことがあつたが、大層に霜が多く降つた朝で蓋天蓋地只霜のみであつたに依て、あめもつちも霜のみとこそなりにけれ、那須野の原の冬のあけぼのと詠じたことがある、其の景色は實際に見た者でなくては其味ひの分るものでは無い、今も先づ其のやうなものである、淨、裸、赤、灑、灑、コレは丸はだかといふこととて法性法身の如來様を丸はだかにして體露金風と抛げ出した、青霄に平歩す、秋晴の好天氣萬里一點の雲も無い眺めぞ。

頌問既有宗深辨來風○答亦攸全待扣○功不誤施二三句可辨是上中下○如今

是向三句外一鐵遼空中○過也○疑若大野兮涼颯颯卓○天○地○放○行○去○也

長天兮疎雨濛濛風○清○水○淺○淺○頭君不見少林久坐未歸客更有○不○帶

河頭上濁流靜依熊耳一叢叢眼○若○合○眼○也○若○鬼○窟○裏○作○活○計○○眼

問既に宗あり此の僧の樹凋み葉落る時如何と問ひ掛けた所に已に十分の宗旨を具へて居る、固より尋常容易の問題では無いぞと言ふ、故に着語にも深く來風を辨す、雪竇よくも此の來問の高風を辨せられたぞと贊成を表し、更に箭は虚りに發せず、サスガに徒射は無いとほめた、さて又之に對する雲門の答も亦た同き攸その間にヒタリと出合ふた答へぶり、闍悟は豈兩般あらんやと言ひ又鐘の扣を待つが如しと言ひ更に功みだりに施さすと言ふ、只々大贊成の外はない、三句辨ずべし、此の三句といふことは雲門大師の三句と申して名高いことである、其れは凡そ禪僧の言句には函蓋乾坤句と隨波逐浪句と截斷衆流句との三句あるといふのである、然るに今此樹凋み葉落る時如何といふに對して問に髮を容れず體露金風と答へたのは函蓋乾坤の句であらうか又は隨波逐浪の句であらうか或は截斷衆流の句で

あらうか、且つは一句に三句を具足して居るのであらうか、其れを能く辨別して見ねばならぬぞ、圓悟は之を辨じて、上、中、下と言ふ上、中、下と言へる一言これは一鉢如何なる句であらうか、如何に辨すべきであらうか、如今、是れ、第幾句ぞと撰して置て、須らく是れ、三句の外に、向て、薦取して、始て、得べし、三句の上、中、下のといふ差排の下て之を會得することは出来ぬぞと言ふた、果して雪竇は一、鐵空に遶るかの體露金風と、無造作に答へられた有様は一筋の箭が虚空はるかに飛び去つたやうである、三句の一句のといふ分齊のものでは無い、圓悟は、中、れ、り、と喝采した又過也、ハヤ行先が分らなくなつたぞ又、壑着、磔着と言ふ壑といふ字は塞なりと註して穴へ土などを打つてヒタリと其穴を塞いだやうな意味である、そらな、又磔の字は石と石とが打當つてカチリと音のするやうなアン、バイ、つまり、コ、ては問話と答話とがヒタリと出合ふた様子の形容である、其次の箭、新羅を過ぐなどは前の過也、澤山モ、無くもがなと思ふ、先づこれ、本則の頌は、濟んでアトは例の雪竇の餘才を弄する所である、大野涼颯、颯々、長天、今、疎雨濛々、と茫々たる宇宙間の好風景を眺望して、體露金風の眞趣味を玩索する、着語に、普天、匝地と言ふ颯々たる涼颯の限りなき景

況ぞ、還て、骨毛卓、堅すること、を覺ふるや、コレは座下の學人に注意して皮下に血のあるほどの者ならば此の涼颯颯々と謠ふ聲を聞てゾツとしない者はないはずであるが、諸人は何うじやと言はれた様子、しかし雪竇の語が放行し、去れり、除ゆ、九出しに見せ過ぎるやうであるぞと言ふ、疎雨濛々の下に、風、浩々、水、漫々、體露金風に疎々濛々どこもかしこも風だらけ水だらけ、それ、頭上も、漫々、脚下も、漫々、さて其れに就て思ひ出したことがある、君見すや、少林、久坐未歸の客、靜かに依る熊耳の、一叢々、少林といふは嵩山の東に太室といふがあつて、西に少室がある、其の少室に達磨大師の居られた所が少林寺で、其の北麓の講堂の後に立雪亭といふ彼の二祖が雪に立つた古跡があり、又少林寺の中に達磨洞といふがあつて、即ち面壁九年の古跡に高さ三尺ほどの大師の石像があると云ふことである、コレは鐵壁雲片の説である、久坐未歸の客といふことに注意せねばならぬ、達磨大師は已に天竺へ歸つてしまはれたとすれば、達磨を葬つた熊耳峰には何もないわけである、然るに今雪竇は達磨が昔も今も少林に久坐未歸であるに依て、靜に熊耳峰の叢林中に身を寄せて居られると言ふのである、熊耳といふは陝州縣の西南に於て兩峰相並び熊の耳の

やうであるに依て名けられたといふことであるが、今コゝて雪竇が謂ふ所の少林と云ひ熊耳といふは地理的の山ではない、達磨といふも歴史的の人的ではない、謂ゆる大野長天に颯々濼々たる所のものを地理や歴史の語を借りて謠ふたまでのことである着語に更に不啻啻の漢あり、コレは第一則の達磨に下した語を持ち來つたから更にと云ふた、人を帶累殺す久坐といふことを誤解して枯木死灰裡に坐死する者のあるを誡めた、黄河は頭上より濁り流る、其の達磨の久坐未歸が禪宗専門の宗風で千古萬古坐禪三昧ぞ、恰かも黄河は源頭から濁り流れて東海の水が皆黄色に濁つて居るやうなものぞ、開眼も也、た、着合眼も也、た、着彼の熊耳の一叢々人は人が見ても見ないでも依然として一叢々元來眼見耳聞に用は無い鬼窟裡に活計を作す、コレは少林とか久坐とか云ふ言葉に引かれて瞑想に耽ける者の出來ないやうにとの豫防と見える又、眼瞎し、耳聾すと言ひ更に誰れか這の境界に到らん、眼見耳聞を離れて誰れを能く此の久坐未歸の境界に到り得る人があらうかと學人への勸誡である、免かれず、爾が板齒を打折せらるゝことを、コレは達磨大師が曾つて教家の人の嫉妬を受けて前齒を打ち折られたといふ故事のあるのを引て、へたな坐

禪に耽つて居ると此の圓悟が前齒を打ち折つてやるぞとコレも吾々互ひが枯木死灰の禪に落ち入らぬやうにとの慈悲の發誠である。

第二十八則 涅槃和尚諸聖

**本則** 舉南泉參百丈涅槃和尚。丈問。從上諸聖還有不爲人說

底法麼。和尙合知○壁立萬古○還覺○落塵○ 泉云。有什麼。○丁也○孟○入○耶○作○ 丈云。作麼生是不爲

人說底法。看○他○作○麼○生○ 泉云。不是心不是佛不是物。○果然○納○取○

丈云。說了也。不○平○生○ 泉云。某甲只恁麼。和尚作麼生。有○

丈云。我又不是大善知識。爭知有說不說。看○他○手○忙○

某甲不會。打○可○恁○麼○ 丈云。我太煞

爲爾說了也。取○蛇○尾○作○升○塵○

百丈の涅槃和尚といふは先の百丈慧海禪師の法嗣で名を法正と曰はれてあつた

が常に涅槃經を讀誦せられたので世人が涅槃和尚と稱したと云ふ、此人が師匠の後を承けて百丈山の山主になられたから百丈の涅槃和尚である、然るに今この南泉との問答のあつたのは其の涅槃法正和尚ではなくて、馬祖の法嗣であつて先百丈のためには兄弟であり且つ同く百丈山に住した帷政禪師といふ人である、又南泉の普願禪師といふは此れも馬祖の法嗣であるから百丈帷政とは兄弟の間からである、或時南泉が百丈帷政を勘檢しやうと思ふて問答に出かけて往つた、然るに百丈は早くも其機を見て取り先方未だ口を開かぬうちに從上の諸聖還て人の爲めに説かざる底の法ありやと持ちかけた、從上の諸聖とは古へからの佛たちや祖師たちが衆生濟度のために如何なる法をも皆説き盡したものであらうか、又は未だ説かぬ所の法が別にあるであらうかといふ問題である、これは今さら言ふまでも無く眞實の所は殊更に法と名くべきものも無ければ説くべきものも無い、イヤ説かうとて説かるべきものでも無いことは知れ切たことである、然るにソコが勘檢であるから斯んな問題をワザと物々しく提出したのである、乃ち圓悟は和尚まさに知るべし、其のやうな法が有るやら無いやら他人に問ふには及ぶまいと言

ふ、しかし其の不説底の法は壁立萬仞、容易に寄り附くことは出来まい、這て齒の落つることを覺ふるや、然るに今は百丈は斯やうに口に掛けて言ひ出しては、饒舌に過ぎて齒が落ちはせぬかと言ふ、泉云く有り、南泉は百丈の此の問題を聞いて人を馬鹿にしたことを言ふと思ひながらソ知らぬ顔して有りと言へた、若しも佛祖に説くべき底の法だの説かざる底の法だのといふものが有りとしたならば如何なるものであらうか無いとしたならばナゼ無いであらうか、千年以前の南泉百丈二老にのみ任せて置くべきでは無い、人々各自に審細に參究して見ねばなるまい、着語に落艸し了れり有るの無いのと何のことぞと抑へた、又た孟八郎にして、什麼かせん、コレは晋の時代に孟八郎といふ亂暴な人があつて道理に由らずして事を作したといふことから、都べて狼藉者のことを孟八郎といふやうになつたので、日本の俗諺にマンバチといふのも此語を禪僧などの言ふのを世間に聞き傳へたのであらうと云ふことじや、乃ち有るの無いのとマンバチなことを言ふて、何うするのじやと南泉を抑へたのである、又便ち、恁麼の事あり、コレは反對に南泉の肩を持たのてイヤ無いとばかりも言はれない、有りと言ふべきわけが無いと、要



は學人をして一方に取り附かせぬやうにとの圓悟の慈悲ぞ、丈云く作麼生が是れ人の爲めに説かざる底の法ハ、一有ると言ふかナ然らば其れは如何なる法であるぞと百丈も白らばくれる、臨濟や徳山のやうな人であつたならば疾うに三十棒を振り廻はすか大喝一聲迅雷耳を掩ふに暇なからしむるのであるが、兩老ともに優々寛々としたものである南泉が此の作麼生に對して更に何と言ふてあらうかと窺ふ様子で圓悟が看よ、他作麼生と言ふた、又看よ、他の手忙く脚の亂るゝを、と大かた南泉が大狼狽するであらうぞ、錯を將て錯に、就く双方とも間違ひと間違ひの道づれじやと罵しる、但、試に問て、看よ、まかし南泉が平氣で有りといふのであるから如何なる法があるやら先づ其答を聞て看るが好いと言ふて次の答話を引き出す、泉云く不是心不是佛不是物コレは此の時代に頻りに盛んに商量せられた法問て、其本は此の南泉や百丈の師匠である馬祖大師が常々に即心即佛といふことは言はれるに就て或時或僧が馬祖に向つて和尚は何故に即心即佛と説くやと問ふた、馬祖が之れに答へて小兒の啼を止めんが爲めなり、ぼんの子供だまかしよと言ふた、然るに其の僧が更に止て後如何その子供が啼き止たアトは何うしますと云

ふ、馬祖は非心非佛よと答へた、其の僧さらに進んで其の即心即佛と非心非佛との二種を除いた人が來たら何うて御座るぞと云ふ、馬祖は伊に向て不是物と道はんと言はれたのが當時の大問題となつたので、之を通俗に辯じて見れば自心の外に佛を求める愚人があるに依て釋尊が觀無量壽經に是心是佛と説かれたのを更に馬祖は即心即佛と言はれたのである、然るに其れでは心が其儘に佛であつて心の外には佛は無いと執着する者が出来る、即ち病を直すための藥から亦た一種の煩ひが起る、ソコで今度は非心非佛すなはち心にも非ず佛にも非ずと藥も病も俱に排除すれば其れでは宇宙間の萬物ことごとく皆その儘になど心と佛とを離れて物に執着する者が出來て、ますく其病氣が高尙になつてくる、ソコで已むを得ず今度は不是物これ物にも非ずと言はねばならぬことになつたのである、然るに今南泉老人は其の三段の不是を一つにして不是心不是佛不是物これが即ち從上の諸聖が人の爲めに説かざる底の法でありますと答へた、コレは一躰どうした注解であらうぞ、果して佛々祖々の本懷は是の如きものであらうか有るまいか、圓悟は果然として敗闕を納ると言ひ又果然として漏逗少からずと言ふた、南泉が斯の

やうな婆々談義をしては大敗北ぞ漏逗といふは前にも有たが漏といふは器の破れた姿であり逗といふは物の流通に差支の起つた貌であるから、皆南泉のかやうなことを説き立てたのを抑へたのである。しかし此れは最初から南泉と百丈とが互ひに相勘驗しやうといふ機会から双方で白ばくれて敵陣の様子を窺ふて居る氣味である。乃ち百丈は之に對して説了也と冷かした。ヤ、大層な説法でありました。其れが不説底の法で御座るかアハ、と言ふたやうなアンパイ着語に、他のため、に説破すること、莫れイヤ其う言はれる百丈。お前さんも亦た説き過ぎはせぬかと抑へ、さもあらばあれ、一平生を錯まることを南泉のやうな饒舌なる奴が一生を錯まつからと云ふても構ふことは無いに説了也など、餘計な世話を焼くには及ばぬ他、のために、恁麼に道ふべからずと重々に抑へる。然るにサスの南泉ほんとに敗闕して退却すべき者では無い。泉云く某甲は只恁麼和尚作麼生と今までの防守的態度が俄かに攻撃的になつた。サ、此れからが本統の土俵の上の勝負である。兩關取の伎倆をあらはすべき時節となつた。圓悟は先づさいはひに轉身の處ありと南泉に聲を掛けた。更に長に與すれば即ち長にして短に與すれば即ち短サス

がに南泉は相手次第で自由自在なものよとほめ、又理長すれば即ち就くとある。コレは圓悟が斯う兩雄の眞劔勝負といふ場合になつては孰れなりとも理の長じた方に團扇をあげるより外に致しかたが無いと云ふ。行司氣取の言葉と見える。云く我又是れ大善知識に不す争てか説不説あるを知らんやと南泉の組み附いてくる手をスラリと外した。イヤわれ百丈は謂ゆる從上の諸聖などと言はれる有り難そうな大善知識の仲間では無いに依てお氣の毒であるが説の不説のといふやうなことは一向に存知申さぬと云ふ。此の一言のうちには濟度すべき佛祖もなければ濟度されべき衆生も無い着語に、看よ他の手忙く脚の亂れたるを彼の百丈のうろたへた有様を見ろと抑へるやうに言ふて學人に參詳を促がす身を藏して影を露はす説不説あることを知らぬと言ふ言下にハヤ不説底の玄旨が見えるぞと言ひ、又死を去ること十分サスの百丈も此の立合に至つては九死一生の大事ぞと云ふのである。十分といふは一寸でコレは舟乗のいふことである。そう日本では板子一枚といふことを言ふ。板一枚すなはち一寸の間に死生が決せられるといふことである。又爛泥裡に刺あり、然かし此の百丈の答話は爛泥すなはち柔らかなや

うであるけれども其の柔かにドロ／＼した泥の中にチシリと足の底をさす荆棘があるに依て人々脚下を用心せねばならぬぞと云ふたアンバイ、恁麼に、那ぞ我を賺すや、賺はスカスと云ふ字でコレは圓悟が百丈の語に油斷がならぬぞとの注意である。泉云く、某甲、不會、南泉も百丈の腕力を確かに見とめてイヤ拙僧には一向合點がゆきませんと言ふ、此の南泉の不會と彼の百丈の争てか説不説あるを知らんやと孰れが重いか軽いか強いか弱い、從上諸聖の本懐たる名劍を三條の小鍛冶と稻荷明神とが相縫うちて鍛へあげるやうに思はれる、着語に乍ちに恁麼なるべし是非ともに其うあるべきはずと言ふ、さいはひに不會に、値ふ不會でなくて何としやうぞ、若しも此れが會せば、備が頭を打破せん、少しも理窟に涉つたならば命は無いぞ、さいはひに、這の漢の只恁麼なるに、値ふコレは此時に南泉がとなく、不會と言ふて、濟んだから好いが、若しも此れが何ぞ會する所があつたとしたならば、餘程厄介なことになるであつたらうにと、重ね／＼此の不會に大賛成を表する、丈云く、我はなはだ備が爲めに説き了れり、先きには南泉のことを説了也と言ふた百丈が、今度は自から我はなはだ説了也と言ふ、畢竟誰にもせよ彼にもせよ不説と言

ふても不會と言ふても苟くも言詮に涉るは第二第三よ、故に百丈も南泉の様子を見て取り先づは大安心と云ふぐあひで、行司の指揮も待たずに此れて相引きとなつた、圓悟は百丈が其のやうなことを言ふのも餘計なことぞと云ふので、雪土に霜をかかふと評し、又龍頭蛇尾にして、什麼をか作さん、最初に百丈の方から喧嘩を買たのでは無い、か然るに我太煞爲備説了也など、言ふて引込むとは何事ぞと評したのであるが、結局兩老商量に依て不説底の法を方弗することが出来た。

**頌** 祖佛從來不爲人

得各自守、強界、有條、學、條、如、箭、納、僧、今、古、競、頭、走、踏、踏、草、掛、杖、高、掛、鉢、裏、大、唐、國、直、未、打、就、

明鏡當臺列像殊

隨、也、破、也、打、破、一、一、面、南、看、北、斗、還、見、老、僧、踏、佛、

斗柄垂

落、處、也、不、知、無、處、討、落、地、標、子、成、七、八、片、拈、得、鼻、孔、失、却、

無處討

可、惜、許、梳、子、

祖佛從來人の爲めにせず三世の諸佛も歴代の祖師も本々から衆生濟度などいふことは無いのぞ、ナゼかといふに迷ひの凡夫とか活りの佛祖とか分け隔てのあつたは全く夢中に夢を見て居たまでのごとで、其の實は圓覺經にも始めて知る衆生

本來成佛生死涅槃猶ほ昨夢の如しと悟れた曉には、元來濟度すべき菩提の聖者も濟度さるべき生死の衆生もないからである。圓悟は各自に、疆界を守ると言ふコレは汝は汝たり我は我たりと言ふたも同様で、一切諸法皆悉く獨立獨尊の姿であることを述べたのである。條あれば條を攀つ、コレは法官が罪を斷ずる時に法律に正條あるかぎりはず其の條に據るといふことなので、今は凡そ佛祖たる者は人の爲めにせずといふのが其の正條であるといふのを、箇の元字脚を記得して心に在かば、地獄に入ること、箭の如くならん元字脚といふことに就ては色々説があるけれども、通途の説は元の字の脚は乙の字で乙は一と同じであるから、元字脚を記得して心に在くといふは、一字でも文字などを記臆して彼れの此れのと理窟を考へて居るやうなことであつたならば、地獄に入ること、箭の如くてあらうぞと言ふのである。第二句に、禪僧今古頭を競ふて走る。佛祖の大道は從來不爲人て元字脚をも許さぬに拘はらず、昔も今も立派な和尚たち謂ゆる禪僧とも稱せられる連中がいづれも皆佛を求め法を求めて、東西南北に奔走するが氣の毒ぞと言ふ故に、圓悟が、舄鞋を踏破し、拄杖を拗折して高く鉢囊を掛けよウロ／＼せずには落ちついて居

よと言ふ、第三句に、明鏡臺に當りて、列像殊なり。然るに今や南泉と百丈の兩老が眞實佛祖不爲人不説底の明晃々たる鏡に對した姿を見れば、南泉には南泉の眉目があり、百丈には百丈の鼻孔があつて、而して一枚の大光明中に列像殊別である。凡そ鏡は影を留めずして分明であり、其の象は寸毫も違はずして其痕迹は少しも遺らぬを以て喩にされるのである。今の問題の説と云ひ不説と云ひ爲人と云ひ不爲人と云ふことも推考して其の大要を方弗すべきである。斯う言へば直に鏡に取りつく者が出来るに依て、圓悟は墮也、破也、その鏡を敲き落し打ち毀てと言ひ、又鏡を打破し來れ、爾よ相見せん、この着語は全く前の註釋らしい。後人の書き入れてあらう、一々南に面つて北斗を看せしむコレが不爲人の爲人て不説底の説法ぞ、北に向つて北斗を見るのなら誰にも見えるかは知らんが、南に向つて北斗を見ることは肉眼はサテ置き法眼でも慧眼でも結局理窟でも推考でも見ることは出來ぬ、然らば其れは何うして見るぞ、其相談は次の句に譲つて、コ、へ圓悟が違つて、老僧が佛殿に騎て山門を出づるを見るや、其れが見えれば彼の北斗も見えやうぞと云ふ、昔し間違ひド、一といふ浮れ歌が流行して普通の理窟では判斷の附かない文句ばかり

並べた歌を馬夫も雲助もうたつたことがある、其中に天上とぶのは馬では無いか、馬は馬だが藥箱もたぬと云ふたり、又は箱根八里を帆かけて走る、其れて坊さまと言はれやうかなどと云ふのである、一轉わが國の俗間には不思議な謠ひものが往々にある、お月様いくつ十三七つ、まだ年わかいナ、あの子を生んで此の子を生んで、誰に抱かしよ、おまんに抱かしよ、おまん何處へいつた、油かひに茶かひに、油屋の前て氷が張つて、すべつてころんで、油一升こぼした、其油どうした、太郎どんの犬と次郎どんの犬と、皆なめてしまつた、其犬どうした、太鼓にはつて、あつちの方でもどんどこどん、こつちの方でもどんどこどんといふ子守うたの如きものが幾らもある、到底理窟を以て解し得べきものでない、我が國は自然法爾に大乘極則にかなふた國であるとも言ふが、味ひて見れば面白いことである、又曾て新羅國裡に上堂すれば、大唐國裏に、未だ鼓を打たずと言ふ、要は前の佛殿に騎りて山門を出つと言ふは、大小の分量を打破つたので此の新羅大唐は遠近の分別を斷滅したのである、且つ曾つてと言ひ未だと言ふた言葉のうち古今といふ料簡をも棄てねばならぬ、古今の遠近の大小のと云ふ支配を受けて居るやうなことは到底南に向つて北斗

を見ることは出来ぬ、南に向つて北斗が見えないやうでは、とても佛祖不爲人の消息が會得せられるものには無い、其れを雪竇が氣の毒がりて更に斗柄垂る討ぬるに處なしと言ふ、其れソコに北斗がブラ下つて居るには無いか、花となつて咲き月となつて照り風と吹き雨と降る、どうして其れが見えぬぞ、但し見んと要すれば蹤跡が無いに依つて、討ぬるに處なしである、鏡の面に歷々分明花も紅葉も現成して居るけれども、其れを捉らへやうとすれば、ハヤ蹤跡は無い、着語に落處も也、た知らず、雪竇が斗柄垂るなどと言ふけれども、其のやうなことが有るものか、什麼の處にかある、其の様なものは何處にあるぞと言ひ、討ぬるに處なしの下には、瞎、これが見えぬといふは、盲目ぞと罵しり、雪竇が説き過ぎるのを答めて更に、可惜許と言ひ更に、腕子地に落ちて、樨子七八片、となると言ふ、樨子といふは、腕の下へ敷く木皿のことである、上の腕が落ちたからと云ふて落ちもせぬ、樨が七八片になるわけは無いのである、今は差別を泯絶した場所であるに依て、討ぬるに處なしと言ふのが、ハヤ確かに討ね得たので、本則に謂ゆる不説が即ち爲人の極則であるからである、いよく、結句に鼻孔を拈得して、口を失却す、俗語に、あちち立てればこちらが立たぬ

九尺二間に戸が二枚で不會の會とか不説の説とかいふことは一言にして双方に疵のつかぬやうにすることが出来ぬ。そこで我又大善知識にあらず争てか説不説あることを知らんやと一方が言へば、それに對して某甲不會と一方が挨拶する。この問答商量の間に佛祖不爲人の妙味を參得せねばならぬのである。仍て着語に那裡より這の消息を得來る雪竇は鼻孔を拈得したと言はれるが其れは何處から持て來たのであるぞと排ひ、果然として、恁麼いづれ結局は其の様なことであらうと思ふて居たと便ち打つ。從上許多の言句を一撃に勦絶し了つたのである。

第二十九則 大隋劫火洞然

**垂示** 魚行水濁、鳥飛毛落、明辨主賓、洞分縑素、直似當臺明鏡、掌内明珠、漢現胡來、聲彰色顯、且道爲什麼如此、試舉看。

しのぶれど色にいてにける我が戀はものやあもふと人のとふまでといふたやうなわけ、少しても心に貯はへることがあれば直に其れが色にも聲にもあらはれ

る。況んや其れが文字言句にあらはれ伎倆手段に見えるやうになつてはモハヤ臭氣紛々として鼻持ちのならぬものである。其の様子を魚行けば水濁り鳥飛べば毛落つと言はれた、其の跡形が見えるから仕方がない、ソコで明眼の人に勘驗させることになつては明かに主賓を辨じ、洞かに縑素を分つ、主賓といふは眞偽といふも同じこと、縑素といふは邪正といふも同様じや、其の辨別の明かに見えすくことは直に當臺の明鏡、掌内の明珠に似て漢現じ胡來り聲に彰はれ色に顯はる。此の語のうち漢現胡來といふは漢來れば漢現し胡來れば胡現すといふ成語を文を略し字を互顯させたので、臺に當れる明鏡は漢人が來れば漢人そのまゝに見え胡人が來れば胡人そのまゝに見える公明無私の姿を言ひ、次の聲彰色顯といふ語は掌内明珠の方にかゝる、要する所は心機の在る所いかに隠しても隠せぬといふこと、本則の問答を豫め批評するのである。且らく道へ什麼としてか此の如くなる、其の例證として好い公案があるを試みに舉す看よ。

**本則** 舉僧問、大隋劫火洞然、大千俱壞、未審這箇壞不壞、道箇是僧云、恁麼則隨他去也。道一旬天下兩僧摸、來不若○預接持、隋云、壞無孔鐵、僧云、恁麼則隨他去也。口已前、僧云、恁麼則隨他去也。口已前、

沒量大人語、隨他去前篇論後深○只道箇多道人換來不若○水長船高泥多

益州大隋の法真禪師は福州長慶大安和尚の法嗣て百丈大智禪師の法孫である。劫火洞然として大千俱に壞すといふ語は、仁王護國般若波多蜜多經の護國品第五に説かれてある。偈文である。具さに擧ぐれば劫火洞然として大千俱に壞す、須彌巨海磨滅して餘なく、梵釋天龍もろくの有情、尙ほ皆彌よ滅す、何に況んや此身をやと云ふのである。サテ劫火といふことは委しく言へば限りもないが此れは印度の古傳て一種の創世記とも云ふべきものの説である。劫といふは劫波の略て劫波は梵語これを漢譯すれば長時すなはち長い時間といふことである。其の説の略に據れば此の世界の最初成立する間を成劫と曰ひ己に成立した上には暫らく保存される時期を住劫と曰ふ。然るに其れが常住といふわけには往かぬ追々と破壊される時節がある。其れを壞劫と曰ふ。恰かも近頃の學説に進化と鎔化とを説くやうなアンバいて、其の鎔化時代になつて追々と壞れる順序に火災と風災と水災とがあつて、其の火災が天地萬物を皆焼き盡してしまふ有様を洞然として大千俱に壞すといふのである。大千といふことも今は委しく言ふて居る暇はないが、今の言葉で言へば

一の太陽系統に屬する諸星と一世界として其れが一千世界あつたのを小千世界と曰ひ、其の小千世界を更に一千あつめたのが中千世界であつて、其の中千を更に一千あつめたのを即ち大千世界といふのである。實に數へきれないほどの多くの世界といふことである。其の數へきれないほどの多くの世界が壞劫の火災の爲めには悉く洞然として焼き盡されてしまひ、其次に風災が起つて其灰をも皆吹とばし盡し更に水災が起つて悉く漂蕩してしまふた後を空劫と曰ふ。即ち之を成住壞空の四劫と申して十方世界が起つたり滅したりする順序を四つに立て、又空劫が成劫となり住劫となり壞劫となり順環かぎりがないといふのである。ソつて今の問題は或る僧が經文の中に斯ういふことの説いてあるのを見て、サテ氣にかゝつたのは其の通りに世界中の都べてのものが皆焼き盡されてしまふとしたならば、吾々人間の種も盡きてしまふに相違ない。其時になつて未審這箇壞か不壞か、て這箇といふたは即ち近く狭く言へば吾々互ひの精神とか魂識とか甚きは近頃の人が靈魂とかいふ新しい名をつけて珍重がつて居るものゝことである。又遠く廣く言へば眞如とか法性とか菩提とか涅槃とか大我とか眞心とか色

々と有り難そうな名をつけて居るものゝことである。其れが劫火洞然の時にどうなるであらう、ヤハリ萬物と一時に焼けてしまふであらうか又は此れだけは焼けないで残るであらうか、かやうな疑問は教相などばかり淺はかにセ、くつて居るものには起りがちなことで、殊に當今の靈魂不滅といふやうなことを大切らしく思ふて居る人の爲めには中々尋常容易ならぬ大疑問であると思える。此の僧も其の黨派の人で氣の毒ながら眞實の佛法とはまだ十萬億土の隔たりある處に流浪して居たのであるから斯のやうな問を起したのである。圓悟の着語に「這箇是れ什麼物ぞ」とあるコレは先づ學人をして謂ゆる這箇とは畢竟いかなるものであるかを參究させやうとの注意である。然るに、這の、一句、天下の衲僧も摸索不着この問を起した僧に限つたことでは無い、誰でも皆確實に之を捉へ得ることは難からうぞと言ふ、預め搔いて痒を待つ、コレは此の僧が未だ大千の壞か不壞かも決しないうちに這箇の壞か不壞かを問ふのは、後に痒くなるであらうと思ふて先づ豫じめ搔いて置くやうなものぞと冷かした。隋云く壞この答話が即ち垂示に明かに主賓を辨じ洞かに細素を分つと謂はれる所て、此の問ひ來つた僧の心の中には確か

に例の靈魂不滅のやうな考へを持つて居る即ち大千は皆壞するとも這箇は不壞に相違ないといふ自分勝手な悟りを抱いて居る、其れを大隋が見て取て容赦なく壞と答へられた此の一言を聞かした時に此の僧の顔色がどんなであつたか寫眞にても取て置てあつたならば、當今の靈魂不滅を珍重がる人たちの好い標本になるであつたらうと思ふ、一鉢に這箇を參究する上に於て壞の不壞のといふやうな兩端に支配されて居るやうなことでは到底まだ眞實參禪の資格は無いのである。たとへば大海の波浪の起滅するのを見て大海が起滅するであらうか有るまいかと心配するやうな者は、全たく大海の研究をする資格が無いではあるまいか、畢竟大千の成住壞空といふほどのことは這箇の波動の一部分に過ぎぬのである。然るに大千が壞すると聞いて這箇がどうなるであらうかと心配するに至つては、最初から這箇その物と全たく知らぬのではあるまいか、ソコで大隋が本分の提撕であつたならば外に手の下じやうもあつたであらうけれども、今は他の病に應じて藥を施こし、直に壞と答へられた誠に御慈悲極まつた次第である。けれども其の壞が直に鐵槌子で容易に齒が立たぬソコを圓悟が無孔の鐵鎚當面に擲つと言ふたその言



葉は壞とあるけれども壞だの不壞だのといふことに支配されて居る考ては決して此の語を會得することは出来ぬ、鼻孔を沒却すコレは大隋の壞と答へたは面目を損するであらうぞと言ふのか、未だ口を開かざる以前に勘破了也、コレは圓悟が大隋に向て、前がまだ壞とも不壞とも言はぬうちにハヤ、我はチャンと勘破したつたと言ふ、然るに此の僧は壞と聞て壞に着き廻り僧云く、恁麼ならば他に隨ひ去るや、然らば大千の壞するときに這箇も劫火のお供をしてゆくのでありますかと、言ふ着語に、沒量の大人も、語脈裡に轉却せらる大器量の人てさへ他人の語句に着き廻るのが多いのであるから此の僧が斯のやうに狼狽するのも無理がないと言ふ、又果然として、錯て認む、到頭壞滅といふ邪見に落ちてしまふた、然るに大隋は更に其れを感然とも思はない様子で隋云く、他に隨ひ去る、無論大千と一時に劫火に洞然として焼けてしまふぞと引導をわたした、着語は前箭は猶ほ軽く、後箭は深し前に壞と答へたのも随分ひどかつたが、今度の他に隨ひ去ると注釋を加へたのは其矢先が骨まで射透したぞと言ふ、只這箇多少の人摸索不着、この這箇といふは此の隨他去といふ答をさしたるので、此の答には會得のゆきかねるものが多からう

ぞと言ふのじや、元來壞不壞にわたらぬものを何故に壞と言ひ本より自他を離れたものを他に隨ひ去るとは何事ぞ、ソコが即ち多少の人の摸索不着なる所か、水長ければ船高く泥多ければ佛大なり、畢竟これは他の問ひ來るに任せて謂ゆる應病與藥であるから、水次第で船が浮きあがるが如く泥が多ければ其泥で造る佛が大きく出来るやうなものぞと言ふのじや、此次の二つの着語は元來評唱の中にある文句がコ、へ紛れ込なのであるから着語として見べきでは無いといふことであるけれども、其意味は誠に好い註解になる即ち若し他に隨ひ去ると道はい、什麼の處には在る、若し他に隨ひ去らずと道はい、又作廢、生結局這箇は壞するものか壞せぬものか審細に參究せねばならぬぞと警醒しつゝ、便ち打つ一撃に壞不壞の兩頭を截斷したつた畢竟如何さらに雪竇の頌に參じて見やう、

**頌** 劫火光中立、問端是錯了也、**納僧猶滯、兩重關**、**萬里區區、獨往還**

頭此人如何教得、脚底百匝千匝了也

**可憐一句隨他語**、天下朝前作道設計、較二千句萬句也**萬里區區、獨往還**

自是隨他語、被草鞋

此の僧は劫火光中に問端を立て、這箇が壊るか壊せぬか疑がふ、圓悟は什麼と道ふぞと咎め又已に是れ錯り了れり、最初から大間違ぞと叱る。禿僧猶ほ滯ふる。兩重の關さりながら此の這箇が壊るか壊せぬかと云ふ兩重の關門には大概の禿僧も皆なほ滯ふるのであるから此の僧一人のみを咎めるわけにもゆかぬぞと言ふ。着語に此人を坐斷して如何が救ひ得んか、疑團に煩悶して居る人を膝の下に取りひしいて豁然大悟させるといふことは中々容易なことでは無いぞ、況んや此の僧の如きは只此の兩重ばかりでは無く、脚頭脚底百匝千重にし了れりと種々様々なる疑團に疑團がかさなつて、少しも身動きのつかないのであるから如何とも救ひやうは無いと云ふ憐れむ可し。他に隨ふの語萬里區々として獨り往還す、コレは此の僧其後に大隋の隨他去と答へられた語に愈々疑團を増し、舒州投子山の大同禪師の處へ往て此の問答の顛末を話し、大隋が壊と答へ又他に隨ひ去ると言はれた様子を委しく申した所が、大同禪師が非常に喜び香を焚て大隋のかたに向つて禮拜し、西蜀に古佛ありて出世せられたのである、然るに貴僧は何故に其の古佛をすて、コレへ來たのであるぞ、早く大隋の處へ歸つて一大事を決着しろと誠め

られたソコで此の僧も始めて大隋の有り難さを知て又セッセと大隋の處へ往たところが、何ぞ圖らん法真禪師は已に入滅せられて再び參決することが出來なんだと云ふことである、其の故事を第三四の句に言はれたのであるから、憐む可し一句他に隨ふの語萬里區々として獨り往還である、ソコで圓悟が第三句の下に天下の禿僧も這般の計較を作す、此の僧に限つたことでは無い、千句萬句も也た消得せず、只此の隨他去の一句が實に非常な價值である、此の一句は他の千句萬句を費やして解釋しやうとしたからと云ふても決して消化し得られるものではないと言ふ、サテは此の可憐の二字は此僧を憐愍するのでは無く、大隋の隨他去と言はれたのを愛するの義と見ねばならぬのである、更に圓悟は什麼の他の脚跟を截斷し難き處か有らんと云ふ、コレは我れ圓悟ならば他の大隋が隨他去と言ふた時にスバリと其の脚跟を截斷することは何の雜作もなかつたに、此の僧の力なきを歎き吾々學人に力をつける、第四句の下に業識茫茫と罪業の深き亡者が六道に輪廻するやうであるぞと罵しり、蹉過するも也た知らず、アチラコチラと往還して居るに這箇の立場を失ふてしまはうぞと云ふ、しかし其の往還は誰も他人から勧めた

のては無、い、自、から、是、れ、草、鞋、を、踏、破、す、自、分、勝、手、に、旅、費、を、徒、消、し、て、居、る、の、よ、と、重、々、に、抑、へ、た、

第三十則 趙州大蘿蔔

**本則** 舉僧問趙州承聞和尚親見南泉是否千問不如一見○州云鎮  
州出大蘿蔔頭新撰天柱地○新訂載○舊通

これも垂示が無くて直に本則である。趙州観音院從諗禪師のことは前の第九則にあり、南泉普願禪師のことは第二十八則にあつた通りのこと。趙州は南泉の嫡嗣であることは天下に誰も知らぬ者はないのである。別して今その趙州の處へ往て法を聞かうといふほどのものであつたならば、趙州が南泉に參じた時に如何なる因縁があつたかといふことも、又南泉が如何やうに趙州を接してあつたかといふことも飽くまで知りぬいて居るに違ひない。然るに今そらくしく承り聞く和尚親く南泉に見ゆと是なりや否やと問ふ殊に否やとまで念を推す、コレは只の挨拶

ては無、い、何、か、底、意、に、含、む、所、が、あ、る、と、云、ふ、こ、と、は、誰、に、も、分、る、若、し、是、れ、が、趙、州、ほ、ど、の、作、家、で、な、く、て、好、い、加、減、な、人、で、あ、つ、た、な、ら、ば、餘、程、面、倒、な、問、答、に、な、る、の、で、あ、ら、う、若、し、も、此、れ、が、問、者、の、語、に、隨、ふ、て、南、泉、に、見、え、た、と、か、又、は、見、え、ぬ、と、か、答、へ、た、な、ら、ば、何、う、で、あ、つ、た、ら、う、孰、れ、に、し、て、も、此、の、僧、中、々、容、易、に、退、却、は、し、な、い、て、あ、ら、う、着、語、に、千、問、は、一、見、に、如、か、ず、コレは此の僧が此の問を發した意中を評したので、かねて趙州は南泉に嗣法したとは聞えて居るが如何なる法を如何やうに嗣いだのであるか直接に勘驗して看やうとの發問である。又抄とある趙州を勘驗するには誠に適當な抄しぶりぞとほめ、更に眉毛八字に分ると此の僧の是なりや否やと抄着してゆく勢ひを形容した。州云く鎮州に大蘿蔔頭を出だす蘿蔔といふは日本の大根のことである。日本では尾張の宮茂だの薩摩の櫻島だの武藏の練馬だのといふ處が大根の名物であるが、支那では鎮州といふ所から大きな大根が出るといふことじや、しかし和尚親しく南泉に見ゆと聞く是なりや否やといふ問に對して、ハ、鎮州から大きな大根が出ますヨと答へた、他の事て云ふて見たならば、前さんは父さまの御子である、と聞きました本統て御座いますか、ハイ大阪の天王寺から大

な燕ヒナが出来ますよ、コレは一體に如何なる問答であらうぞ到底知慮分別を以て彼れの此れのと幾ら穿鑿して見たからといふても解了することも會得することも出来るものには無い、風外老人は其の大きな大根に鹽をつけてガリ、と咬かつて見ると言はれた、圓悟は天を捧へ地を拄たふイヤ恐ろしい大きな大根で天地の間に塞がるぞと言ひ、又斬釘截鐵この一答は干將莫耶の斬れ味がするぞと言ふ、しかし此の答話の落處はどこであらうぞ其の行先は分るまいといふので箭新羅を過ぐと言ふた、いよ結局に腦後に腮はを見る、與ともに往來すること、莫れ趙州のやうな危険な男と道づれになつて歩くと、途中で如何なる災難にあふかも知れぬと、趙州古佛を稱讚しぬいたのである、前則は壞と不壞との兩重の關であつたが此則は相見と不相見との兩重の關である、前則には這箇とばかり名けられた物が此則では南泉といふ人の名で商量される、但この趙州古佛は實に出格の宗師であるに依て大蘿萄の一答には古今東西惱殺されて居るのである。

頌 鎮州出大蘿萄天下人知一切忌道者 天下納僧取則用道開言長語 只

知自古自今半開半合古也不忘今也不忘 爭辨鵠白鳥黑全機顯說長者自長短

得不消賊賊自是擄劫過狀 納僧鼻孔曾拈得穿過了也

鎮州に大蘿萄を出だすと趙州の答話をソツクリ拈ひじ來つて、趙州と南泉の間ばかりては無い迦葉と釋迦の間でも二祖と達磨の間でも、彌陀如來と世自王佛の間でも、金剛薩埵と毘盧遮那如來の間でも、時雨と紅葉の間でも、春風と落花の間でも、見えなつかの見えなつかの嗣ついでいたかの嗣ついでがぬかのと云ふ論量のものには無い、只此の鎮州に大蘿萄を出たす、此れが即ち正法眼藏密附相承傳燈瀉瓶の姿である、圓悟は着語して、天下人知る其れほどのことは誰でも知てるぞと言ひ、又切に忌む道着すること、を本來成佛は今さら言ふには及ばぬ言へば便ち大根に疵きずがつくぞと言ふ、しかし此の鎮州に大蘿萄を出たすといふことは、先刻趙州からも聞てあつたが、今また雪竇から承はれば同じことながら何となく耳新らしく聞えるぞと云ふので、一回擧着すれば一回新たなりと言ふた、第二句に天下納僧則用道開言長語を取る、實に此の鎮州に大蘿萄を出すといふ一語が出格の名言であるに依て、天下の納僧たちが皆之を

手本にして參禪辨道の遵則とすることであると言ふ、圓悟は争、奈、せん、不、恁、麼、なる、を、能、く、之、を、手、本、に、す、れ、ば、好、い、け、れ、ど、も、中、々、其、う、て、な、い、と、言、ふ、更、に、裡、面、か、ら、誰、か、此、の、閑、言、長、語、を、用、ひ、ん、鎮、州、だ、の、大、根、だ、の、と、い、ふ、こ、と、を、誰、れ、が、手、本、な、ど、に、す、る、も、の、か、と、言、ふ、第、三、句、第、四、句、に、只、自、古、と、自、今、と、を、知、て、争、て、か、鶴、は、白、く、鳥、は、黒、き、を、辨、ぜん、コレは只一面を知て更に他の一面を知らぬと云ふこととて、誰も彼も此の公案が宗門の極則であるといふことをば、古は斯く、今は然か、といふことを一通り誰も知てるやうに知つて居るばかりのこととて、更に其の何故に此れが極則であるぞといふ玄旨に至つては、鶴は白く鳥は黒いといふことを誰も知て居ながら何故に白いぞ何故に黒いぞといふことの分らないのと同じやうに分らぬぞと言ふのである、つまり分り切たことのやうて本統の事は分らぬぞといふのぞ、故に着語に半開半合すなはち分つたやうて分らない、其の連中が麻の如く粟に似たり幾らもあるぞ、自古も也、た、不、恁、麼、如、今、も、也、た、不、恁、麼、て、今、も、昔、も、本、統、に、知、り、得、る、者、は、無、い、と、云、ふ、第、四、句、の、下、に、全、機、顯、脱、す、コレは鶴は白く鳥は黒いといふ一語を以て宇宙萬象の全機が歴々分明に露現して居るぞと稱賛し又長者は自ら長く短者は

自ら短し、コレは圓悟が鶴の白き鳥の黒きを辨じて見せたので、長い者は長くて短かい者は短い何の辨じ難いことがあるぞと言ふたのである、又識得する者は貴し本統に此の鶴は白く鳥は黒いといふことを識り得たる人があれば實に貴いと云ふ、又更に裡面から也、た、辨、ず、る、こ、と、を、消、得、せ、ず、何、も、其、の、や、う、な、こ、と、を、辨、ず、る、必、要、は、無、い、ぞ、と、抑、へ、る、ソ、レ、で、雪、竇、さ、ら、に、機、輪、を、一、轉、し、て、賊、々、そ、れ、盜、人、が、來、た、ぞ、と、鳴、り、さ、け、ぶ、誰、が、盜、賊、で、あ、る、ぞ、此、に、至、て、は、三、世、の、諸、佛、も、歷、代、の、祖、師、も、皆、盜、賊、よ、別、し、て、趙、州、が、賊、の、中、の、大、賊、で、禿、僧、の、鼻、孔、會、て、拈、得、す、彼、の、鎮、州、に、大、羅、荷、を、出、だ、す、の、一、言、下、に、天、下、多、少、の、禿、僧、を、し、て、面、目、な、か、ら、し、め、た、こ、れ、ほ、ど、の、大、盜、賊、は、古、今、ま、れ、て、あ、ら、う、と、言、ふ、着、語、に、咄、そ、の、賊、々、と、騒、ぐ、雪、竇、が、賊、で、あ、る、ぞ、と、叱、る、更、に、是、れ、別、な、ら、ず、趙、州、も、雪、竇、も、同、じ、盜、賊、仲、間、に、相、違、な、い、自、ら、是、れ、擔、枷、過、狀、警、察、官、や、檢、事、の、調、べ、も、受、け、な、い、う、ち、に、自、首、し、て、自、か、ら、賊、々、と、騒、ぎ、出、し、た、の、で、あ、る、と、言、ひ、結、局、に、穿、過、了、也、そ、の、賊、が、拈、得、し、た、禿、僧、の、鼻、孔、に、繩、を、穿、過、し、て、逃、さ、ぬ、や、う、に、す、る、と、言、ひ、更、に、裂、轉、と、は、其、の、鼻、づ、ら、の、繩、を、以、て、鼻、の、ち、ぎ、れ、る、ほ、ど、引、き、づ、り、ま、は、す、と、い、ふ、の、で、あ、る、是、れ、が、圓、悟、の、此、の、公、案、に、對、す、る、活、機、輪、の、轉、じ、や、う、ぞ、

第三十一則 麻谷振錫遶牀

**垂示**動則影現、覺則冰生。其或不動不覺、不免入野狐窟裏。透得徹信得及、無絲毫障翳。如龍得水似虎靠山。放行也。瓦礫生光。把定也。真金失色。古人公案。未免周遮。且道評論什麼邊事。試舉看。

動ずれば則ち影現じ、覺すれば則ち冰生す。コレは最初、鑿論に僧肇法師が言はれた語を、後に水源和尚が僧の如何なるか是れ沙門の行と問ふたのに此語を以て答たことがある、動と云ひ覺と云ふは心の作用で影と云ひ氷と云ふは水の變動に譬へたのである、乃ち善念にもせよ惡念にもせよ苟くも心がチラリと動けばハヤ鏡の如く澄わたつてる水の上にチラリと物の影の映つたやうなもので、如々不動の本體に汚點を生ずることになる、例へばチラリと物を見る途端に其れに氣を取られるのが動であるが、更に彼れは花であるとか紅葉であるとか知覺するのが覺であ

る、委しく言へば起信論の三細六塵といふやうなことを以て辨ずれば分り易いと思ふけれども今は略して、とにかく念起念覺とも申して少しも心が動き出して思慮分別を起せば譬へば水が氷になつて自由に漂流する本能を失ふやうなものである、然らば心といふものは全く不動不覺が本色かといふに其れ或は不動不覺なるも野狐窟裡に入ることゝ免がれず、之を前の水の喩譬で申せば如何なる物が來ても影が映らない又幾ら寒くなつても氷らないといふのでは是れ又水の本能を失ふたのである、野狐窟と云ふは疑に疑の重なる姿で到底自由を得らるべきでは無い、然らば心の本色は如何なるものであらうぞと云ふに動不動覺不覺の間には無い、透得徹し信得及して絲毫の障翳なくんば千動萬覺そのまゝに影も氷も直に是れ水の作用に外ならぬ時節に至ることが出来る、透得徹といひ信得及といふ信は疑ひの晴れた姿、透は滞りの無い貌であるから、萬里片雲なき青天を望むやうに、心に一點の曇りも障りもなくなつたことを言ふのである、斯うさへ成れば龍の水を得るが如く、虎の山に靠るに似たり、如何に龍なればとて一點の水もない處では蚯蚓ほどの活動も出來ず、如何に虎なればとて市中で見せものにされるやう

になつては猫も同様なわけであるけれども、一旦水を得た山に落つたといふ本舞臺に上つた日には、其の猛氣威風凛々として近傍することが出来ないやうなもので、今已に透徹し信得及した衲僧の自由自在無碍縦横なる活動は實に又別段なものである、其の一例を言へば放行するや瓦礫も光を生じ把住するや眞金も色を失す放行といふは與へて許すことと把住といふは奪つて許さぬことである、乃ち學人を接する上に於て放行と與へて許すときには草木國土悉皆成佛であるから如何なるものでも大光明を放たぬものは無い故に、瓦礫も光を放つ、然るに若し把住と奪つて許さぬことになれば、佛を呵し祖を罵しり毘盧遮那如來の頂上を踏みにじり、故に眞金も色を失す、サテ是の如き標準を以て觀察して見れば古人の公案も未だ周遮を免かれず周遮といふは委曲の義とあつて俗に謂ふ廻り遠いといふ意味である、乃ち苟くも言端に涉れば直截でなくなるに依て周遮を免がれぬと言ふのである、且らく道へ其れは何處邊の事を評論するのであるを、試みに擧す看よと本則を呼び出した、

**本則** 擧麻谷持錫到章敬。遶禪床三匝。振錫一下。卓然而立。

一校脫出。直敬云。是是。泥或洗。土塊。賺殺。一船人。雪竇著語云。錯。放過。則不可。猶得。天動地。

麻谷又到南泉。遶禪床三匝。振錫一下。卓然而立。

泉云。不是。不是。何不承當。殺人不。

敬道是。和尚爲什麼道不是。主人公在什麼處。還漢元。

是汝不是。爲什麼。却多少。人來。此是風力所轉。終成敗壞。

麻谷は蒲州麻谷山の寶徹禪師のこと、章敬といふは京兆章教寺の懷禪禪師、南泉は前にも屢々出た池州南泉の普願禪師で三人ともに同じく江西馬祖山の道一禪師に嗣法した兄弟である、錫を持して章敬に到り禪床を遶ること三匝し錫を振ふこと一下して卓然として立つ、錫といふは錫杖と申して印度以來僧徒が旅行するときに必ず持てあるべき道具の一つである、其の作りかたは鐵または銅を以て或は六環或は十二環を二股または四股ある軸に懸け之を振れば錫々と鳴るやうにし、其れを杖の先に附けて道を歩く時に鳴らしつゝ行けば路頭に居る虫などが遁

れ避けて踏み殺される難をのがれる、これには「錫杖經」と云ふ經が一卷あつて眞言宗などでは其の取り扱ひかたに其れく作法もあるといふことである、今は麻谷の寶徹禪師が法兄の章敬懷輝和尚を勘驗しやうと思ふて、麻谷が坐禪入定して居る所へツカくと往き、禪床を遶ること三匝とコレも印度の禮法で、凡そ尊敬すべき人に謁見するときには其人の座床を右の方へ三返まはつて、却住一面をズツと退ぞいて其の指揮を待つべきのである、乃ち麻谷は其通りに禮を盡したので有るけれども、錫を振ふこと一下して卓然とし立つと云ふ調子に、已に彼の魚行けば水濁り鳥飛べば毛落といふ兆しが見える、此の則の垂示に謂ゆる動覺すれば影現し永生すの姿をまぬがれない圓悟が冷かして曹溪の様子一模に脱出すと言ふた、コレは昔し曹溪山の六祖慧能大師の處へ永嘉の眞覺大師が始めて往かれた時に、今と同じやうに禪床を遶ること三匝振錫一下して立つ、其時には六祖大師が汝は何の處より來て大我慢を生ずるやと叱責せられたことがある、其の様子をソツくり模出した、永嘉大師の生き寫してあるぞと言ふのである、更に直に得たり天を驚かし地を動することを振錫一下卓然而立といふ勢ひは勇ましい有様ぞと翻弄す

る、然るに六祖の永嘉に對する叱責とは事違ふて敬云く是々そこじやそこじやと謂ゆる放行して麻谷を擲掄した、着語に泥裡に土塊を洗ふ、章敬は麻谷を一洗してやらうと思ふのであらうけれども到底徒勞と言ふ一般の人を賺殺す是々などと放行して麻谷一人では無く乗合一同馬鹿にされるやうなものぞ、是れ什麼の語話ぞ、コレは章敬は何故に是々と放行されたのであるか、參究して見よと門下への注意、繫轂子いつれにしても多くの人は皆此の是々に繫がれて自由を得られぬであらうぞと言ふ、雪竇着語して云く錯イヤ違つたぞと聲をかけた、コレは何が違ふたのであらうぞ、圓悟が放過せば則ち不可、この釘一本打たずに置いたなら其の災禍が何處まで汎濫するか分らぬぞと言ふた、アンバイ猶ほ一着を較く、こと在り、較は關の訓でカクと讀むが好いといふことである、錯と言ふただけでは未だ足らぬ、我ならば外に仕方があつたにと云ふ調子、果して麻谷は章敬に是々と言はれたのを大悟徹底の印可でも受けつたりになつて其是々を双肩に擔ひ、今度は一人の法兄なる南泉に到り例の如く禪床を遶ること三匝錫を振ふこと一下卓然として立つ、必らず南泉も亦た是々と許すであらうと思ふた調子、ソコで圓悟は依然



として泥裏に土塊を洗ふと抑へ又再運前來同じことを繰り返して何うするぞと叱り、鰕跳れども斗を出でず、コレは彼の鰕を大升の中に入れて置けば幾らピン／＼と跳りはねても升の外へ飛び出すことが出来ないうやうであるといふ譬喩で、麻谷が會つて章敬の處へ往つた時の見識一點張りて更に轉身の作略がないのを抑へたのである。泉云く不是、不是、前の章敬とは全く反對に謂ゆる把住て斷然奪ひ去つてしまふた、即ち眞金も色を失する場合であるから、此時の麻谷の失望はどんなであつたらうか、然かしコレが時節因縁純熟の機であつたならば、必ず此の不是、不是の言下に豁然大悟と桶底を脱し得べきであつたに惜いことをと云ふので、圓悟は何ぞ承當せざると言ふ又人を殺すに眼を眨せずとコレは南泉が麻谷を接するに毫も人情を加へぬ峻峻の手段を稱賛したのである、更に是れ、什麼の語話ぞ、コレは學人への注意で、南泉が何故に不是、不是と把住したのであるか、審細に參究して見よとの勸誡である、雪竇着語して云く、錯前には章敬が是々と許したのを錯と咎め今は亦た南泉が不是、不是と抑へたのを錯と咎めた、コレは一躰何といふことであらうぞ、圓悟は相變らず此の錯にも賛成して放過せば、不可すなはち許しては成ら

ぬぞと言ふた、麻谷の實徹禪師は馬祖大師の法嗣の多い中にも屈指の一人であるから、後にはサスが出格の宗匠であるけれども、此の頃には未だ徹底して居らぬに依て、例の振錫一下卓然として立つといふ悟りに着きまはり、其上章敬に是々と許されたと思ふたのが祟つて居るから、更に南泉に向つてコレに麻谷當時云とある此の當時といふ二字は何か誤つて混入した衍文であらうといふ、章敬は是と道ふ和尚什麼としてか、不是と道ふと詰問に及んだ、圓悟が主人、公、什麼の處にか、在ると咎めた、其様に人が是々と言ふたからと云ふては是々に附きまはり、又人が不是、不是と言ふたからと云ふては其の言葉を送ひまはす、其れて自分の主人公は何處にあるのぞと叱つた、更に這の漢元來人の舌頭を取るや、もすれば人の口先に附きまはる男ぞと言ひ、又漏逗、少なからず到底物の用には立たぬと抑へる、泉云く、章敬は即ち是々、汝は不是、コレに於て是と云ふも不是と云ふも畢竟其機の如何に依るので、其事の是非では無いと云ふことが分らねばならぬ、又ソコで南泉の如何にも深切なと云ふことも知れる、即ち圓悟也、た好し人を殺さんには須からく血を見るべし、人の爲めせんには須からく爲めに徹せしむべしと言ふたのも、其の深切徹困の

處をほめたのである。又多少の人を瞞却し來るコトは此の章敬は即ち是々汝は不是といふ言葉の爲めに多くの人が色々とマゴつかせられるであらうぞとの意が、南泉は更に注釋を下して此は是れ風力の所轉のみ終に敗壞を成さんと引導をわたりた。風力の所轉といふことは凡そ人間の身體は地水火風の四大が集まつて出來て居るので、其の中に身體の活動するのは全く風大の力であるといふのが印度の古説である。ソレで今麻谷が禪床を遷ること三匝振錫一下して卓然として立つといふやうなことは、肉體の運動だけのことて即ち風力の所轉に過ぎぬ。然らば此の身が死て地水火風の四大が分離してしまふ時には必ず俱に敗壞してしまふのでは無いか、其の様な無常變遷のものに何の價值があるぞと叱つたのである。着語に果然として籠罩せらる。到頭麻谷は南泉の爲めに身動きも出來ない所まで推し込められてしまふたぞ、更に自己を争奈せんと言ふコトは南泉に向つて終に敗壞せんと言はれるけれども、コトに何うしても敗壞しない自己といふものがあるが、此れは如何になりますると反問したのである。結局この公案は是と不是との兩端に煩悶するものを救ふの良薬である。畢竟本分の事は是非の邪正のといふ

支配をうくべきものには無き。

**頌** 此錯彼錯

惜取眉毛○天上天下唯我獨尊

切忌拈卻

兩個無孔鐵鎚○直饒千手大悲也

四

海浪平

天下人不敢動者○東西南北一等家風○近日多雨水

百川潮落

淨安經○直得海晏河清

古策風高

十二門

何似道箇○杖頭無眼○門門有路空蕭索

門門有路空蕭索

一物也無○雖爾非蕭索

頼有轉身處○便打

作者好求無病藥

一死更不再活○十二時中爲

此の頌は本則の主題たる是不是のことは棚の上へあげて置いて、雪竇自分が下した着語の錯の字を擴張して一頌を作られた。此れも錯彼れも錯すなはち麻谷の振錫一下卓然而立の悟りも錯章敬の是々も錯なれば南泉の不是不是も錯、天桂老人は佛來るも錯、祖來るも錯、千錯萬錯一切都べて錯と言はれた。其れでは取り附くべき所がないに依て、是も不是も迷悟も凡聖も皆掃蕩し盡した有様ぞ、圓悟が此句に着語して眉毛を惜取せよ、雪竇あまりに説き過ぎはせぬか、眉鬚墮落しやうぞと言ふ、然し此の兩箇の錯の字は令に據て而して行ふ、佛祖の正令を實行せられたのであるとほめ、更に天上天下唯我獨尊と稱賛した己に佛祖の正令である唯我獨尊

であるからには切に忌む拈却することを此の拈却は却の字が主になるので、取り除いてはならぬぞ抜き棄てゝはならぬぞと云ふ意味である。若しも此の錯の字を取り除けば直に是とか不是とか動き出すに依て、此の兩錯の鐵柱を堅固に確立させて置かねばならぬ。圓悟が兩箇の無孔の鐵錠と言ひ、又直饒、千手、大悲も也。た提不起と言ひ更に或は若し拈し去らば閻黎に三十棒を喫せしめんと言ふ。此兩錯の鐵錠は千手觀音が千本の手を一つに去て取り除けやうとしても動かすことは出来まい。若しも亦た其れを取り除ける者があつたならば三十棒を喰はせると重ね、此の兩錯を根じめ固めたサテかう兩錯の鐵柱を堅く立て、さへ置けば四海浪平かにして百川潮落つと是の不是のと云ふ騒ぎもなく地獄だの極樂だの迷だの悟だのと云ふ喧嘩もなくなり天下泰平であるぞと言ふ。百川潮落つといふは四方八面から大海へ朝宗する都べての川々も皆穩かに流れ行く有様を言ふ。着語に天下の人敢て動着せず誰一人として彼れの此れのと狼狽する者はない。東西南北一等の家風で孰れの家庭も悉く安穩である。然かし近日雨水多し或ひは百川暴漲して河海に激浪を起すも知れんぞと警醒了た。百川潮落の下に淨裸々赤灑々少しも飾

りなしに直に得たり自家安穩に海晏河清ぞと皆泰平無事の景象を言ふ。サテ餘りに泰平に過ぎて本則の振錫一下卓然而立を忘れてしまふたのを更に錫杖をザク／＼と振り鳴らして古策風高し十二門と一轉した古策といふたは今は錫杖のこゝとて錫杖に十二環あるのを十二門と形容した一體に此の錫杖といふものは佛々祖々の必ず傳持したまふ所の大切な道具であるから振錫一下卓然而立の風格は甚だ高尚森嚴なるものである。即ち前に申した永嘉大師は此の振錫一下卓然而立の下に於て曹溪の衣鉢を正傳し得たのである。然るに今は何うであらうぞと參究して見ねばならぬ。着語に圓悟は這箇に何似と一抄した。這箇とは何物であらう佛々祖々傳持の古錫杖よりも貴い物を圓悟は所持して居ると見える。イヤ其の古策まことに風格は高いけれども惜いかな杖頭に眼なし麻谷の如き振りやう罩しかたではと抑へたサテかう錫杖の話になれば又錫杖に付き廻る者もあらうが切に忌む。拄杖頭上に向て活計を作すことをと學人を警誡せられた門々路あり空く蕭索かの古策の十二門その一門一門毎に皆出身の活路があつて自由自在に極樂へても地獄へても易々と通りぬけが出来る。然るに此の通路は廣々と推し開かれてあ

つて誠に澹泊無爲であるから、其景況を空く蕭索と形容した、平等無差別の境は一味であるから無味であると云ふことを、着語に「物も也た無し」と言ふたも其形容である、更に「你が平生を賺す」と言ふたは學人への注意で、諸人の平生は何うであるぞ雪竇の語句に欺むかれぬやうにせよと云ふ、觀着せば即ち「勝す」然らば其の空蕭索の景況は如何なるものやら一見したいと思ふたならば直に眼がつぶれるぞと云ふ、サテ前には四海浪平と言ひ今また空蕭索とかく物靜かなる景色ばかりであつたが、雪竇は決して其れて暮にする人ではない、更に一轉して蕭索に非ずと言ひ出した、圓悟が果然きつと其うくるであらうと思ふて居たと言ひ、又頼ひに轉身の處ありと言ふ、然るに諸人は此の蕭索に非ざる景色が見えぬが已に「購し了れりやドレヤ」眼を開かせてやらうかと便ち「打つ作者好し無病の薬を求むるに此の蕭索に非ざる活潑々の地に於て無病の薬を求むるが好いぞ」と言ふ、無病の薬といふは無病の病を療治する薬といふこと、無病の病といふは無迷の迷ともいふので即ち悟りに滯つて居るのが更に一種の高尙なる迷である、麻谷は其の悟りをドツサリ双肩に擔つて章敬や南泉の處へ賣りに往つたものであるから、是々たの不是だの

と擲論されたのである、仍て彼の兩箇の錯の字を以て其の無病の病を療するの良薬とするが宜しいと云ふ、圓悟は「一死更に再活せず一旦死てしまふた者は二度とは活きないと言ひ、又十二時中什麼としてか、睡するコレは學人を警誡して、晝夜眞實に參究せんければならぬことを勧め、更に天を撈し地を摸して、什麼をか作さん、必死の場合になつてから幾ら狼狽でも何の證もないぞ」と言ふ、

第三十二則 臨濟佛法大意

**垂示**十方坐斷千眼頓開。一句截流萬機寢削。還有同死同生底麼。見成公案打疊不下。古人葛藤試請舉看。

十方を坐斷して千眼頓に開け一句に截流して萬機寢削すコレは本分の宗師の人を接する機鋒の鋭い様子を言ふたので、十方を坐斷するとは空間的に無限の宇宙萬象を掌中に握つた形容であるが、其中には時間的にも三世の因果を悉く空盡する意は含んである、かくてこそ千眼も頓に開けるのである、千手千眼といふは觀世

音菩薩に限つたことではない人々ことごとく十方三世見とほしの活眼が開けるのである、一句に截流するといふは都べて煩惱妄想といふものは其次其次と増長して果てしのないものであるから、源泉混々の流れに譬へて順流生死といふのである、其れを今は一言一句に其の流すなはち煩惱生死の源泉を截断するといふのである、かゝる機鋒あつてこそ萬機寢削す、寢は息なりと註してヤムと讀み、削は本よりケツルといふ字であるから、都べて運作顛動が皆休止して無事安穩になるといふ意味である、然るに斯かる機鋒峻峭なる宗師に參して同死同生する底ありや能く其人と足並をそろへて同伴し得る者があるかと云ふのを、其れは何も格別に珍らしいことでは無い現成公案、て天は高く上に澄み地は低く下に堅く、火は焼き水は濕ほす歴々分明であるけれども、其れを打疊と一擡みに引つからげることか不下とむづかしいならば、こゝに好い手本の古人の葛藤があるから其れを試みに請ふ擧す看よと本則を拈起する、

**本則** 擧定上座問臨濟如何是佛法大意多少人到此茫然 濟下有濟下

禪床擒住與一掌便托開今日提收老婆心切 定佇立已落鬼窟裏

傍僧云定上座何不禮拜冷地裏有人親破 定方禮拜將動 忽然補動

大悟如時得證如實得實 將錯就錯且道定上座見箇什麼 便禮拜便禮拜

鎮州臨濟の義玄禪師は南嶽下の第五世で達磨大師十一世の孫である、今日天下に尤も其法孫の繁昌して居る臨濟宗の高祖であるから、今さら申すまでも無いことであるけれども、實に此の垂示に謂ゆる十方を坐斷して千眼頓に開き、一句截流して萬機寢削すといふ活機を具へたる大宗師である、其の門下には多くの龍象が陶冶し出されたことであるが、今本則の定上座といふ人は、此の公案の因縁で大悟せられた後に、隱遁して出世せられなかつたものと見えて、其傳記が甚だ明かでない、或時その定上座が臨濟大師に向て如何なるか是れ佛法の大意と問ふた、定上座は此の問題を提起するまでには餘程骨を折て實參實究し、前の第十六則にあつた卵の中の雛がモハヤ殻を飛び出すばかりに熟したので、斯う内から啐したのであつたと見える、圓悟は多少の人此に到りて、茫然と着語した、定上座には限らず眞實に

此の佛法の大意を會することは得難いぞと言ひ、更に猶ほ這箇の在る有り定上座は佛法の大意とか云ふことを問ひまはつて居るが、我が手裡には這箇といふものもあるぞ、其の這箇が分れば自然に佛法の大意などには用がなくなるであらうぞ、又訝郎當、什麼をか作す訝は嗟訝とつゞいて日本の俗語にサテモくといふやうな歎息の言葉、郎當は前にも有つたが疲羸零落の姿であるから、今コ、てはサテモく定上座がヨボくとなさけない様で佛法の大意などと問てゐることの氣の毒さと云ふたアンバイ濟禪床を下りて擒住し一掌を與へて便ち托開す、臨濟大師は定上座の機縁純熟して卵の中からコックと啼する様子を見て取て、イキなり禪床の上から飛びおりて定上座の胸ぐらを引き攫み、ビシヤリと平手で横面を一つ擲つて、グイと突き放つてやられた着語に、今日捉敗す、毎日く斯のやうな奴を捉へやう捉へやうと思ふて居たが、今日こそ確かに捉へたぞと言ふ、又老婆心切すてに擒住し又其上に一掌を喰はせるとは如何にも慈悲の深いことぞ、しかし此の臨濟の機縁に遭ふては、天下の衲僧も跳不出誰でも中々自由がきかぬぞと次の行思を豫言する、果して定上座の雛は臨濟の母鳥にスカサズ、ホカリと卵を打ち破ら

れて始めて天日の明に接したのであるから、一時茫然として定行思す、母も子も、一刹那が誠に生死のさかひである、着語に已に鬼窟裡に落つとある、此の行思が行思に止つて轉身の路が附かなかつたならば、モハヤ救ふべからざるに到るであらう、蹉過了也、それ早く禮拜すべき所ぞ何をマゴつて居るぞと聲を掛け更に免かれず、鼻孔を失却すること、をイヤ蹉過了には止まらぬコッコで豁然大悟が出来ぬやうては、モハヤ目も鼻もメチャクに衲僧の面目が立たぬては無いか、其れを見かねて、傍僧云く上座何ぞ禮拜せざる、コレは臨濟大師の傍らに侍立して居た僧が助言して、お前モハヤ問答は濟んだぞナゼ早く禮拜して退ぞかないかと注意したのである、着語に冷地裏に人あり、顛破す俗に謂ふ觀傍八目といふことぞ、此の助言で禮拜する氣になれば、全く他の力を得たのである、東家の人死すれば、西家の人哀を助くるやうな助言で、只義理一片に過ぎぬ、拶揆されて亡者が蘇生するわけにも往くまいと、コレは傍僧に別に眼ありての拶着ては無いといふことを評したのである、しかし斯う傍人から注意せられて見れば、サスガに茫然として行思して居た定上座も、思はず禮拜するに方りて、忽然として大悟す、コレは一轉臨濟に悟らせてもら

うたのであらうか、傍僧に悟を授けられたのであらうか、畢竟定上座が平生眞參實究の功積りて時節因縁純熟した所を、臨濟大師の慈悲深重なる手術をうけて脱然角駄を卸すことが出来たのである。譬へて見やうならば妊婦が懐胎月満ちて將に産まんとして聊か難み居る時に、經驗ある巧者な産婆がチヨイと腹へ手を掛けてくれたと思ふと、やすくと玉のやうな子がオギヤと産聲をあげたやうなものである。着語に勤を將て拙を補ふ、コレは前に忖思した拙劣を禮拜の勤めぶりで補ふつもりかと冷かしたのである。忽然大悟の下に、暗に燈を得たるが如く、貧に資を得たるが如し、其時の嬉しさは何んであつたらうぞ。錯を將て錯に就く。然しながら佛法の大意を問ふて忽然大悟した本分の上から見れば皆錯と錯との集りよと言ひ更に且く道へ定上座箇の什麼をか見て便ち禮拜したる元來佛法の大意を問ふたのでは無いか。然るに臨濟は胸倉とつて打ち擲つた其れが佛法の大意といふものか、胸倉とつて打ちなぐるのが佛法の大意であるならば、日本橋の魚河岸の若い衆などは毎日く佛法の大意を擧揚して居ると云ふものを、禮拜するのが大悟の方法か、然らば田舎の授戒會などで婆々さんたちが七日が間の三千佛名禮に

皆定上座同様の大悟が出来るわけである、畢竟これは如何なる道理をソコが即ち眞參實究の大切な所である。

**頌** 斷際全機繼後蹤、持來何必在從容。

他人運得也、巨靈擡手無多子、分破華山千萬重。

斷際の全機後縱を繼ぐ、斷際といふは臨濟の本師黃檗希運禪師へ宣宗皇帝から賜はつた勅號である、黃檗禪師の事は第十一則の所で大略辯じた通りのこと、如何にも機鋒惡辣寄り附くことの出来ない人であつた、臨濟は其の弟子で其の惡辣の提撕を受けたのであるから虎鬚を持てたと常に評判されてある、己に其惡辣の機鋒を全分承け繼いだのであるから、臨濟の人を接する手段は全く黃檗ソツくりて、持し來つて何ぞ必ずしも從容に在らん、從容は閑雅の貌で俗にオトナシイといふとである、然るに臨濟は黃檗の惡辣そのまゝに持し來つたのであるから、到底從容といふわけには往かぬ、即ち直に胸倉とつて擲りとばすと云ふ流義である、着語に黄河は源頭より濁り了れり、黄河の水は大河となり大海へ入てから黄色に濁つ

たのではない。濫觴の源泉から濁つて居るが如く、臨濟の峻峻には師匠以來の相承がある。と云ふのぞ子は父の業を承く。コレは辯ずるまでも無い。第二句の下に什麼の處にか在る。斷際の全機を持ち來つたといふが其の全機が何處に在るぞと學人に參究の路を示し更に此の如き人あるを爭奈ん。コレは全機といふものは持ちあるけるもので無いのに、臨濟のやうに持ち來た人があるから妙ではないかと言ひ又脚手なき人還て他を得んや也。た無や全機を持ち來るといふからには手も脚も無い人には全機を得られないのであらうかと嘲弄したやうな着語であるが、コレは皆吾人をして文字言句の間に屈着せざらしめぬやうにとの圓悟の老婆心切である。サテ第三第四の句で臨濟が其の全機を實用する様子を言ふ。即ち巨靈手を擡げて多子なし。分破す華山の千萬重。コレ昔し首陽山と華山とが一つ山であつて、其山に礙えられて黄河の水が流れ得なかつたのを、巨靈といふ華山の神が手を以て山を二つに分けて一方を首陽山とし一方を華山として其間を黄河の水が通つて東海まで落ちられるやうにしたのである。といふ神話があるのを、臨濟が定上座を接して其の堅牢なる疑團の山をサククと二つに打わつて、忽然大悟させた手段に

譬へたのである。多子無しといふことは俗に別段の事は無いといふほどのこととて容易に出來るといふ意味。着語に人を嚇殺し山を二つに裂くのが容易であるなど。は人を驚かせるてはなにかと言ふ。又少賣弄とかく雪寶は色々な機能を説て賣り附けたがる人ぞと揶揄し其やうな物は買はぬぞと打つこと。一拂子更に再勘せず。モ一幾たびも價段を聞く必要はないぞと云ふ。結句の下に乾坤大地一時に露出す。首陽と華山が二つに分れて黄河が樂々と流れ出したばかりでは無い。森羅萬象皆其實相妙用を呈出し來つたぞと稱揚し更に墮也といふは物の打ち毀れた有様で、分破す華山の千萬重といふ句裏に宇宙萬象ことごとく打破し盡して餘遺なき機があるを示した。前の着語で乾坤大地を建設し更に此の一語で其れを破壊し了つた。畢竟吾人をして一處に住着し得ざらしむるので。

第三十三則 陳尙書看資福

垂示 東西不辨 南北不分。從朝至暮。從暮至朝。還道伊瞞睡。



麼。有時眼似流星。還道伊惺惺麼。有時呼南作北。且道是有心。是無心。是道人是常人。若向箇裏透得。始知落處。方知古人。恁麼不恁麼。且道是什麼時節。試舉看。

此の垂示は作家の衲僧を外観から窺がふことの出来るものでは無いといふことを述べて資福の人を接する様子が尋常でないといふことを示したのである。東西辨せず南北分たず朝より暮に至り暮より朝に至るコレを俗語で言ふて見れば朝から晩まで西も東も分らずち芋の煮いたも御存知なくボンヤリとして居るからと云ふても、還て伊れ瞌睡すと道はんやアレは寝ぼけて居るのだとは言はれない、いつ何時に如何なる活動するかも知れぬからである、眞實大無心の境に住して居る者は一見白痴のやうに見えるけれども、此の大無心の人にして始めて如何ほど大膽なる決断でも又如何ほど小心翼々たる注意でも出来るのである、又それと反對に眼は流星に似て其面つきは晝にかいた達磨大師を見るやうであつても、其れが何を睥睨んで居るといふのでも無く眼光炯々として人を射て居る時もある、之

を還て伊れ惺々として道はんや惺々といふは慧悟の貌で伶俐鋭敏なることであるが彼の眼光炯々が敢て獵犬が兎や鹿をねらふて居るやうなわけでも無い、又有時は南を呼て北と作す即ち人が南を問へば北と答へ木に竹を繼いだやうなトボケたことを言ふて居ることもある、且く道へ是れ有心か是れ無心か是れ道人か是れ常人か到底普通の人情を以て外から見た所て何とも窺ひのつくべきものではない、若し箇の裡に向て透得して始て落處を知らば方に古人の恁麼不恁麼を知らん、箇の裡といふは前に擧げたやうな頓と窺ひのつかない場處に向て、其の落處をすなはち此れはコ、彼れはア、透徹して知ることが出来るやうになりさへすれば、古人すなはち佛々祖々が種々様々の手段作略をめぐらして學人を接得せられる様子が明かに分るであらうと云ふのである、恁麼といふは是の如くと云ふほどのことであるが今恁麼不恁麼と重ねたのは別に意味あつて反對なことを二つ並べたのでは無い、俗に此れはカクく彼はシカくといふやうな言葉で餘り深く考へるには及ばぬと思ふ、サテ此の箇裡に向て透得して落處を知るには何うしたものかと云ふに、要は實際に修行の功を積んで佛祖の頂顛を慕過し來れば照魔鏡を以て

照すが如く歴々分明寸分の見違ひもないはけてはあるが近くは己れの料簡で彼れの此れのこと思慮分別をめぐらし、人の言葉や素振に氣を取られてウロつき廻るから落處を知ることが出来ぬのである。且く道へ是れ什麼の時節を試みに擧す看よと本則に結飯させた。

**本則**

舉陳操尙書看資福。福見來便畫一圓相。是精識術○是賊識賊○還

見全剛操云。弟子恁麼來。早是不着便。何況更畫一圓相。今日僅看道

老福便掩却方丈門。賊不打發兒家○雪竇云。陳操只具一隻眼。具眼○頂門

道他意在什麼處○也好與一圓相○灼然○龍頭蛇尾○當時好與一抄教伊進亦無門退亦無路○且道更與他什麼一抄

陳操は陳が性で操が名である此の人が睦州の刺史を勤めて居た頃に睦州の記興寺道明禪師に參じて其法嗣の一人となり傳燈錄にも其の機縁が載せられてあるほどの事である。こゝには尙書とあるに依て後に官等が進て尙書にまで昇つたものと見えるサテ又資福といふは吉州資福寺の如寶禪師と申して仰山慧寂和尚の

孫弟子であるから南嶽下の第七世で達磨第十三代の宗匠である。或時彼の陳操が來參したのを見ると直に一圓相を畫いて見せた。一圓相といふは何でもなく只九い輪を手でなり又は持て居る拂子なり如意でなりグルリと空中に畫いて見せたのである。一鉢に此の資福如寶禪師といふ人は禪宗五家の中では滄仰宗の嫡流であるが此の滄仰宗では高祖の滄山靈祐第二祖の仰山慧寂以來輒もすれば斯ういふやうな圓相を畫いたり佛子を立たりつゝまゝ耳で聞かせる方よりは眼で見せる方の事をする。之を滄仰家の境致といふのである。圓悟の着語に是れ精は精を識る。コノ精の字のことは前にも申したと思ふが今は妖怪すなはち化物と云ことであるから資福と陳操いづれも化物仲間であるからと言ひ更に是れ賊は賊を識ると言ふ畢竟同じ意味である。若し温藉ならずんば争てか這の漢を識らん温藉といふは含蓄包容の姿で他の峻峻とか惡辣とかいふのとは全く反對である。今資福が一圓相を畫た様子は誠に温藉風流であるが此れて無くては彼の陳操を接することは出来ぬと云ふ意か又還て金剛圖を見るやと言ふ金剛は堅固なること圖は區域を局るのであるから此の一圓相の外へ容易に脱出することが出来ぬと云ふこと

て、其れが能く見えるかと門下への警誡である。實に陳操は俗人ながらサスカに睦州門下の舊參であるから黙して彼の一圓相裡に死在するわけには往かぬ、ソコで操云く弟子恁麼に来る早く是れ便を着けず何に況や更に一圓相を盡するをやイヤ拙者がかやうに伺ひ申したのが早やモ一本分に辜いた致しかたである。と存じまするに、貴僧がまた其のやうな圓相などをかきなさるといふものは甚だ合點のゆかぬこととて御座ると、資福のかいた圓相を猫なで聲で打ち消してしまふた、着語に今日箇の瞋睡漢に撞着すコ、の陳操のやりかたは垂示に謂ゆる東西不辨南北不分の瞋睡漢に初てお目に懸るやうな心持がするぞと言ふ、更に這の老賊と陳操を稱賛した、然るに資福は更に大賊である便ち方丈の門を掩却すと居間の入口の扉をヒタリと閉ぢてしまふた、モ一陳操は立ち往生をするより外に轉身の路がなくつた、然るに圓悟は賊は貧見の家を打せず何も其様に恐ろしがつて門を閉づるには及ばぬ陳操の如き老賊は資福のやうな貧窮人の家へは推し入らぬと弄した、しかし已に他の圓悟に入り了れり、モ一陳操は資福に圍まれてしまふて籠城の外はない圓悟といふは俗に繩張りといふやうな意味と見える、雪竇云く陳操

は只一雙眼を具せり惜いことに陳操は何に況や一圓相を畫するぞと把住する腕力は確實であるけれども、更に方丈の門を掩却せらるゝに至ては自由がきかなかつた、片目ばかりで片目は見えぬと抑へた之を垂示にあて、見れば資福は瞋睡的も慥々のも双方自由であるが、陳操は瞋睡的のみで眼流星に似たる底の作略が欠けて居ると云ふのである、着語に雪竇は頂門に眼を具す能く見たぞとほめ、且く道へ他の意什麼の處にか在ると學人に參究せしめ、也た好し、一圓相をモ一つ圓相を畫て見せてあつたならば陳操が兩眼を具するであつたらうにと冷かし灼然と雪竇の判断を證據立て、龍頭蛇尾と陳操の初め脱兎の如く終り處女の如きを誹り、更に若もわれ圓悟であつたならば資福が方丈の門を掩却しやうとする途端に好し、一拶を與へて伊をして進むも亦た門なく退くも亦た路なからしめるであつたに惜いことをしたと言ひ重ねて門下後學に注意して、且く道へ更に他に什麼の一拶を與へん何としたならば彼の資福をして嗔然たらしむることが出来るであらうか人々各自に參究して見よと云ふのぞ、

頌 團團珠遶玉珊瑚

三尺杖子攪黃河、須臾君  
眼胡僧始得、生鐵錘就

馬載驢馳上鐵船

用許多  
作什麼

且○有何什麼限○分付海山無事客不消得○須是無事始得釣鼈時下一圈擲

什麼來來何何一時出不得○若是蝦蟇堪作雪寶復云天下衲僧跳不出內○坑

地却○團聚  
還跳得出麼

團々として珠透り玉珊々コレは資福の一圓相を形容したので、團々と欠くる所なく、亦た餘る所もなく、且つ内外玲瓏として誠に美しくしいことよと讚歎する、此れは一轉何のことであらうぞ、今更に事新らしく申すまでも無い宇宙萬象の本體にして吾人も互ひの本心本性常には佛陀とも如來とも法性とも眞如とも菩提とも涅槃とも色々佛法臭い名も付き、或は這箇とか主人公とか箇事とか本分とか様々に禪學臭い名も附くのであるが、今は團々たる珠玉を露現し而も珊々たる聲も聞えるのである、圓悟が三尺の杖子、黄河を攪く、幾ら雪寶が其やうなことを言ふて圓相を形容しても到底形容し盡せるものには無い、三尺の杖で數千里流れる黄河をかきまはすやうなものと云ふ、須く是れ碧眼の胡僧にして始て得べし、コレハ達磨大師が七歳の時に二兄と共に寶珠を辨じたといふ故事があるに依て、其の團々

珊々を辨することは碧眼胡僧すなはち達磨大師でなくてはと言ふ、生鐵鑄就すイヤ珠玉でなくて生鐵で鑄出したやうな齒が立たぬぞ、然らば其の團々珊々たる珠玉は得難いものかと云ふに、本より宇宙萬象其まゝであるから十方三世に充滿して居るといふことを馬載馳驅鐵船に上す馬にも驢にも負はせきれないので、鐵船にまで積み込んだと言ふ着語に、許多を用て什麼か作さん、多し多く何にするぞ、といふても十方に涉り三世に充ちて什麼の限りか有らん、あまりに多く有て始末に困るから、團聚に與へて看んと門下の學人に向てお前がた之を受取ることが出来るか、先刻陳操はツキ受取りそこなつたぞと言ふアンパイ、雪寶は之を如何に處置するか、海山無事の客に分付す、江上の清風と天邊の明月とは絶えず團々珊々であるけれども、之を受用し得る人は少いのと同様、此の一圓相を受用する者は海山無事の客すなはち迷悟凡聖を超脱し、極樂も地獄も通りぬけた無爲無作の絕學閑人、てなくてはならぬのである、圓悟が人の要せざるなり、眞に無事の人であつたならば、其のやうなものに必要がないと言はうぞと言ふ、若し是れ無事の客ならば、也た消得せずイヤ須く是れ無事にして始て得べし、例の如く縦横に表からも裏からも

勘驗して吾人に參究の手段を示される、サテ海山無事の客は此の團々珊々たるものを分付されて何にするかと云ふに、籠を釣て時に下す一團擊この團擊といふ文字に就ては古人が色々と言を立て、決しないが、團々と言ひ出した團相の頌ではあるし且つは韻字の都合もあつて、此の文字を使ふたまでのことであらうから、むづかしく言ふにも及ぶまい、つまり籠を釣るといふは作家の衲僧が有力なる學人を接すること、其の時に必要な釣道具にするのぞと云ふまでのことと思ふ、然し其古人の異説を畧して擧げて見れば、團といふは禽獸を養ふために入れて置く檻のこゝと又擊は係なりの訓で、絲で物をくゝることであると云ふ説もあり、又反切で團擊の切が團であるから、擊の字には意味がない、只團の一字で團相のことであると云ふ説もあり、釣をするときに釣絲をくりあげる轆轤のことであると云ふ説もあり、團は釣針で擊は其の絲であると云ふ説もある、いづれが當れりやは分らぬが要する所は圓相に連想させて釣道具のことを言ふたものには違ひなからうと思ふ、着語に、恁麼に來り、恁麼に去る、昔から其のやうなものであるから、此後とても其んなものであらう、別段に珍らしくもない、しかし、一時に出不得、この團擊をのかれるこ

とは誰にも容易に出来ることでは無い、若し是れ蝦蟇なるは、什麼を作すにか堪えん本より蝦蟇の如き價直のないものに對しては、最初から此の團擊をば下しはせぬ、蝦蟇、螺、蚌、怎、生、奈何、小智小見の聲聞緣覺または教相に執着して居る文字の學者などは、海山無事の客の釣をする目的物では無い、須らく是れ籠を釣て始めて得べし、佛を呵し祖を罵りて、綽々餘裕ある底の力ある衲子を接してこそ、團擊を下した効もあると云ふものよ、雪竇復た云く、天下の衲僧も跳不出、しかし資福の如き殺活自在の作家に此の一團相を打出されては、如何なる衲僧でも中々この團擊を脱出することは容易でない、況んや陳操に於てをやといふたアンバイ、着語に、身を兼て内に在り、其う言はれる雪竇御自身も亦た跳不出の内であらうぞ、コレは勿論三世の諸佛も歴代の祖師も悉く跳不出のはづである、又一坑に埋却せん、イッソのこと、に資福も陳操も雪竇も皆一つ穴へ埋めてしまふが好いぞ、閑、黎、還て、跳出すや、コレは學人に向て他の諸家は皆跳不出であるが、諸人は何うじやとの警誡である。

第三十四則 仰山問甚處來

**本則**舉仰山問僧。近離甚處。

天下人一般。不可不作常程。

僧云。廬山。

實頭人

山云。曾遊五老峰麼。

因行不妨。掉臂。

僧云。不曾到。

移一步。面赤。不如語。

山云。

閣黎不曾遊山。

好。多事。生。惜。取。眉。毛。

雲門云。此語皆爲慈悲之故。有落

草之談。

殺人。刀。活。人。劍。兩箇。三箇。要。知。山。上。路。須。是。去。來。人。

袁州仰山の慧寂禪師は瀉山靈祐禪師の嫡嗣て謂ゆる瀉仰宗の第二祖であり、寂後に勅して智通大師と諡號を賜つた人である。或る僧が初めて相見を求めた時に近離甚の處ぞと問ふた、是れは禪林の規則として始めて接する者には、是れまで何處に居たか誰に參じて如何なる修行をし、其の結果は何んなてあるかを審問勘檢するのが當然の事であるから、圓悟が天下の人、一般格別めづらしいことでもないと言ふけれども人に師たる者の尤も注意すべき所であるから也、た問過を要すしかも風に因て火を吹く、其の問過のすがたが誠に容易である、かやうな問であつて見れば平生の挨拶としか思はれないでは無いかと言ふ、ソコで僧云く廬山から參りました誠に平常のまゝに正直な答で知らず、本分に契ふた味ひがある、圓悟が

斯のやうな實頭の人、は得難いと言ふ、然るに仰山の方ではモ一一段進めて勘驗する必要があるから更に曾て五老峰に遊びたりやと問ふた、ハ、廬山に居たといふか其れならば廬山の名所である彼の五老峰へは遊んで見たであらう、と一撈した着語に行に因て妨げず臂を掉ふを五老峰へ遊びに行くのは何の遠慮もないことよ臂を掉つてドシ、登るが好いと言ひ、何ぞ曾て蹉過せん決して路に迷ふやうな氣づかひは無いと圓悟は言ふが中々そう容易に往けるか知らんテ僧云く曾て到らず果して此僧まだ五老峰へ往つたことは御座りませんと言ふ、いかにも正直ではあるが誠に力の無い答であるから、仰山は俗に謂ふ暖簾と臍押して張合の抜けた調子であらう着語に、一步を移す此の僧コ、て遂に一步踏み違へたぞと言ひ、しかし知らぬことを知たふりをして面の赤くなるよりは、語の直からんには如かず正直にして耻をかゝない方が好い也、た忘前失後したるに似たり五老峰へ往たことを忘れたのでは無いか知らんと言ふ、山云く閣黎曾て遊山せず其れは貴僧は全く山遊びをしたことは無いのだナと如何にも平穩な談話である、着語に太多事生コレは日本の俗語に餘計な御世話といふやうな言葉と見える、ソコで



に片寄りて之を判断することは出来ぬ、たとひ師家が如何ほど本分の上から謂ゆる出草的に持ちかけても、學人が其機てなければ案外に落草の談となつてしまふこともあり、又それとは反對に甚だ落草に出かけるのでも時節因縁純熟の機であれば、圖らずも其れが自づから本分の事になふて、忽然大悟といふ場合のこともある、その調子は誰か尋討することと解せん容易に判断は出来ぬぞと言ふ、第一句の着語に頭上漫々、脚下漫々、どこもかしこも草だらけぞ、しかし雪竇お前は出るのか入るのか、半開半合ては分らぬぞつまり他も也、た、恁、麼、我も也、た、恁、麼、誰でも爲人接化は其うなければなるまいと言ふ、又第二句の下に頂門に一雙眼を具す、サガ雪竇は眼が高いとほめ、更に尋討することを解せぬは別人でなくて闍黎、尋討を解せず、貴僧御自分が尋討せぬのであらうぞと抑へた、蓋し其實は雪竇の獨占ぞとほめたのである、其れは何故に尋討し難いかといふに、白雲重々、紅日杲々、彼の仰山の境界は雲に雲が重なつて如何なる望遠鏡でも其山色を見ることが出来ぬ、かと思へば朝日がキラ／＼と昇つて谷底の水に遊んで居る魚の影が石の上に映るのも能く見えるやうにもある、一鉢どちらが仰山といふ山の眞景であらうやら、着語

に千重百匝その白雲が幾重とも限りがないと言ひ、又頭上に頭を安ず、コレは重々と言へば重々につき廻る者を警醒するため其のやうに幾重もかさねて何にするぞと拂ふ、紅日の下に破也、白雲重々が取り除かれたか、杲々たる紅日は誰にも見えるわけであるが我は瞎、盲目であるから見えぬ、イヤ眼を舉れば即ち錯見んと要すれば紅日忽ち光を失するぞ、左願に瑕なく、右盼は已に老たり、コレは四方八面みな佳絶の風景であることを言ふたので、老の字は韻字の都合て使ふたのであるから、今は只その山色の言はんかたなき風光を稱したまてのことである、着語に瞎、漢とある瑕なしなどと言て此大瑕か見えぬか大目くらめがと罵つた事である、何も事新しく、瑕が無いなどと言ふには及ばぬ、依前として、無事本來其のまゝよ、然るに、備許多の伎倆を作して、什麼をか作さん、雪竇が色々なことを言ふて何にするぞ、又一念萬年と言ふ、コレは老の字に對して老といへば年を経たやうに聞えるが、畢竟一念も萬年も無い、日々是れ好日の遊山ぞと言ふ、過オット危ふいぞ左願の右盼のといふ言句に付き廻らうならば路に迷ふて行先が分らなくならうぞ、サ、此の遊山で思ひ出したは君見すや、寒山子のことである、寒山といふは天台山の國清寺といふ



寺に豊干禪師といふ高僧があつて、其人が山奥で一人の童子のやうな老人のやうな男を拾ふてきて、名を拾所じしよと附けて寺の飯炊きや掃除などをさせて置いた、然るに折々其の友たちで寒山といふ是れもヤハリ老人とも童子ともつかない男が拾得の處へ遊びにくる、二人ともに非常な見識を以て大層に巧みな詩を作る、其れを後に集めたのが即ち寒山詩である、よく世間に四睡の圖といふのがあつて老僧一人と童子二人それに虎が一頭互ひに抱き合つて睡つて居る圖がある、あれが即ち此の豊干と寒山と拾得と虎とである、眞實無心無我無事無爲の人になつては如何なる猛虎も爪牙を逞することは出来ぬ、斯うなつてこそ眞の遊山と云ふものであると云ふので、雪竇がコ、へ引合に出したのである、圓悟が癩兒らゐ伴ばんを牽く、天刑病人の道づれ、仰山に雪竇に寒山をろひもろふたぞ、サテ彼の寒山の遊山のしかたは行くこと太た早はやし、草裡くさぢに入るのやら草裡くさぢを出るのやら孤峯頂上に登るのやら千丈の谷底に下るのやら頓とんと窺のぞひのつかぬ健脚けんかくぞと言ふ、着語ちやくごに也や、早はやからずイヤ早いとも遅いとも定められまいと言ふ、十年飯じゆんぱんり得えず忘わすれ却かへす來き時ときの道みちこの二句は寒山が作つた詩の句で其の全篇を申せば、欲ほつ得え安やす身み路ぢ寒山可長保かんざんかぢやうほ、微風吹幽松、近聽ぢんぢやう

聲愈好、下有斑白人、嗚々讀黃老、十年飯不得、忘却來時道、といふのである、實に遊山の最上乘で山が人やら人が山やら賓主融合して別異を辨せられぬ有様である、ソコで雪竇が其の結末の二句をコ、へ借かてきて此頌しゆを結んだのである、着語ちやくごに即今、什麼しやまの處ところにか在ある、十年歸り得ずといふが今は何處どこに居ますかといふ、十方じふぱう法界無始劫來じやくらいいつても何處どこにても悠々として遊山して居るのよ、灼然じやくぢやんそれに違ひないといふたやうな調子、來時らいじの道を忘却したとは其れは渠儂ぢやうぢやう、自由ぢゆうぢゆうを得たり、この渠儂といふ語は前にも有たが字の性質から言へば彼人といふのと同じであるけれども、使ひぐあひから見ると日本ことに關東の俗間にキヤツといふたやうな口調かと思はれる、キヤツ寒山かんざんめがウマク來時らいじの道を忘れくさつたナといふたやうなアンバ、實にこれは容易に忘れられないので困る、學問が邪魔になつたり悟りに責められたり色々な厄介やくけいに付き纏まとはれて自由がきかぬのである、しかし來時らいじの道を忘却したは一着いちぢやくを放過はうくわして居る、ナゼかといふに本より來往は無ないのであるぞ、然るに其やうなことを言ふて居るなら許さぬぞといふので便ち打つと本分の正令せいれいを行じ、且つ忘前わすれまへ、失後しつごを做なすこと、莫なくんば好このしと學人がくじんをして警省けいせいする所あらしめた、

第三十五則 文殊前三三

垂示定龍蛇分玉石別縑素決猶豫若不是頂門上有眼肘臂下有符往往當頭蹉過只如今見聞不昧聲色純真且道是皂是白是曲是直到這裏作麼生辨

龍蛇を定め玉石を分ち縑素を別ち猶豫を決すコレは凡そ師家たる者が四來の學人を接する上に於て能く其の機根を鑑識し且つ其心行の眞偽を辨別して他をして大悟徹底せしむるやうに手段をめぐらさなければならぬと云ふこととて此中に縑素といふことを常には多く僧俗といふことに使ふこともあるが今は只黑白といふこととて學人の修證の辨別をすることである又猶豫といふは疑惑の義て其の語源を言へば猶といふは獸の名て其の獸は非常に疑ひが深いために人の音がすれば豫じめ木に登つてこれを避け愈々安心といふことにならぬうちは木から降りないといふソコで猶豫といふことは疑惑といふ意味になるのであるサテ此の

如く學人の機根も心行も明かに辨驗するといふことは是れ頂門上に眼あり肘臂下に符あるに不ざれば往々當頭に蹉過せん頂門上に眼あるといふは着眼の高いといふこと肘臂下の符といふは支那の道士といふ日本の昔の山伏とか修驗者とかいふやうな者が符すなはち守札の如きものを人に與へて之を肘臂に掛けてさへ居れば如何に困難なる事でも自由に辨ずることが出来るといふやうなことを言ふ其れを圖悟が載れ半分に俗諺を持ってきて文を成したまでのこととて深い意味は無い要する所は餘程の力ある人でなくては當頭に蹉過す其の場合に臨んでから失敗することが多いと言ふのである然るに只如今見聞味まざらず聲色純真と其の學人が見聞する所に少しも味ます所なく其の聲色すなはち姿にもせよ言葉にもせよ純真と誠に立派なことであつたならば其れは何うしたものであらうぞ且く道へ是れ皂か是れ白か是れ曲か是れ直か誰が見ても此れは曲である直であると分るほどの者ならば何の世話もないが見聞味まざぬに依て此れが正であるとも定められず聲色純真でないから此れは曲であるとも決しられまいぞ這裡に到て作麼生が辨ぜんコゝに於て確實に辨別がつくのでなくては眞箇本分の衲僧と

は言はれぬぞと言ふて本則を呼び出す。

**本則** 舉文殊問無着。近離什麼處。不可不借問。○無着云。南方頭草。○何必出外。○何必出外。○何必出外。

比丘。少奉戒律。殊云。南方佛法。如何住持。○若問別人。則稱生。○猶掛屏。○猶掛屏。

着云。末法。百。○是野狐精。○是野狐精。○是野狐精。

無着問文殊。此間如何住持。○轉。○轉。○轉。

龍蛇混雜。殊云。多少衆。○還我話頭。○還我話頭。○還我話頭。

○頭。○頭。○頭。

着云。多少衆。殊云。前三三後三三。

無着禪師といふは傳記が明かてなく色々な説がある、其中の一説に據れば此人は

曹溪下の人でもなく荷澤下の人でもない第四祖大醫道信和尚の法嗣に牛頭山の

法融といふ尊宿があつて無着は其法を嗣いだといふことである、曾て五臺山に遊

んで文殊菩薩と懇意になつたと見えて折々文殊との問答があるが、此れは初めて

五臺山へ登るときに途中で日暮になつたから路傍の或る寺で宿を借りた、然るに

其の寺の老主人は尋常の僧ではなくて徹夜いろ／＼の問答をしたことと見える

が翌朝暇乞して出かける時に門外まで童子が送つてくれたに依て、無着は此寺は

何といふ寺で主人公は如何なる人であるかと問ふたら、其童子が門の左右に立て居

る密迹金剛すなはち仁王を指さして其後を見ろと言ふた、無着は仁王の後を見や

うと思ふて其方へ向いたと同時に寺も門も童子も消えて無くなつて、只茫々たる

野原であつたといふ怪談である、其れが即ち五臺山の文殊菩薩であつて其夜の問

答が即ち此の本則であると云ふのであるから、誰も外に證據人は無い唯無着が自

分獨りて斯うであつたと云ふまでのことであつて見れば、此れは無着和尚自己心

中の文殊と問答したので他人の事には關らないのである、仍て風外老師は此れ

は全分無着の示衆と見るが好いと云はれてある、然るに問答の言葉の上では無着

と文殊との間に大層な階差が違ふてあるやうに聞える、其れが即ち凡夫の情見て

あるからソコに氣を附けて參究せんければならぬのである、とにかく先づ一通り

問答の言葉をサラリと見てゆかう、文殊が無着に問ふ近離什麼の處ぞ例の通り何

處から來たかと言ふ、圓悟が借問せずんばあるべからず又也、た這箇の消息あり先

づ來處を問ふて其の脚下を勘檢せねばならぬと言ふ。無着云く南方コレは曹溪の六祖が嶺南の人であり其他にも縁故があつて支那の佛法は南方から廣まつたから無着も是れまで南方で修行をして居りましたと正直に答へた。着語に草窠裡に出頭す草深い處から第二第三に落在した面の出しやうぞと罵しるけれども何ぞ必しも眉毛上に擔向せん是非ともに向上本分の孤峯頂上から答へねばならぬと云ふわけもないと救ふ。しかし本分から見れば大方無外東西も南北もあるべきては無。然るに什麼としてか却て南方あると咎めた。殊云く南方佛法如何が住持すハ、南方かな御座つたか其の南方の佛法は何んな住持のしかたであるかナ、の住持は寺院の住持といふこととは違ふ。佛法を何うして保護維持させて居るかと言ふのである。着語に若し別人に問は、則ち禍ひ生ぜん無着のやうな正直淳朴な人であるから好いが相手に依ては三十棒を喰はせられるであらうぞと言ふ。猶ほ齒牙に掛ること。在り文殊もヤハリ佛法といふやうなことを氣に掛けて居るか惜いことよと云ふ。着云く末法の比丘少しく戒律を奉す格別な知識も居りません。が少々戒律を護つて居る坊さんがあると申すぐらゐることとと相變らず

正直一片の答である。着語に實頭の人は得がたし此の無着のやうに何處までも正直な人は容易に得られないと言ふ。殊云く多少の衆ぞ其の戒律を奉する人といふのは幾人ほどあります。か。圓悟が齒がゆいと云ふ調子で當時便ち一喝を與へん我ならば大喝一聲叱りつけてやるにと威張る。其實は多少の衆ぞといふ一拶に無着は拶倒し了られたのであると言ふ。着云く或は三百或は五百どこまでも無着は正直無邪氣に答へる。着語に盡く是れ野狐精ならん三百あつても五百あつても野狐の化物ばかりであらう其れを大層らしく或は三百或は五百と誇り顔に言ふは果然として漏返到底役には立たぬぞと無着は全く無邪氣であると思へば何ぞ圓らん従前の守勢を俄かに攻勢に轉じて無着文殊に問ふ此間如何が住持すサア拙僧の是れまで居りました南方では今申したやうなわけ、三百五百の比丘たちが堅く戒律を奉じて正直に行ひすまして居ることでありすが此の五臺山あたりの佛法は如何やうな護持のしかたでありますぞと反問に及んだ。着語に拶着うまく突き込んだぞとけしかける。便ち鎗頭を廻轉し來れり今までの受け太刀とは全く様子が變つてきたとほめる。殊云く凡聖同居龍蛇混雜コレが即ち文殊一流の大乘